

とある魔法の魔導司書(ブックキーパー)

神の槍

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

『魔法先生ネギま』の世界に転生し色々とやらかした主人公が、今度は『とある魔術の禁書目録』の世界で頑張るお話。『魔法先生ネギま』の原作知識は無くても大丈夫なように作っているつもりです。――超能力者と魔術師が存在する世界に一人の『魔法使い』が混ざり込む。転生者である事をバラせない理由とは?

魔術と科学、そして魔法が交差する時――物語は“変わる”!!

目 次

転生＆禁書目録編

とある s s のプロローグ	1
とある純白の神羊少女（スケープスター）	
とあるスターの虚栄笑々（ダミーフェイス）	
とある約束の絶対守護（ガーディアイクス）	
とある神父の人間狩り（ヒューマンフレゼンツ）	
とある目録の秘密告白（シクレプレイス）	
とある噛みつきの定番定着（テンプレキヤツチ）	
とある聖人の実力証明（インディード）	
とある戦闘の終結同盟（アウトフレンド）	
とある病魔の対策治療（デイスピクシイクシール）	
とある小部屋の大規模戦闘（ビックスケール）	
とある代償の過去放棄（タイムオーバー）	
閑話休題（1）	
とある平日の右往左往（アイキヤツチ）	
とある虚偽の迷子案内（スクランブル）	
とある科学の必然再会（カードセレクト）	
とある初仕事の後半奮闘（ビーパート）	
虚空爆破編	
とある事件の前兆活劇（ビフォーブル）	
とあるデパートの少女演説（レディスピーチ）	
とある事件の攻防転身（チエンジヤースナップ）	
とある廃墟の軽銀爆物（アルミボマード）	

212 199 188 179

165 155 141 128

116 102 92 85 76 62 51 42 30 13 4 1

転生＆禁書目録編

とある s s のプロローグ

『……あれれ？ 何で俺意識あんの？ w h y?』

全身を純白の羽へと分解され、世界の犠牲となつて死んだ筈なのに……俺は生きていた。

辺りを見渡しても白、白、白。真っ白だ。本当に白以外なにもない。白い画用紙の中心に書かれた点のように、俺は立っている。状況が理解できない。

でも何故か、『懐かしい気』がした。

そう、確かこの感覚を、俺は知っている。俺がトシキ・スプリングフィールドとして転生する前。

つまり、

『まさか……また転生するとか？』

「その通りじやよ。相変わらずアホな面しとるのう！」

突然、声が聞こえた。それも頭上からだ。

上を見上げると案の定、神さ——ゲフンゲフン——いや、駄神がそこに。ブカブカ浮いていた。

「何故言い直した!？」

『うるせーよ駄神。さつさと俺の前に降りて來い』

「超酷いっ!! まつたく、ワシに向かつてそんな口を叩くのはお前さんだけじゃわい」

ブツブツ文句を言いながら駄神は俺の前へ下りる。前と同じで白いローブを着て神秘的な恰好をしているが、右手で持っている酒瓶が全てを台無しにしていた。

俺はやや疲れたように、

『俺をまた転生させるとか言つてたけど、そんなに一人を何回も転生させてもいいのかよ。なんか問題とか起きねーの？』

「大丈夫じゃ。ワシの権力を持つてすればどんな問題ももみ消せるから」

『今もみ消せるつて言つたよこの駄神!?

「あーもーうるさい。ワシは今二日酔いで頭が痛いんじや。叫ぶのはよせ」

『そう言いながら酒ガブガブ飲んでんじやねえよ!!』

「目の前の馬鹿が何か言つてるけどワシは全部スルーします。それで次の世界なんじゃが」

『 』

「あア？ そんな事もわからんねーの？ お前さんがたつた10年で死んじ
まつたせいでワシの暇つぶしにならなくなつたせいに決まつとる
じやろ」

たぞ！」

死ねよ。

に出すのもダルくなつてきた。

に転生について説明すんぞー】

平凡な人生を送りたい。

貰う」「

俺が死ぬ気で修行して手に入れた力を奪い取るつもりですか!?』

『そうじやけど、じゃねーよ！それだけは断固拒否する！』

『人の話を聞けええええええええ!!――はあ。わかつたよわかりましたねわかりましたよ!好きにしろこのやろー!』

もう自暴自棄になつた俺。駄神はそれらを全て無視して言う。

「お前さんの魔力量10分の一ね」

『10分の一いいいいいいいい!それは無いよ、絶対に無いよ!』

そんなの極大呪文一発撃てるかどうかじやん！それだけは嫌

「まあ落ち着けお前さんや。弱体化と言つても魔力量が激減するだけ
で体術・魔法技能はそのままじやから大丈夫じやよ」

『その魔法技能が奪われかけてるんですけど!?』

しゃーい

「なーに、心配するな。ちゃんと『鍵』も付けとるわい」
駄神は穴に向けて、小さく呟くのだった。

とある純白の神羊少女（スケープシスター）

『へぶしッ!?』

長い長い落下状態がやっと終わつたと思つたら、コンクリとの感動のご対面。

……惨めすぎんだろう俺…。これでも世界を救つた英雄なのに…。非常に暗い気持ちになりながら立ちあがり、周囲を見渡す。左右にマンションのような建物が見えた。日光が反射してきて暑い。どうやら夏のようだ。

てゆーか、今気づいたけど、

『赤ちゃんスタートじゃないの?』

てつきりまた赤ん坊からやり直すのかと思っていたが、今回はそのまま引き継ぐらしい。

マンションの窓で確認したら、容姿も何一つ変わっていない。自分から見ても中性的な顔が映つている。赤髪も健在だ。年齢は……16くらいかな。

茶色いローブを着てるから旅人に見えなくもない。
と、ここで不意に、

『そうだ魔力！確認しないと……』

…………ええう。マジで減つてる。いや、激減してる。ホントに10分の一ぐらいになつてそうだ。

これじゃあ魔力の節約を第一に考えないとな。早速、常に纏つくる魔法障壁を解除する。

はあ、先が思いやられるなあ。

『つてかここはどこなんだ？マンションがあるつて事は街か何か？』
もう一度辺りを見渡す。だがここからではマンションに邪魔をされてそれ以外何も見えない。

もしかして案外、俺が住んでいた世界と似たような世界なのかもと希望が湧いてきた。

俺が密かに気合いを入れていると、

「きやあああああああああああ！」

『へ?』

頭上から甲高い叫び声が聞こえてきた。慌てて上を見上げる。

そこにはおそらくマンションの屋上から落ちてきた少女——なにやら白い服を着ていてる。

『転生早々にトラブルかよ。いや、助けるけどさ』

軽口を叩きながら『戦いの歌』(肉体強化魔法)をしてコンクリートを踏みしめ飛び上がる。

樂々少女のいる高さまで到達し、抱き抱え、一番近くのベランダに着地。

魔力節約を思い出し、即座に『戦いの歌』を解除する。

ここでやつと少女が状況を理解したようだ。改めて抱きかかえている少女を見ると、歳は十四か十五くらいか。外国人らしく、肌は純白で髪の毛も白——ではなく銀髪だろう。かなり長いらしく、仰向けで抱き抱えられてる(いわゆるお姫様抱っこ)状態で分かりにくいが、腰くらいまであるのではないだろうか?

そしてさつき白いと表現した服装は、

『うわ、本物のシスターさんだ……って見た事あるがな。いや、白い修道服は始めてか?』

思わず自分ツッコミ。それにしても白い修道服とは珍しい。普通、修道服は黒だと俺の知識ではなっているのだが。

さらによく見ると、修道服の要所要所には金糸の刺繡が織り込まれている。同じデザインの服でも色付けが違うだけでこうも印象が変われるのかと思う。これじゃまるで成金趣味のティーカップみたいだつた。

ピクン、と今まで硬直していた女の子の顔が動いた。顔を動かし俺の顔へと視線を向ける。

女の子は割と可愛らしい顔をしていた。白い肌に緑色の大きな瞳がアクセントとなつていてる。

と、ここでやつとこさ女の子の小さな唇が動いた。
「おなかへつた」

『は?』

思わず俺は、この世界は俺の知らない言語が共通語として繁栄していて、それを俺が聞き間違えたかと思った。

しかし、そんな幻想は無残にも少女によつて撃ち砕かれる。

「おなかへつた」

『…………』

「おなかへつた」

『…………』

「おなかへつたって言つてるんだよ？」

ヤバイ。今すぐでもこの子をここに置いて逃げなくなつてきた。この子はアレだ、絶対にアレだ。関わつたら厄介事に巻き込まれる奴だ。

俺が絶句しているとは知らずに、少女はどうにか自分の意思を伝えようとしてくる。

「もしかして日本語が分からぬの？顔から見て英国人っぽいから英語の方がいいのかも」

『…………いや、日本語で良い』

遂に耐えきれずに返事をしてしまつた。少女はそれだけで表情を輝かせた。

俺は今にも逃げ出したい気持ちを抑え込みながら、

『あのー、今さつきお前屋上から落ちそうになつてたんだぜ？それを俺が助けてこのベランダにいる訳で。その後の第一感想がおなかへつたつてどーゆー事？』

「だつておなかへつたんだもん。あ、さつきはありがとうね。おかげで助かつたんだよ」

……なんだろうこの子。今さつき死にかけたつていうのに恐怖がないのか？もしくはそういう状況に『慣れている』のか。

次の返答に困つていた所で、ガラツと窓が開いた。

音につられて俺も少女もそちらを見る。そこには布団を抱えた男——おそらく同い年ぐらいだろう。ツンツンに跳ねた黒髪が特徴的な少年がそこに立つっていた。

『…………』

「…………」

沈黙するベランダ。そりやそうだろう。水知らずの他人がいきなりベランダに現れたら誰でも驚く。しかもお姫様だつこしているされている状態だつたらなおさらだ。

あ、布団が少年の手から落ちた。

いつまでも続くと思われた沈黙を、白い少女は撃ち破った。

「おなかへつたから、おなかいっぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

『いや、意味わかんねーよ』

見知らぬ少年と心が通じ合つた瞬間だつた。

「まずは自己紹介をしなくちゃいけないね」

『おう、そうだな』

「……いや、まずは何であんなトコにあんな恰好でいたのかを――」

もうメンドクサいから少女のペースに合わせる事にした俺。名前は前世と変えようと思う。スプリングフィールドとか長くてめんどい。

『先に俺が言うな。名前は神槍トシキ。ファミリネームは東洋系だけどハーフじゃない。純血の英国人だ』

『私の名前はね、インデックスって言うんだよ?』

『誰がどう見ても偽名じやねーか! 大体なんだインデックスって!』

『目次』かお前は! それとそこの男か女かわからない奴! 先に性別を言いやがれ!』

『男です。それと今度俺のコンプレックスである女顔の事をいじりやがつたらボコるので覚悟しろ』

『私は見ての通り教会の者です。ここ重要。あ、バチカンの方じやなくてイギリス政教の方だね』

『ボコるとか意味わかんねーしスターの方はこつちの質問は無視かよ!』

『あ、ローブ脱いでいいか? もう暑くて我慢できないんだけど』

「うーん、禁書目録（インデックス）の事なんだけど。あ、魔法名なら
Dedictus545だね」

俺は若干、魔法名という言葉にひつかかりを感じたが今は情報収集
に徹する事に決めた。

「もしもし？もしもしーし？一体ナニ星人と通信中ですかこの電波たち
はー？」

聞き耳立てないツンツン頭の少年が小指で耳をほじくつていると、
インデックスはガジガジと自分の親指の爪を噛み始めた。

癡、なんだろうか？

そもそも一体どうしてガラステーブルを挟んで、僕たち結婚します
的な感じで正座で向かい合つてんだろうと思う。ちなみに俺と少女
—改めてインデックスが隣同士で、ツンツン頭の少年があちら側
だ。

つてかなんで俺がこんな電波シスターと仲間扱いになつてるんだ
と思う。

……とりあえずローブは脱いでおこう。

「それでね、このインデックスと命の恩人であるこの人におなかいっ
ぱいご飯を食べさせてくれると嬉しいな」

「何でだよ！ここでお前らの好感度上げてどーするよ？変なフラグが
立つて見知らぬ外国人二人組ルート直行なんて俺あ死んでも嫌だか
らな！！」

「えつと……流行語（スラング）、なの？ゴメンなさい。何を言つてい
るのか分からぬかも」

『俺は分かるけどいちいちツッコミに付き合うのがめんどいからバス
で』

「ツッコミを根本から否定されたつ!!」

「おお、意外とノリがいいじゃないかウニ頭くん（今命名）。

「けど、このまま外出たらドアから散歩で行き倒れるよ？」

「……いや、行き倒れるよ？じゃなくて」

「そしたら最後の力を振り絞つてダイイングメッセージを残すね。君
の似顔絵付きで」

「なん……ツ」

「仮に誰かに助け出されたら、そこの部屋に監禁されてこんなにやつれるまで虐め倒されたって言つちやうかも」

『こんなボロいローブしか着るモノをくれなかつたとも言うかもな』

「言うかもなじやねーよ！ つてかローブがボロいのは俺には一切関係ねえだろ!!』

「？」

インデックスが初めて鏡を見た子猫みたく首を傾げる。

……うん、やっぱこの子凄く腹黒いと俺は思うんだ。

やるよ、やつてやるよーつ！ とウニ頭くんはドカドカ台所へ向かう。

ウニ頭くんがフライパンに野菜を入れて、火で熱し始めた所でこう訊いてきた。

「でさー、何だつてお前らはベランダにいた訳？」

「私の意思でいた訳じやないんだよ？」

「じゃあそつちのお前は何で女の子抱えてベランダにいたんだよ？ 天から舞い降りたんかお前」

『……似たようなモンかもな』

冗談のつもりでいつたであろうウニ頭くんは、フライパンを止めて思わず俺と少女の方を振りかえった。

俺が言う前にインデックスが言つた。

「落ちたんだよ。ホントは屋上から屋上へ飛び移るつもりだつたんだけど」

屋上？ とウニ頭くんは天井を見る。

でも何でインデックスはそんな危険な事をしたんだろう？ と俺は首を傾げる。

ベランダを見ればわかる通りビルとビルの隙間は二メートルぐらいしかない。確かに、走り幅跳びの要領で屋上から屋上からへ飛び移る事もできるとは思うが……。

「でも、八階だぜ？ 一步間違えば地獄行きじやねーか」

「うん、自殺者にはお墓も立てられないもんね」インデックスはよく分

からない事を言つて、

「けど、仕方なかつたんだよ。あの時はああする他に逃げ道がなかつたんだし」

『逃げ、道?』

俺は思わず呟いた。不穏な言葉にウニ頭くんも眉をひそめると、インデックスは子供のように「うん」と言つて、

「追われてたからね」

『…………』「…………」

フライパンを熱している音が、ピタリと止んだ。

「ホントはちゃんと飛び移れる筈だつたんだけど、飛んでる最中に背中を撃たれてね」

インデックスと名乗る見知らぬ少女は、笑つてゐるみたいだつた。「ありがとね。君があの時抱きかかえてここに着地してくれなかつたら、危なかつたかも。そつちの君もゴメンね。急にベランダに現れたりして」

自嘲でも皮肉でもなく、ただ二人の少年に對して頬笑みかけるために。

「撃たれたつて……」

「うん? ああ、傷なら心配ないよ。この服、一応『防御結界』の役割もあるからね」

『ツ』

『?』

——『防御結界』。

その言葉に思わず俺は眼を見開く。やはりこの世界にも魔法は実在するらしい……この少女の言つてゐる事が正しければ。

ウニ頭くんは何の事かわからず、「防弾チョッキの事か?」とか呟いている。

俺は、改めて少女を見る。やはり白い修道服を着てゐる事を除けばただの女の子にしか見えない。ついでに言えば魔力も感じない。

ホントに撃たれたのだろうか? 何もかも戯言妄想ウソつぱちの方が現実味があると思う。

けれど、

この少女は、確かに屋上から落ちていた事だけは本当なのだ。
もし、仮に、この少女の言う事が全部本当の事だったら、

彼女は一体『誰に』撃たれたのだろう？

この世界に来たばかりの俺には推測する事しかできないが、考
える。

追われてたからね、と。

そう言つて微笑むインデックスの作る表情の意味を。

おそらく俺もウニ頭くんも、インデックスが一から十まで説明し
たつて半分も理解できないだろう。

だけど、たつた一つの現実（リアル）。

屋上から落ちかかっていたという、俺がいなかつたら人体より固い
アスファルトに叩きつけられていたという現実だけは、胸を締め付け
るように理解する事が出来た。

「ごはん」

と、インデックスが凄い嬉しそうな顔でウニ頭くんが作つてある野
菜炒めを眺めている。

そこで何故かウニ頭くんが物凄いで身もだえてるのが分かつた。

「あ、あーっ！け、っけどアレだ！そんなにお腹すいてるならこんな残
り物ぶつ込んだいかもにますそな男料理じやなくてキチンとファ
ミレス行こう！何なら出前でもいいし！」

「そんなに待てないよ？」

『そこまで気回さなくて大丈夫だぜ？』

「……あ、かつ！」

「それに、私たちのために無償で作つてくれたご飯だもん。美味しく
ない筈がないんだよ？」

インデックスはグーで握つたハシでフライパンの中身をすくつて
口に運んだ。

ぱくぱく。

「ほら、やつぱりまづくなんかない」

「……あ、ですか」

もぐもぐ。

「あれだよね、さりげなく疲労回復のためにすっぱい味付けしてる所が憎いよね」

「げつ！すっぱ！」『ん？野菜炒めがすっぱい？』

おかしい。一通りウニ頭くんの調理は見ていたが、ドレッシングは使つていなかつた。ホントにただ野菜を炒めただけの筈だ。

それなのに……すっぱい？

「君も食べるよね？」

満面の笑みでフライパンを差し出された。……なんだろう、とてつもなく嫌な予感がする。

もしかして、野菜炒めと称した生ゴミをぶち込んだんじゃ……？

俺はギロリとウニ頭くんを睨みつける。それだけで彼は悪戯がバレた子供みたいに体をビクつかせた。

ああ、これ当たりだな。

悟った俺は一層睨みを強くして彼を睨みつける。遂に耐えきれなくなつたのか、彼は、

「……ぐ、…う、ううおおおおおおおおあああああああ！」

グバア！と彼は音速でフライパンを取り上げる。ものすごく不満な顔をするインデックスに、地獄には俺が一人で落ちると彼は心に誓う。

「君もおなかへつてるの？」

「……は？」

「そうじやないなら、おあずけなんかしないで食べさせて欲しいかも。まだ命の恩人の人も食べてないし」

ちよつぴり上目遣いでハシの先をガジガジ噛むインデックスを見て、ウニ頭くんは悟りを開いた。

神様は言う、責任持つてお前が食え。
完全に、自業自得だつた。

とあるシスターの虚榮笑々（ダミーフエイス）

我らが主人公、神槍トシキとインデックスと名乗る少女はビスケットをガジガジ噛んでいた。神槍は普通にパクパク食べているが、インデックスは小さなビスケットを両手で持っているため、どこかカリスマ的な感じがする。

「で、追われてるつて。お前一体ナニに追われてる訳？」
地獄から帰つて来た上条は、とりあえず一番のネットを聞いてみた。

神槍もそれを知りたかつたため、静かにインデックスが答えるのを待つて いる。

「うん……」 ちょっと喉が渴いたような声で、
「何だろうね？薔薇十字（ローゼンクロイツ）か黄金夜明（S・M・）か。その手の集団だとは思うんだけど。名前までは分からないかも。……連中、名前に意味を見出すような人達じやないから」

「連中？」

上条は神妙に聞く。という事は、相手は集団で組織だ。

「魔術結社だよ」

魔術？ 魔法じゃなくて？ と尋ねようとした神槍だったが、その前に

上条がふざけた調子で言う。

「はあ。まじゅつって……はあ。なんじゃそりやあ！ ありえねえつ

!!

「は、え、アレ？ あ、あの、日本語がおかしかった、の？ マジックだよ、マジックキヤバル」

必至にインデックスは理解してもらおうとするが、上条はやはり聞き耳持たないで、

「なに、なーに？ それって得体の知れない新興宗教が『教祖サマを信じない人には天罰が下るのでせう』とか言ってお茶飲ませて洗脳したりする危ない機関の事？」

「…………そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

「あー」

「…………そこはかとなく馬鹿にしてるね？」

「……。ゴメン、無理だ。魔術は無理だよ。俺も発火能力（パイロキネシス）とか透視能力（クレアボヤンス）とか色々『異能の力』は知ってるけど、魔術は無理だ」

一人、神槍は二人の会話を黙つて聞いていた。とにかく今の神槍には分からぬ事が多すぎる。

なんで魔法じゃなくて魔術とインデックスが言っているのか分からぬし、上条の言う発火能力とかいうのもまったく分からぬ。そんな訳で、神槍は黙つて二人の会話を聞いている事しか出来ないのだ。

「学園都市（こつち）じや超能力なんて珍しくもねーんだ。人間の脳なんざ静脈にエスペリン打つて首に電極貼り付けて、イヤホンでリズム刻めば誰だつて回線開いて『開発』できちまう。一切合財が科学で説明できちまうんじや誰だつて認めて当然だろ？」

「……よくわかんない」

「当然なの！当然なんだよ当然なんです三段活用！」

「……。じゃあ、魔術は？魔術だつて当然だよ？」

むすつと。お前ん家のペツトは駄ネコだと言われたように、インデックスクはふてくされた。

ここで神槍にも質問が飛んできた。

「つてかお前は一体なんなんだよ？見たトコ学園都市の人間じやないみたいだし、それなのに女の子一人抱えて7階の高さまでジャンプしたらしいし。よく考えたらお前の方がわかんない事だらけじやねーか」

『うーん』と神槍は困つたように唸つて、難しい顔で、

『二人にそれぞれ質問するけど。まずインデックス、お前の言つてる『魔術』は『魔法』とどう違うんだ？』

インデックスは味方が現れた！とでも言うように顔を輝かせて、得意げに、

「要は言い方の問題かも。魔術つて呼ぶ人もいるし、魔法つて呼ぶ人

もいるんだよ。つてどーしてそんな事聞くの?」

そりや、と神槍は当たり前のようだ。そんな事もわからなかつたの?
?と言つてゐるようだ。

『俺が魔法使いだからだよ』

「げっ! やつぱお前も工セ魔術師の仲間なのかよ」

『違うつての。俺は魔法使いであつて魔術師じやねえ』

「そんなの一緒だろ? インデックスも言つてたじやねーか。なあお前
さつきそう言つ——?』

上条は最後まで言えなかつた。さつきまでふてくされていたイン
デックスが、まるで神槍と距離を取るようにして身構えていたから
だ。

そこにさつきまでの彼女はいなかつた。いるのはただ、『敵』から逃
げようとする『餌』だけだ。

『ん? どうしたんだお前?』

神槍が尋ねると、彼女はより一層身構えた。上条は訳が分からずど
うしようか迷つてゐる最中だ。

ここでようやく、神槍は何故彼女が自分をこんなにも恐れてゐるの
か分かつた。

彼女は今までずつと魔術師から逃げてきた……らしい。おそらく、
一ヶ月やそこらの話ではないだろう。

それだけ長期間魔術師から逃げていれば、敵意があろうとなかろう
と恐怖の対象になるのは仕方がない。

だからこそ、神槍は落ち着かせるようなゆつくりとした口調で、
『あー、とりあえず落ち着けインデックス。俺はお前を襲つたりし
ねーよ。俺をどこぞの魔術結社の連中と一緒にすんな』

「…………」インデックスはたっぷり時間をかけて、

「…………ホント? 私を、私の中身を狙つたりしない?』

『中身? それがどんなモンか知らねーけど。……約束する、俺はお前
を襲つたりしない。ずっとお前の味方で居続ける』

神槍は何の躊躇もなく、戸惑いもなく、そう言い切つた。

上条はその様子をただ呆然と眺めているだけだった。眺めている

事しか、できなかつた。

神槍の纏う雰囲気が一瞬だけ変わつたのが分かつたからだ。どこにでもいそうな『一般人』から、自分には想像もつかないような戦いを潜りぬけてきた『何か』のソレへと。

インデックスもそれを感じ取つたのか、身構えるのを止め、神槍の隣へ戻つた。その表情はさきほどと同じ、ただの女の子が笑つているようにしか見えなかつた。

「…………初めてかも。こんな人……」

本当に嬉しそうに笑いながら、彼女は小さく、本当に小さく咳いた。だからその咳きは誰にも届く事なく、虚空へと消えて行つた。

神槍は彼女の様子が戻つたのを確認すると、今度は上条に質問する。

『お前さつき超能力とか言つてたよな？それって科学的なモノなのか？具体的にはどんな『力』が存在するんだ？』

「え？あ、ああ」上条はやつと立ち直り説明していく。

「さつきも言つたけど、超能力はここ——学園都市じや珍しくもねーんだ。『ある例外』を除けばここで暮らしてゐる学生は『異能の力』に目覚めてる。炎を掌から出せる奴もいるし、風を操れる奴もいる。中には十億ボルトの電撃を撃てる奴なんかもいる」

『凄いな。十億ボルトか……雷と一緒にいやねーか』

と、今まで話の蚊帳の外にいたインデックスが乱入してきた。

「魔術はあるもん！」

『…………』

どうにか話を自分の専門分野にもつていきたいらしい。まあ確かにツラいものがあるよな、話についていけないつて。

上条が流石に可哀想になつたのか、嫌々渋々切り出した。

「まあ良いけど。で、何でソイツらがお前を狙つてるつて——

「魔術はあるもん」

「…………」

「魔術はあるもん！」

どうやら意地でも認めて欲しいみたいだ。視線で神槍に援護を求めているが、彼は無視した。いくらなんでもいきなりベランダに現われてボク魔術師です、と言つても信じてくれないと思う。

「じゃ、じゃあ魔術って何なんだよ。手から炎が出るのか、ウチの時間割り（カリキュラム）受けなくても出せんのかあ？ 何ならそこで一丁見させてくれよ。そしたら信じる事ができるかもしんなのから」「魔力がないから、私には使えないの」

「…………」

『…………』

カメラがあると気が散るのでスプーンを曲げられません、というダメ能力者を見た気がした。

「そうだ！ としきも魔術師だから何かこの人に見せてあげるかも！ そうすれば、ばんじかいけつなんだよ！」

インデックスにすがりつかれる神槍。

無駄だと思うけどな、と咳きながら彼は右手の人差し指を立てて、
『火よ灯れ』
アールデスクット

「えっ!?」

突如現れた人差し指の先に灯っている炎を見て、上条はギョツッとしましたが、段々と胡散臭いインチキを見ているような顔になつた。

「発火能力者だろ、お前」

やつぱりなど、心の中で呴いて、神槍はインデックスに言う。
『インデックス、いくら何でもいきなり魔法を見せても信じてもらえないと思うぜ？ 超能力なんて言う逃げ場所があるなら尚更な』

「…………けど、魔術はあるもん」

ハア、と上条はため息をついた。

「じゃあ、”仮に” 魔術なんてモノがあるとして、」

「”仮に”？」

「あるとして、」上条は無視して続けた。

「お前がそんな連中に狙われてる理由ってのは何なんだよ？ その服装となんか関係あつたりすんの？」

『それは俺も気になつてた』

上条と神槍が言っているのは、インデックスの着ている純白のシリク地に金糸の刺繡という超豪華な修道服のことだ。

「……私は、禁書目録（インデックス）だから」

『は？』

「私の持つてる、一〇万三〇〇〇冊の魔道書。きっと、それが連中の狙いだと思う」

.....

「……またまた、よく分からぬ話になつてきたんですが」

「だから、何で説明していく度にやる気が死んでいくの？もしかして飽きっぽい人？」

「えっと、整理するけど。その『魔道書』つてのが何なのかよく分からぬけど、とにかくそれつて『本』なんだよな？国語辞典みたいな」「うん。エイボンの書、ソロモンの小さな鍵、ネームレス、死者の書。代表的なのはこういうんだけど」

（どれもこれも聞いた事ない魔道書ばつかだ。やっぱ前いた世界とは違うみたいだな）

神槍が眉をひそめていると、上条は言う。

「いや、本の中身はどうでもいいんだ」

上条が言う前に、神槍が言った。

『一〇万冊つて——どこに？』

最初は空間魔法でも使つて、創り出した空間の中に仕舞つているのかと思つたが、彼女には魔力がない。つまり魔法が使えないのである。その可能性はあり得ない。

それに一〇万冊なんて言つたら図書館丸々レベルだ。となると、「どつかの倉庫の鍵でも持つてるつて意味なのか？」

後は上条の言つたその可能性しかなくなる。しかし、インデックスはふるふると首を横に振つて、

「ちゃんと一〇万三〇〇〇冊、一冊残らず持つてきてるよ？」

は？と神槍と上条は眉をひそめて、

「……バカには見えない本とか言つんじゃねーだろーな？」

「バカじやなくとも見えないよ。勝手に見られると意味がないもの」

インデックスの言葉は何故か飘々としていて、上条はバカにされた気分になつてくる。

神槍は神槍で、理解できずに首をかしげるばかりだ。

ここで遂に上条は、

「…………うわあ」

今まで我慢してきたが、これ以上は限界だと絶句した。

ここまでくると誰かに追われているというのも嘘なんじやないかと思えてくる上条。

「……超能力は信じるのに、魔術は信じないなんて変な話」むすつと、インデックスは口を尖らせて、

「そんなに超能力つて素晴らしいの？ちょっと特別な力を持つてるからって、人を小馬鹿にして良い筈がないんだよ」

……。

「ま、そりやそーだわな」上条は小さく息をつき、

「そりやそうだ。お前の言う通りだよ。こんな一発芸を持つてる程度で、誰かの上に立てるだなんて考え方間違ってる」

上条は自分の右手に視線を落とした。

そこからは炎は雷もでない。閃光も爆音も起きないし、手首に変な模様が浮かび上がる訳でもない。

だが、それでも上条の右手はあらゆる『異能の力』を無力化させれる。力に善悪は問わず、神話に出てくる神様の奇跡（システム）さえ、問答無用で。

「ま、この街に住んでる人間ってな能力持つてる事が一個の心の支えになつてつから、その辺は大目に見て欲しいかな。ってか、俺も能力者の一人なんだけど」

『へー、そうなのか。具体的には何が出来るんだ？』

「……えっと。何がって言うか」上条はちよつと戸惑つた。

「えつとな、この右手。あ、ちなみに俺のはドーピングじゃなくて生まれた時からなんだけど」

「うん」

「この右手で触ると……それが異能の力なら、原爆級の火炎だろうが

戦略級の超電磁砲だろうが、神の奇跡だつて打ち消せます、はい」

『……………えー?』

「…………つかテメエら何だその幸運を呼ぶミラクルストーンの通販見てるみてーな反応は?」

「だつてー、神様の名前も知らない人にー、神様の奇跡だつて打ち消せますとか言われてもー」

『俺も似た様な能力は知つてつけど、そんなのは超希少なんだぜ?それを偶然落ちたベランダの住人が持つてるなんていう偶然は信じられねーよ』

「…………くつ。む、ムカつく。こんな、魔法はあるけどアナタには見せられませんなんて言うインチキ魔法少女&発火能力者のくせにボク魔法使いなんて言う男に小馬鹿にされた事がここまでムカつくとは……」

と、上条当麻タマシイの咳きにインデックスもカチンときたみたいで、

「い、インチキじゃないもん!ちゃんと魔術はあるんだもん!」

「じゃあなんか見せてみろやハロウイン野郎!ソイツを右手でぶち抜きや俺の幻想殺し(イマジンブレイカー)も信じるしかねーんだろ、このファンタジー野郎!」

「いいもん、見せる!」むきーつ!という感じでインデックスは両手を振りあげ、

「これつ!この服!これは『歩く教会』っていう極上の防御結界なんだからつ!」

インデックスが両手を広げて強調しているのは、例のティーカップみたいな修道服だ。

「何だよ『歩く教会』つて、もう意味わかんねーよ!さつきから聞いてりや禁書目録だのあーるなんとかだの訳の分からない事言いやがつて、この不親切野郎!『説明』つてな何も分からない人に向かって噉み碎いて教えるモノなんだ、そこんトコ分かってんのか!」

「なつ……ちつとも理解しようと思わない人が言う台詞!?」インデックスは両手をブンブン振り回して、

「だつだら論より証拠！ほら、台所にある包丁で私のお腹を刺してみる！」

『はつ？！ちよ、インデックス！？』

流石に危険を感じた神槍が止めに入るが、既にヒートアップしている一人は誰にも止められない。

「じゃあ刺してみる！……なんて言う訳ねーだろ！火サスなんて展開は俺あ死んでも嫌だからな！」

「あ、信じてないね」インデックスはハアハアと肩を上下させ、

「これは『教会』として必要最低限な要素だけ詰め込んだ『服の力タチをした教会』なんだから。布地の織り方、糸の縫い方、刺繡の織り方まで全てが計算されてるの。包丁ぐらいじや傷一つつかないんだよ？」

「つかないんだよって……ハイそうですかじやあ刺してみますねなんて言う馬鹿いるか。少年犯罪推進野郎かお前は」

「どことん馬鹿にして……。これはトリノ聖骸布——神様殺しの槍（ロンギヌスのやり）に貫かれた聖人を包み込んだ布地を正確にコピーしたモノだから、強度は絶対なんだよ？物理・魔術を問わず全ての攻撃を受け流し、吸収しちゃうんだから。……さつき、背中を擊たれたって言つたけど、『歩く教会』がなかつたら風穴が空いてたところだつたんだよ。そこんとこ分かつて

る？」

あーあ、こりや止まんないな二人とも。もう好きにしゃがれと丸投げした神槍は、黙つてジト目の上条の言葉を聞く。

「……ふうん。つまりアレだ。それが本つつつ當に『異能の力』だつてんなら、俺の右手が触れてだけで木端微塵、つて訳だな？」

「君の力が本当な・ら・ね？うつふつふーん」

上等だゴルア!!と上条はインデックスの肩をがつちり掴んでみると、確かに雲を掴むような——柔らかいスポンジに衝撃を吸収されるような変な感覚がした。

『ん？仮に一人の話が全部本当だとしたら——あれ？』

今まで傍観に徹していた神槍に、一つの疑問が浮かんだ。

もし『歩く教会』が『異能の力』で織りあげられてるとしたら？
その『異能の力』を打ち消してしまうとしたら？

「まり服がバテバテに？」

上条もその事に気がついたようだ。

あまりに唐突な大人の階段の予感に彼は反射的に絶叫する。が

• • • • • • • • • •

.....

.....?

「…………ええええええ、え……つてアレ?」

起きない 何にも起きない

一息つく。

「ほらほら何が幻想殺しなんだよ。べつに何にも起きないんだけど

?

ふつぶーん、という感じで両手を腰に当てて小さな胸を大きく張る

次瞬間、プレゼントのリボンをほどくようにインデックスの衣服

かズトンと落ちた
修道服の布地を縫つて いる糸と いう糸が 綺麗に解けて、 本当に ただ
の布地に逆戻りして いる。

一枚布の、帽子のようなフードだけは服から独立していったせいか無事で、頭の部分にそれだけがのつかていると逆に切ない気持ちになつてくる。

はあ、と声にもならないため息をついてロープをインデックスにかける神槍。

直後、ふつふーんという感じで両手を腰に当てて小さな胸を大きく張つたまま凍りつく少女。

詰まる所、見知らぬ少年一人に真っ裸を見られた少女だつた。

インデックスと名乗る女の子は怒ると人に噛み付く癖があるらしい。

「痛つたー……。あちこち噛みつきやがって、合宿ん時の蚊かお前は？」

「…………」

返事はない。ただのしかばねのようだ。

素っ裸にローブと毛布を巻いただけのインデックスは、女の子座りのまま解けた修道服を安全ピンでどうにか復活させようと（無駄な）努力をしている。

どーん、という効果音が部屋を支配していた。

「つーか何でトシキには噛みつかねえんだよ？ アイツもお前の裸見ただろうが」

「トシキはローブ被せてくれたもん！ ザ・英國紳士なんだよ！」

「出会つて数分で格差が生まれてる……。つてかトシキ、お前やけに冷静だつたよな」

『いや、お子様の裸に興奮なんかする訳ないだろ？ ロリコニアの住人じゃあるまいし——つて何故に戦闘態勢に移行してんのインデックスさんツ！？』

直後、キュピーン！ とインデックスの両目が光り、神槍に飛びかかるつた。

かつた。

『い、痛い……。これマジで痛い……。当麻、今ならお前のつらさが分かつた気がする』

「おおつ！ 分かつてくれるのか俺の気持ち（不幸）を！」

ガシツと力強く握手する少年二人。傷の舐め合いで友情が生まれた瞬間だつた。

「できた」

ぐしごし鼻を鳴らしながら、インデックスは地獄の内職で何とか力タチを取り戻した真っ白な修道服を広げて見せた。

……何十本もの安全ピンがギラギラ光る修道服を。

「…………」

(汗)「

「えっと、着るのか?」

「…………」

(黙)「

『着るのか、そのアイアンメイデン?』

「…………」

(涙)「

「日本語では針のむしろと言う」

分かつたーッ!と上条は全力で床に頭突きして謝る。

「着る!シスターだし!!」

よく分からぬ叫びと共に、インデックスはイモ虫みたに丸めた布団の中でもぞもぞと着替えを始めた。ぴょこん、と毛布から唯一出ている顔だけが爆弾みたいに真っ赤だった。

「……あー、なんかその着替えのプールの授業を思い出すなー」

『確かに。こんな空氣だつた気がする』

「……何で見てるのかな?せめてあつち向いて欲しいかも」

「あんだよ別に良いじやんよ。さつきと違つて工口くねーだろ着替えなんて」

『そもそもここからじや何にも見えないし』

「…………」

インデックスはもう色々と諦める事にした。毛布の中に意識を集中しているせいか、ローブとフードがぽてんとズリ落ちても全然気づいていない。

やや現実逃避を感じた上条の頭に、ようやく『夏休みの補習』という言葉が浮かんできた。

「うわっ!そーだ補習だ補習!」上条は携帯電話の時計を眺めて、

「えっと、あー……俺これから学校いかなきやなんないけど、お前らどーすんの?ここに残るならカギ渡すけど?」

「……良い、出てく」

どーんという効果音をひきずつたままインデックスはすくつと立ち上がった。幽霊のように上条と神槍の間をすり抜けていく。

『俺も出てくか』

続いて、神槍も立ち上がりインデックスを追うようにして玄関へ向かう。

二人ともフードとローブ、それぞれ忘れものをしているのだが気づいてさえもいない。上条はそれに気づいているのだが、下手に触るとまた何か壊してしまいそうで怖い。

「あっ、あー……」

「うん? 違うんだよ」とインデックスは振り返って、「いつまでもここにいると、連中ここまできそうだし。君だつて部屋ごと爆破されたくはないよね?」

サラリと答えるインデックスに上条は絶句する。神槍はただ眉をひそめながらインデックスの背中を追うだけだ。

のろのろと玄関へ向かう二人を上条は慌てて追いかける。せめて何かできないかとサイフの中を確かめてみれば残金は三二〇円。それでもとにかく二人を引きとめようと勢いよく玄関を出ようとした所でドア枠に足の小指が音速で直撃した。

「ばつ、みや! みやああ!!」

片足を押さえて奇声を上げる上条に、ビクンと二人が振りかかる。あまりに激痛に大暴れしようとした上条のポケットからスルリと携帯電話が滑り落ちた。

あつ、と気づいた時には固い床に激突した液晶画面がビキリと致命的な音を立てる。

「う、ううううう! ふ、不幸だ」

『不幸つていうよりドジなだけじゃねーか』

「けど、幻想殺しつていうのがホントにあるなら、仕方がないかもしないね」

「…………どゆことでせう?」

「うん、こういう魔術の世界のお話なんて君はきっと信じないとと思うけど」インデックスはくすくすと笑つて、

「神様のご加護とか、運命の赤い糸とか。そういうものがあつたとしてもうよ?」

インデックスは安全ピンだらけの修道服をひらひらさせながら、『歩く教会』にあつた力も神の恵みだからね、と言つた。

「待てよ。幸運だの不幸だのって言葉は、確率と統計のお話だぜ? んなのある訳……ッ!」

言つた瞬間、ドアノブに触れていた上条の指に壮絶な静電気が襲いかかつた。な!? と反射的に体がビクンと震えると、筋肉が変な風に動いたのかいきなり右足のふくらはぎが『つった』。

「ツー! と悶絶する事およそ六〇〇秒。

「あの、しすたーさん?」「なに?」

「ご説明を」

インデックスは当然のように、

「君の右手の話が本当ならね、その右手があるだけの『幸運』ってチカラもどんどん消してしまっているんだと思うよ?」

「つまり、あれですか」

『お前の『右手』が空気に触れてるだけで、バンバン不幸になつていくつて訳だな♪』

「ぎやあああああああああ!! ふ、不幸だあああああああああああああ!!」

につっこり笑顔で止めを刺した神槍に、思わず涙する上条だつたが、ようやく話がズれてる事に気がついた。

「ち、違くて! お前ら、ここを出てどつか行くアテでもあんのかよ? 事情はわからんねーけど、ウチにいればいいじゃねーか」「ここにいると『敵』が来るからね」

「何で断言できんだよ? 目立つた行動しないで大人しく部屋ん中にい

りや問題ねーだろ」

「そうでもないんだよ? この服、『歩く教会』は魔力で動いてるからね。つまり簡単に言つちやえれば、敵は『歩く教会』の魔力を元に探知(サーキ)かけてるみたいなんだよね」

「けどよ、俺の右手で『歩く教会』ってのはぶつ壊れちまつたんだろ? だったら発信機みてーな機能もなくなつちまつてんじやねーか?」

『だとしても『歩く教会が壊れた』って情報は伝わつちまう。そうだとしたら『敵』は迷わず打つてでると思うぜ?』

「待てよ、だつたらなおさら放つとけねーだろ。『誰か』が追つてきてるつて分かつてんのにお前らを外に放りだせるかよ」

インデックスはきょとんとする。

本当に、本当に。その顔だけ見ているとただの女の子にしか見えない。

「……じゃあ。私と一緒に地獄の底までついてくれる?」

につっこり笑顔だった。

それはあまりにも辛そうな笑顔で、上条は一瞬にして言葉の全てを失つてしまつた。

インデックスは優しい言葉を使って暗にこう言つていた。

こつちにくんな。

だが、そんな本人の意思を無視して声を上げる赤髪の少年がいた。
『良いぜ。地獄だろうが何だろうが、ついてつてやるよ。お姫様?』
ひどく気軽に。場違いなほど楽しそうな笑みを持って、神槍トシキは白い少女にそう言つた。

「な、んで……?」

言われたインデックスの方が混乱してしまう。

思えば、この少年はいつもそうだつた。水知らずの自分を助けてベルンダに降り立ち、一〇万三〇〇〇冊の魔道書を持つていると知つた後も『あの約束』をしてくれた。そして今も、『約束』を守ろうとしている。

『なんでつて……さつき言つたばつかだろ? "俺はお前の味方で居続ける" つて。なのにハイもうさようなら、なんて出来る訳ねーだろ』

「……………うん！」

言葉はいらなかつた。

インデックスは分かつてしまつた。この少年はきつと何を言つても『約束』を守ろうとするだろうと。なら、わざわざ拒絕する必要はない。

拒絶しなくとも、いいのだから。

「お前は……。いや、もういいや」と上条は言葉を区切り、

「どこに行くつもりなんだ？」

「うーん。とりあえずは日本にあるロンドンの教会に行くつもり」「教会か。それなら学園都市の外に行つた方がいいかもな」

『「がくえんとし?』』

神槍とインデックスの声がピタリと重なる。

揃いも揃つてどんだけ世間知らずなんだと、ある意味感心しながら上条は言う。

「そ。東京の西地区の開発が遅れてる辺りを一気に買いとつて作つた『街』だよ。何十もの大学に何百もの小中高校がひしめき合つてる『学生の街』だ」

上条はため息をついて、

「街の住人の八割は学生だし、マンションに見えるのはみんな学生寮だよ」

勉強のみならず、能力や肉体までも開発する『裏の顔』もある訳だが。

「……街の様子がおかしいのもそのせいだ。生ゴミの自動処理（オートメーション）とか実用レベルの風力発電とか、ドラム缶みたいな掃除ロボとか、そーいう大学の実験品がそのまま街に溢れてやがんのさ。おかげで二〇年ばかり文明レベルが先に進んじまつてる訳だな』『……まさに『科学の街』つて訳か。道理で超能力なんて馬鹿げたモンが一般化学として認識されてる訳だな』

と、唐突にインデックスが興奮した声を上げた。

「あつ、あれはもしや技術大国日本が作り出した電動使い魔かも!としきとしき、早く見に行くんだよ!」

『えつ、マジで？よし、捕獲して仕組みを解析しちゃおうぜえー！』

田舎者二人組は、階段のどこにちらつと見えた掃除ロボを見つけて、それを追いかけて行ってしまった。

「…………あー。何だかなあ」

上条はインデックスのフードと、神槍のボロつちいローブが残された部屋のドアを見てから、通路の先を見た。もうあの二人の姿はどこにもない。別れも涙もあつたもんじやない。

なんていうか、ああいう姿を見ているとアイツら世界が滅んでもなんだから生き残りそうだよなあ、などと何の根拠もなく思つてしまふのだった。

とある約束の絶対守護（ガーディアイクス）

『ふうう。にしても凄いな、学園都市つてのは。見た事ないモノばつかだ』

「見た事なさすぎてよく分からぬかも」

あの後、結局電動使い魔（掃除ロボ）に逃げられた神槍たちはイギリス政教の教会を探すのと並行に学園都市見物をしていた。

時間は大体お昼ぐらい。

上条の話では夏休みらしいので、飲食店は学生によつてほぼ占拠されていた。老人がまつたくと言つていいほどいないとこらを見ると、本当にここは『学生の街』なんだなあと思い知らされる。

と、インデックスがポツリと呟いた。

「おなかへつた」

『……お前、どんだけ腹減るんだよ』

とか言いながらどこかのポケットにお金が入つていなか探す神槍。中ポケット——なし。横ポケット——なし。後ろポケット——なし。……見事に無一文だつた。

『あ、もしかしてローブのポケットに――――つてアレ?』

『どうしたの、としき?』

『ローブがない……。あ、もしかして当麻の家に忘れてきたかも……！つてインデックス、お前フード被つて無かつたつけ?』

確かに最初出会つた時は被つていた筈だけど、と神槍は露わになつているインデックスの銀髪を見て言つた。

インデックスも自分の頭に手を置いて、やつとなくなつてゐる事に気が付いたらしい。

「……ホントかも、忘れて来ちゃつたんだよ」

忘れてくるとすれば上条の部屋しかない。インデックスに一言「一回戻るか」と言つて、来た道を戻ろうとした時、『ある事』に気がついた。

神槍はインデックスに、緊迫した顔で確認を取る。

『なあ、インデックス。お前さつき魔術師の連中は『歩く教会の魔力を

元に探知してゐる』つて言つたよな?』

「うん。言つたけど?」

『だとしたらヤバいぞ。当麻はフードには触つてない。つまり、魔力が残つてる』。その魔力を探知して魔術師があの部屋に行くかもしれない……!』

「え?!じゃ、じゃあ今すぐ戻らないと……!』

インデックスが早くも駆け足で戻ろうとするが、神槍は、"違和感"に気づいて彼女を引きとめる。

『待てインデックス! 何か変だ……!』

「え、変つて……何が?』

神槍は周囲を見渡す。さつき見た時は学生が山ほど溢れかえっていたのだが、今は、"誰もいない"。

あり得ない、と彼は思う。このお昼時に、あれだけの人が一瞬でいなくなるなんて。

「人払い」

は?と神槍は首を傾げる。それを無視し、インデックスは淡々と滑らかに唇を動かす。

「人払い。人の意識に働きかける"魔術"の一種で、『何故かここには近づこうとは思わない』ように注意を逸らしてゐる。しかもこの魔力の流れと術式は、ルーンの刻印だね」

魔術の事を淡々と話す彼女を見ていると、やはり違和感を感じる。いつもの彼女とはどこか違う気がしてしまうのだ。

(それにも、『魔術』つつー事は……)

「彼女を渡して頂けますか」

ゾン、と。いきなり顔の真ん中に日本刀でも突き刺されたような、女の声。

その声は、不気味なほど静かな大通りに響き渡つた。

その女は一〇メートルぐらい先の、滑走路のように広い大通りの真ん中に立つていた。

真昼間で明るい筈なのに、女がいる場所だけ暗いような気がした。無意識に、女から視線は外さずにインデックスを傍によせる。前世

で養われた経験が、目の前の女は『ヤバい』と告げていた。

女はTシャツに片脚だけ大胆にバツサリ切つたジーンズという、まあ普通の範囲の服装ではあつた。

ただし、腰から拳銃のようにぶら下げた長さ二メートル以上もの日本刀が凍える敵意を振りまいていた。刀身は鞘に収まつていて見えないが、まるで古い武家屋敷の柱みたいな歴史を刻んだ漆黒の鞘が、すでに『本物』を裏付けていた。

『……テメエは』

「神裂火織（かんざきかおり）、と申します。……できれば、もう一つの名は語りたくないのですが」

『もう一つ？』

「魔法名、ですよ」

今度こそガツシリとインデックスを自分に密着させる。きやつ、と小さな悲鳴を彼女が上げたのは分かつたが無視した。

そんな余裕はない。

魔法名——確かにインデックスも名乗っていた。そこから分かる事はただ一つ、

（魔術師、か……）

『——て事はアレか。テメエがインデックスの言う魔術結社とかいう連中なんだな』

「……？」神裂は一瞬だけ不審そうに眉をひそめ、

「ああ、禁書目録に聞いたのですね？」

魔術結社。一〇万三〇〇〇冊を欲して、インデックスを追いまわす

『組織』。

『組織』という事は、『魔術師』は一人ではないという事だ。

女以外にも気配がないか探るが、それらしいモノは感じられなかつた。

「率直に言つて」神裂は片目を閉じて、

『魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが』

『保護？捕獲の間違いだろ？保護つづーのは本人に対してもYESかどうか確認を取つてからするもんなんだよバーカ。日本人ならそれぐ

らい知つてろよ』

神槍の安い挑発に耳は貸さず、神裂は淡々と、
「仕方がありますん」もう片方の目も閉じて、
「名乗つてから、彼女を保護するまで」

ハツ、と神槍は吐き捨てるように呟く。

『やつぱ戦うしかねーのかよ。――そんじや始めようぜ、『魔術師』』

言葉と同時。

神槍の纏う雰囲気が、一般人のソレから『魔法使い』としてのソレに変わつた。表情も、遂につきまで軽口を叩いていたとは到底思えない真剣なモノに変わつていく。

「ツ！」

今まで神裂の存在感が支配していた大通りが、一瞬にして神槍の主導権に切り変わつた。

無表情を貫き通していた彼女も、気圧されたのが分かつたのか一瞬だけ驚愕に染まつた。

（まさか、魔術師……？だとしたら少々厄介な事になつたかもしません、ステイル）

人払いのルーンを刻むために、今この場にはいない相棒の名を心の中で呼ぶ神裂。

インデックスの持つ魔術知識は、一種の爆弾と思えばいい。少しでも知識を盗まれれば、それだけで危険と言えるレベルを遥かに超える結末が待つてている。

神槍が『戦いの歌』で脚力を底上げした直後、
神裂火織の斬撃が襲いかかつて來た。

神槍たちと神裂の間には十メートルもの距離があつた。加えて、神裂の持つ刀は二メートル以上の長さがあり、女の細腕では振り回すのも不可能に見えた。

――『はずだつた』。

なのに、神槍が何かを感じて頭を下げる次の瞬間、巨大なレーザーでも振り回したように神槍の頭上スレスレの空気が切り裂かれた。

位置的に頭を下げなくても直撃はしなかつたらしいが、それだけで服越しにインデックスがビクビク震えているのが分かった。

安心させるように彼女の頭をぽんぽんと軽く掌で叩く。彼女にだけ聞こえるような小さな声で神槍は呟く。

『“逃げる”ぞ、インデックス』

コクン、と彼女は小さくうなずいた。彼女の手を取つて逃げようとするが、

「やめてください」一〇メートル先で、声。

「この私から逃げられるとでも？それに生半可な覚悟で彼女の『中身』を覗き見るつもりなら、やめる事をお勧めします」

フツ、と神槍は失笑した。

『テメエはナニ勘違いしてんだ？俺はコイツの頭の中身なんて興味ないし、魔道書なんつー古本なんかどうでも良い。俺はただ——インデックスと一緒に居たいだけだ』

神槍は即座に彼女をお姫様抱つこの要領で抱き抱えると、魔力で強化された脚力をフルに使つて路地裏に逃げ込んだ。

当然、路地裏に入る前に何度もあの正体不明な斬撃が飛んできたが、軽く体勢を変えるだけで避ける事ができた。

神槍の回避能力だけではない。斬撃の飛んでくるところが全部甘かつた。

(？何で急所を狙わない……？)

疑問に感じながらも全力で走り、迷路のような路地裏を縫うようにして神裂の視界から消える二人。

「…………

神裂はやはり無表情と無言で、薄暗い路地裏へと飛び込んだ。

薄汚れたポリバケツを蹴飛ばすようにして、凄まじい逃げ脚で走る神槍に抱き抱えられているインデックスが聞いてきた。

「どうして……ここまでしてくれるの？」

『はあ。何回聞けば気が済むんだお前は。『約束』しただろ、お前と一緒にいるつて』

「で、でも！」インデックスは声を張り上げて言う。

「約束したとしても、やっぱり私みたいな他人の為に命を張つてまで助けるなんておかしいんだよ！」

『はあ。もうどんだけため息つけばいいんだ俺は？——いいか、これだけは理解しろよインデックス！』

裏路地を抜け、さきほどとは違う大通りに飛びだす。が、やはり人はいない。

神槍は歯を食いしばり、また路地裏に入り込みながら言う。

『俺の人助けに理由なんつーめんどくせえモンは存在しねえ！俺が助けたいと思うから助けるんだ！少なくとも俺はずつとそうやって生きてきたつ！』

え……、とインデックスの吐息が停止する。

おそらく自分は、目の前の少年が言っている事の半分も理解できていなかろう。

でも、これだけは胸を張つて言える。

この少年は本当にそうやつて生きてきたのだ。

自分の抱えている、世界にとつて爆弾とも言える知識を古本扱いしたり、彼にとつて何の利益もないのに魔術師に喧嘩を売つたり、ホントに信じられない事ばかりするけど。

神槍トシキは、聖人だと実力だととは別の意味で——強い。

「どし——ツ！」

インデックスが何かを言おうとした直後、ズドン！と神槍のすぐ横の壁に亀裂が走つた。

また、正体不明の斬撃。

足を止めずに振りかえると、神裂が猛然と追いかけてきているのが見えた。相変わらず手は鞘に添えられてるだけ。なのに、斬撃は次々に襲いかかってくる。

あまりの切れ味に神槍は思わず奥歯を噛み締める。

と、ここで路地裏が終わってしまった。

舞台裏から登場する役者のように、日光に照らされている大通りに飛びだしてしまった神槍。

すぐさままた路地裏に入るうとするが、

「もう鬼ごっこはお終いです」

また無機質な、神裂の声。その音が神槍とインデックスの耳に届いた直後、ゴガーン！と神槍が踏み出そうとしていた場所を斬撃が通り過ぎた。

『ツ！』

慌てて足を戻し、次の逃げ場所を探す。

「幾度でも、問います」

瞬、とほんの一瞬だけ、何かのバグみたいに神裂の右手がブレて、消える。

轟！という風の唸りと共に、恐るべき速度で何かが襲いかかって来た。

『!?』『!?

神槍が咄嗟に、離れた地面にインデックスを放り投げた直後、まるで四方八方から巨大なレーザー銃を振り回されてるような錯覚。

それは、例えるなら不可視の斬撃で作り上げた巨大な竜巻。

神槍トシキを台風の目にして、アスファルトも街灯も、一定の間隔で並ぶ街路樹までもが、まとめて工事用の水圧カッターで切断されるよう切り裂かれた。

宙を舞つた握り拳ほどもある地面の欠片が、神槍が直前に展開した魔法障壁に阻まれ、ガツン！という鈍い音を立てた。

神槍は歯を食いしばりながら、首ではなく視線だけで辺りを見渡す。

一本。二本。三本。四本。五本。六本。七本――――都合七つもの直線的な『刀傷』が平たい地面の上を何十メートルに渡つて走り回っていた。様々な角度からランダムに襲う『刀傷』は、まるで鋼鉄の扉に生爪を剥がす勢いで傷をつけているように見える。

チン、という刀が鞘に収まる音。

「私は、魔法名を名乗る前に彼女を保護したいのですが」

右手を刀の柄に触れたまま、神裂は憎悪も怒りもなく、本当にただの『声』を出した。

「私の七天七刀が織り成す『七閃』の斬撃速度は、一瞬と呼ばれる時間に七度殺すレベルです。人はこれを瞬殺と呼びます。あるいは必殺でも間違いではありませんが」

『…………』

神槍は無言で、5メートルほど先でこちらを心配そうに見ている少女——インデックスを見る。

さきほどの取り囲むような斬撃で分断された彼女と合流するには、神裂の斬撃より早く動かなければならぬ。そんなものは不可能だ。となるともう、道は一つしか残されていない。神槍は早口……と言われるレベルを遥かに超える速度で、日本語でも英語でもない……古代ギリシャ語を紡ぐ。

『魔法の射手・連弾・光の100矢!!』

「つ――！」

神裂の表情に一瞬だけ驚愕が混じつた。彼女を蜂の巣にするように、神槍が向けた掌から光り輝く矢が発射された。人間の手足より數十倍多い魔矢が彼女に襲いかかる。

だが神裂は驚いたが、硬直はしなかつた。冷静に魔矢の軌道を読みとると、正体不明の瞬殺斬撃を用いて次々と魔矢を撃ち落としていく。撃ち落としきれなかつたものは回避、そしてまた迎撃。

これを繰り返して、神裂は一〇〇本もの魔矢を相手に無傷で立ちまわつて行く。

このままではすぐに全てを無力化されてしまうだろう。

『インデックス!!』

だが神槍はその様子を見てすらいなかつた。彼の視線の先には、一人の少女。魔力で底上げされた脚力を存分に用いて合流しようとする。

(――させません!)

チン、という金属音。

瞬間。白い少女に向かつて一本の斬撃が地面を破壊しながら襲い

かかる。

斬撃を放った直後、神裂の脇腹に一本の魔矢が直撃した。

「くつ！」

捨て身の一撃。彼女の放った斬撃は無情にも白い少女を切り裂いた。

『うおおあああああああああああああッ!!』

“かなかつた”。

少女の前に割り込むようにして、神槍が彼女を斬撃から守つたからだ。

まさしく、『約束』の意味そのままに。

インデックスを抱くように割り込んだ少年の背中に、斬撃が激突する。それは魔法障壁を絹のように切り裂くと、神槍の背中を横に、一閃。

『——ツツ!!』

声にならない悲鳴が上がる。

神槍の背中から、噴水のように血が飛び出す。直後に襲うのは痛みというより、熱さだった。

灼熱のマグマをぶつ掛けられているように背中が熱い。……熱い筈なのに、肌寒くなってきた。

あまりの痛み——熱さに前へ、インデックスによりかかるように倒れる。

「どし、き……？」

インデックスは訳が分からず、そのまま神槍を受け止めた。が、彼女の華奢な体には少々重過ぎたらしい。支えきれずに、立ち膝のような体勢になつてやつと彼の体は止まつた。

と、ここでようやく彼女は神槍の背中に視線がいった。そこにあつたのは赤、赤、赤。ドス黒い、赤。

それが血だと理解するのに、彼女はたっぷり5年かかると思つた。

「どし、き？」

返事はない。顔ならすぐ横にあるのに。こんなにも、近くにいるのに。

『……う……あ…』

代わりに返つて来たのは、低いうめき声。耳元のすぐ近くで出されたその弱々しい声は、鼓膜に張り付くように小さい尾を引いた。ベチャヤつ、と神槍の背中に回していた手に何かがこびりついた。インデックスは『恐る恐る』そこに視線を持つていく。

彼女の小さくて綺麗な手には、生温かくて真っ赤な液体がついていた。まるで、赤い絵の具を塗りたくられたみたいに。

「どしきイイイイイイイイイイイイイイイイイイイ!?

彼女の絶叫は、不気味なほど静かな大通りに響き渡った。

攻撃した張本人である神裂火織は、その様子を呆然と見ていた。既に魔矢は全てさばき切つた。唯一食らつた脇腹はズキズキと痛むが、行動不能になるほどではない。そもそもこの程度の傷、わざわざ回復術式を組まなくとも『聖人』の彼女からすれば、特殊な呼吸法を使えば3秒もかからずに完治出来る。

間違いなく、彼女が勝つた。勝者だ。

なのに、彼女はただ呆然と。インデックスの絶叫を聞いていた。
（な、ぜ？ 彼女には『歩く教会』という絶対防御があるんですよ？ なのに何故、彼は身をていしてこんな事を……？）

いくら考えても、答えは分からぬ。

インデックスには『歩く教会』がある……筈だ。物理・魔術問わず受け流し、無力化する絶対防御が。

それが分かっているから攻撃したのに。それがあるから彼女に攻撃『できた』のに。

斬撃をいくら放とうが、法王級の防御結界が発動して受け流される筈だ。彼女には傷一つ付かない筈だ。

さつきの場面だつてそうだ。

わざわざ命賭けで彼女を守らなくたつて、彼女は大丈夫なのに。
(何故? こんな事に……?)

神裂は答えを求めて、今も泣き叫びながら彼の名前を呼ぶインデッ

クスを見る。

そして

二〇

見つけた

神裂は「それ」を見て、何の比喩もなしに本当に心臓が止まつたかと思つた。気のせいか足元がぐわんぐわんする。

(修道服に！『歩く教会』に血が染み込んで……ツツツ！！)

「それ」とはまさに
彼女の純白の修道服に真っ赤な液体が染み込
んでいく光景だつた。

それはあり得ない光景だつた。あつてはならない光景だつた。当然、『歩く教会』には液体を弾く効果も備わつてゐる。だからこその“絶対”防御なのだから。（逃亡生活の筈なのに歩く教会が綺麗だつたのはこの為）。

だからおかしいのだ。彼の血が修道服に染み込も訝かない。「歩く会」はそれすらも拒絶へ、装着者を守りぬく筈なのだから。

まぐるしい勢いで、神裂の頭の中が否定の言葉で埋め尽くされていく。

(ツ！まさ、か……)

そうしてやつと、
答えに辿り着いた。

（――歩く教会』は既に死んでいた』……？彼女はもう絶対防

ノクツ

(もし、あのまま、斬撃が彼女に当たつていいたら……)
ゾクッ。ゾクッ。

(彼が代わりに軽撃を受けていたから) 彼女は……インテックア

無数の虫に全身を走り回られているような悪寒が、神裂の全身に伝わる。

「あ、……ああ——インツ」

カラーン、と甲高い音を立てて二メートル以上ある七天七刀が地面へ転がつた。

目の前の現実から少しでも離れようと、勝手に足が後ずさる。

その時、背中を切り裂かれ、ダラリと力が抜けている神槍の一本の指から、光の矢が一本だけ放たれた。

「ツ！」

そのおかげで神裂は我に返った。常人を遥かに超える速度で刀を拾うと、迎撃しようと身構える。

だが予想に反して魔矢は、神裂の遙か手前で地面に着弾。辺りに黒い煙と粉塵を巻きあげた。

それが丁度神槍とインデックス、神裂を隔てるよう視界を覆い尽くす。さしづめ、即席のカーテンのように。

(煙幕!？くつ——)

すぐさま狙いに気づき、神裂は粉塵のカーテンを突つ切りさつきまで少年が倒れていた位置を見るが、そこには大量の血痕が残っているだけだった。

(完全に、私のミスですね……)

脇腹の傷が、やけに痛む気がした。

とある神父の人間狩り（ヒューマンプレゼンツ）

御坂美琴（比利比利女）を追い払い、牛丼屋で『オヤツ』を食べた上条は、早朝に出会った外国人二人組が忘れて行つたフードとロープをどう返そうか頭を悩ませながら、陽の落ちた学生寮の前まで戻つて来た。

人の気配はない。

おそらく夏休み初日だから、みんな街に出て遊び呆けているんだろう。

見た目は典型的なワンルームマンションだ。四角いビルの壁一面に直線道路とズラリと並ぶドアが見える。鉄格子のような金属の手すりに『ミニスカ覗き見防止用』のプラス板が張つてないのは、ここが『男子寮』だからだろう。

学生寮の建物は縦に——奥へ延びるように作られていて、玄関や反対側のベランダは、道路から見て側面——つまりビルとビルの隙間にある。

“管理人室と呼ばれる物置”の横をすり抜けてエレベーターに乗る。工事の搬入用エレベーターより狭くて汚いのはご愛敬。

屋上を示す『R』のボタンが小さな鉄板で封印されているのは夜な夜なビルの屋上を飛んでやつてくるロミオとジュリエット対策だ。

電子レンジみたいな音と共にエレベーターは七階に止まる。

開くドアを押しのけるように上条は通路に出た。七階という高さだがビル風はなく、隣のビルとの圧迫感もあるせいか余計に蒸し暑い気がした。

「ん？」

と、上条はようやく気付いた。直線的な道路の向こう、——自分の部屋のドアの前で、インデックスが座り込んでいるのに。彼女の少し前には赤い髪も見える。インデックスの体が小刻みに揺れているのを見ると、また行き倒れたのか？と呑気な考えが浮かんできた。

…………何となく、とてつもなく不幸な予感。

「…………あー」

インデックスの影に隠れて神槍の姿は特徴的な赤髪しか見えないが、うつ伏せに倒れてるところを見ると、おなかをへらしたインデックスの八つ当たり（噛みつき）に遭ったんだろう。直に食らった上条と神槍にしか分からぬあの激痛。あれは軽く気を失つても仕方ないと思う。

「……。なんていうか、不幸だ」

とか何とか言いながら、上条当麻は鏡を見れば自分の顔に驚いていただろう。彼の顔は誰がどう見ても笑っていた。

やはり心のどこかに引っ搔かっていたのだ。『魔術師（神槍は魔法使いと言っていたが）』という言葉は信じれなくとも、怪しげな新興宗教の連中が一人の女の子を追いかけ回している、と解釈する事もできる。そしてその女の子を、まるで騎士サマのように守る事にした少年がいる、とも解釈できる。

それが何でもない。いつもの姿（？）で現れた事が嬉しかった。

そんな理屈を取つ払つても、もう一度再会できた事が純粋に嬉しかった。

上条は思い出す。たつた二つの忘れもの。渡し損ねた純白のフードとやけにボロボロな茶色いローブ。その存在が、まるでおまじないのよう見えてくるのが不思議だつた。

「おいー、こんな所でナニやつてんだよ？」

声をかけて、走る。インデックスは本当にゅっくり振り返る。神槍はまだ気づかない。インデックスにはもう振り向く動作も強大なストミナダメージになるらしい。神槍は相当深く噛みつかれたらしく、まだうつ伏せで突つ伏している。

上条当麻はそんな『二人らしい』仕草に笑みを噛み殺して、二人が血だまりの中に沈んでいる事に、ようやく気付いた。

「…………？」

最初に感じたのは、むしろ驚きよりも戸惑いだつた。

ペたんと力無く座つているインデックスの陰になつていて見えなかつたのだ。うつ伏せに倒れた神槍の背中——ほとんど腰に近い辺りが、真横に一閃されている。まるで定規とカツターナイフを使つて

段ボールへ一直線に切り込みを入れたような刃物の傷。肩ほどまで伸ばしてあるのを、一つに束ねられている赤髪をもつと赤く染めようと、傷口から溢れだす液体が服を染め上げていく。

こちらにゆっくり振り返ったインデックスの緑色の目は涙で赤くなつており、純白だった修道服には所々に赤黒い染みができている。上条は一瞬、それを『人間の血液』と認識する事ができなかつた。あ……、と呆然とした様子でインデックスの口が小さく動いたのが見えた。

一瞬前と一瞬後。あまりにギヤップがありすぎる現実が、思考を混乱させた。真っ赤な真っ赤な……ケチャップ？ 空腹で座りこむインデックスが最後の力を振り絞つてケチャップを吸つて、何かの拍子に神槍にぶつ掛けたのかと、そんな微笑ましい絵を想像して上条は笑おうとする。

笑おうとしたけど、笑えない。

笑えるはずが、ない

としきが……、とやはり呆然とした様子で呟くインデックス。見ると、どうにか溢れだしている血を止めようと自分の修道服の一部を傷口に押さえつけているが、もはや修道服の元の色が分からぬぐらい赤黒く変色してしまつていて。

「な、……にが。何があつたんだ!? くそつ！」

ようやく上条の目が現実にピントを合わせた。重傷の神槍に慌てて走り寄る。インデックスの隣に来ても、神槍は何も言わない。血の氣を失つて紫色になつた唇は、呼吸しているかどうかさえ怪しいほどに動かなかつた。

「くそつ、くそつ!!」混乱した上条は思わず叫んで、呆然と座り込んでいるインデックスに掴みかかるところだつた。

「何だよ、一体なんだよこれは!? ふざけやがつて、一体どこのどいつにやられたんだ、お前!!」

「うん？ 僕達『魔術師』だけど？」

だから——だからこそ、背後からかかつた声は、神槍の声でもインデックスの声ではない。

殴りかかるように上条は体ごと振り返る。エレベーター……ではない。その横にある非常階段から、男はやつてきたようだ。

白人の男性は二メートル近い長身だったが、顔は上条より幼そうに見えた。

歳は…………おそらくインデックスと同じ十四、五だろう。その高い身長は外国人特有のものだ。

服装は……教会の神父が着ているような、漆黒の修道服。ただしコイツを『神父さん』と呼ぶ人間は世界中を探しても一人として存在しないだろう。

相手が風上に立っているせいか、十五メートル以上離れた上条の鼻にも甘つたるい香水の匂いが漂ってくる。肩まである赤髪に、左右十本の指に指輪がメリケンサックのようにギラリと並び、耳には毒々しいピアス、ポケットから携帯電話のストラップが覗き、口の端では火のついた煙草が揺れて、極め付けには右目のまぶたの下にバーコードの形をした刺青が刻みこんである。

神槍と同じ赤髪だが、この男のはおそらく染めたのだろう。神槍の赤髪より遙かに不自然で、氣味が悪い。

神父と呼ぶにも、不良と呼ぶにも奇妙な男。

通路に立つ男を中心とした、辺り一帯の空気は明らかに『異常』だった。

妙な感覚が凍りの触手のように辺り一帯に広がっている。体の中へ広がる氷の触手のような感覚に心臓は凍り、上条は思い至る。

“これが、魔術師”。

“ここは、魔術という違うモノが存在してしまう、一つの『異世界』と化していた”。

「うん？うんうんうん、これはまた随分とやつちやつて」口の端の煙草を揺らしながら魔術師はあちこち見渡す。

「神裂が突然現れた魔術師の少年を斬つたって話は聞いたけど……まあ、血の跡がついてないから間違いかと思つてたんだけどね」

この男の言う事が全て正しいとすると、神槍はどこか別の場所で『斬られて』、インデックスに支えられながら命からがら逃げてきた所

で力尽きた。途中、辺りにべつたりと鮮血をなすりつけただろうが、それらは全て自動稼働の清掃ロボットが綺麗に拭い去ってしまったのだ。

「けど、何で……？」

「うん? ここまで戻つて来た理由かな。さあね、忘れ物でもしたんじゃないのかな。そういうえば今朝背中を撃つた時点ではフードがあつたけど、あれつてどこで落としたんだろうね?」

煙草を揺らしながら、魔術師は今もペタンと座りこんでいるインデックスに視線を向けた。元々白かつた修道服は、神槍の血で赤く染まっていた。インデックスは悔しそうに唇を噛み締めた。唇の端から血の筋がツウーと垂れる。

上条は一步真横に動き、インデックスを魔術師から見えないようにした。何故だかは分からぬが、目の前の男を彼女に関わらせちゃダメな気がした。

それと同時に上条は考える。

彼女は——二人は一体何のためにここまで戻つてきた? 破壊されて使えもしない『歩く教会』の一部をどうして回収する必要がある? 上条の右手のせいでもう『歩く教会』そのものが使いものにならなくなつたのなら、その一部(フード)を回収したつて、何の意味もないのに……。

——じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてくれる?
——良いぜ。地獄だろうが何だろうが、ついてつてやるよ。お姫様?

不意に、全てが繋がつた。

上条は思い出す。部屋に置き去りにした『歩く教会』の残骸(フード)、あれには触れていない。つまりフードには魔力が残っている。それを探知して魔術師がやってきてしまうかも知れないと、二人は考えた。

だから、二人はわざわざ危険を冒して『戻つて来た』。

「……ばつかやろう」

そんな事する必要はないのに。『歩く教会』を壊したのは上条の不

手際だし、部屋に忘れたフードにしたつて上条は気づいていながらわざと部屋に放置した。そして何より——一人には、上条の人生を守りぬく義理も義務も権利だつてありはしない筈なのに。

赤の他人に、出会つて三〇分も経つていない上条当麻の事を。

命を懸けて、魔術師との戦いに巻き込まないよう戻つてこなければ、気が済まなかつた。

「——ばつかやろうが!!」

ピクリとも動かない神槍の背中とペタンと座り込んでいるインデックスの姿が、妙に癪に障つた。

あの時、あの瞬間。キチンと二人に忘れものを返していれば。

「うん? うんうんうん? 嫌だな、そんな目で見られても困るんだけどね」魔術師は口元の煙草を揺らし、

「そこで寝てる奴を斬つたのは僕じゃないし、神裂だつて何も血まみれにするつもりなどなかつたんじゃないかな。勝手にこつちの事情に割り込んできて、勝手に斬られちゃ世話ない。まあ彼がどこ所属の魔術師かは知らないけど、相手があの神裂じやしううがないか」「なんで、だよ?」思わず、答えを期待していなゐのに上条の口は動いていた。

「何でだよ。俺は魔術なんてメルヘン信じらんねえし魔術師（テメエら）みてえな生き物は理解できねえよ。それでもお前たちにも正義と悪つてモンがあるんだろ? 守る物とか護る者とかあるんだろう……?」

そんな事、自分に言えた義理ではない事はよく分かつている。

神槍とは違い、上条当麻は去つていくインデックスをそのまま見捨てて日常へ帰つたんだから。

それでも、言わない訳にはいかなかつた。

「こんな小さな女の子を、寄つてたかつて追い回して。そんな女の子をたつた一人で守ろうとした奴を血まみれにして。これだけの現実（リアル）を前に! テメエ、まだ自分の正義を語る事ができんのかよ!!」

「だから、血まみれにしたのは僕じゃなくて神裂なんだけどね」

なのに、魔術師は一言で断じた。微塵も欠片も、響いていなかつた。

「もつとも、例え見知らぬ誰が死のうが生きようが、回収するものは回収するけどね」

「かい、しゅう？」

「うん？ああそりゃ、魔術師なんて言葉を知ってるから全部筒抜けだと思ってたけど。ソレは君を巻きこむのが怖かつたみたいだね。それともそこで寝てる彼には教えてたのかな」

魔術師は煙草の煙を吐いて、

「そう、回収だよ回収。正確にはソレじゃなくて、ソレの持つてる一〇万三〇〇〇冊の魔道書だけどね」

…………また、『一〇万三〇〇〇冊の魔道書』だ。

「そりゃそりゃ、この国は宗教観が薄いから分からなかもしれないね」魔術師は笑いながら、つまらなそうに、

「index—Library—Prohibition—」この国では禁書目録つて所かな。これは教会が『目を通しただけで魂まで汚れる』と指定した邪本悪書を、ズラリと並べたりストの事さ。危険な本が出回つていると伝令しても、タイトルが分からなければ知らず知らずの内に手に取つてしまふかも知れないからね。——かくして、ソレは一〇万三〇〇〇冊もの『悪い見本』を抱えた、毒書の

るつぼと化した訳だ。ああ、注意したまえ。ソレが持つてる本ね、宗教観が薄いこの国の住人なら、一冊でも目を通せば廃人コース確定だから」

そんな事を言つたつて、後ろを見てもインデックスは一冊の本も持つていない。

上条はもう一度魔術師を睨みつけて、

「ふ、ざけんな！そんなんもん、一体どこにあるつて言うんだ!?」

「あるさ。その記憶（あたま）の中に」

サラリと。魔術師は当然のように答えた。

「完全記憶能力、って言葉は知つてるかな？何でも『一度見たものを一瞬で覚えて、一字一句を永遠に記憶し続ける能力』だそうだよ。簡単に言えば人間スキヤナだね。これは僕たちみたいな魔術でも君たちみたいな超能力でもなく、単なる体質らしいけど。彼女の頭はね、大

英博物館、ルーブル美術館、バチカン図書館などなど……。これら世界各地に封印され持ち出す事のできない『魔道書』を、『その目で盗み出し』保管している『魔道書図書館』って訳なのさ」

信じられる、はずがない。

だけど、重要なのはそれが『正しい』かどうかじゃない。こうして目の前に、実際にそれを正しいと信じて少年の背中を斬り刻んだ人間がいる事だ。

「ま、ソレ自身は魔力を練る力がないから無害なんだけど。そんな安全装置（ストッパー）を用意する辺り、『教会』にも色々考えがあるんだろうね。まあ魔術師の僕には関係ないけど。とにかくその一〇万三〇〇〇冊は少々危険な代物なんだ。だから、『使える連中』に連れ去られる前にこうして僕たちが保護しにやつてきた、つて訳さ。そう、丁度そこで寝てる彼みたいな連中の前にね」

「ほ……?」

上条は愕然とした。これだけ真っ赤な光景を前に、この男は今なんて言つた?

「そうだよ、そうさ。保護だよ保護。ソレにいくら良識と良心があつたつて拷問と薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら心が痛むだろう?ああそうだそうだ、そこで寝てる彼も渡してもらおうか。一応、どこ所属の魔術師か調べたいしね」

「…………」

力チカチと。体のどこかが震えていた。

それは単純な怒りではない。現に上条の腕には鳥肌が立っている。

そんな根拠も理論もない『盲信』のために人間狩りをする魔術師に頭の神経がブチ切れ、

「て——メエ、何様だ!!」

上条当麻は拳を握る。

相手が魔術師だろうがペテン師だろうが関係ない。何の罪もない少女と、その少女を命賭けで守った少年を馬鹿にする『存在』が、何よりも許せなかつた。

今ここに、幻想殺しの少年と、強者の名を冠する炎の魔術師の物語いが始まつた。

とある目録の秘密告白（シクレプレイス）

夜、表通りから消防車と救急車のサイレンが響き渡り——通り過ぎた。

学生寮はほぼ無人だつたらしいが、火災報知機を鳴らしたせいで、消防車と野次馬で無人の学生寮はあつという間に人だらけになつたのだ。

あの後、どうにか炎の魔術師をぶつ倒した上条は、部屋にあつたフレードの機能を右手で破壊してから持ち出した。魔力を生かしたまま適当な所に捨てれば追つての目を「まかせるのだが、インデックスがガンなに持つていく」と言い張つたからだ。

上条当麻は路地裏で舌打ちした。血まみれの神槍も今だ抱えたまま——この傷口を、こんな汚い地面に触れさせる訳にはいかなかつた。インデックスは今にも泣き出しそうな顔で、上条の背中に乗つている神槍を見ている。

神槍を救急車に乗せる事はできない。

学園都市は基本的に『外の人間』を嫌う傾向がある。そのため街の周りを壁で覆い、三基の衛星が常に監視の目を光らせるほどの徹底ぶりだ。コンビニに入るトラック一台にしたつて、専用のIDがなければ話にならない。

そんな所に、IDを持たない部外者（神槍とインデックス）が入院したとなれば、あつという間に情報は漏れる。

そして、敵は『組織』だ。

治療を受けている最中、最悪、手術中に部外者に狙われたらもう防御手段なんて何もない。

「…………けど、だからつてこのままほつとく訳にもいかねえんだよな」

『だい、じょうぶだ…ぜ？魔力で組織を、へい、さ…してるから……。血さえ……止める事ができれば……』

「トシキ、お前意識が戻ったのか!?」

「喋っちゃダメだよ、としき！」

神槍の口調は弱々しく、そう一言だけ言つた後にまた氣を失つてしまつた。

彼の怪我は包帯を巻いて済む素人レベルを越えている。ケンカ慣れしている上条は『人には言えない傷』は大抵自分で応急処置してしまう。そんな上条でさえ思わず取り乱しそうになるぐらい、彼の背中の傷は、酷い。

未だに信じられないけど、もはや信じる他に道がない。

「おい、インデックス！」上条は隣にいるインデックスを見て、「お前の一〇万三〇〇〇冊の中に、傷を治すような魔術はねーのかよ？」

確かに、インデックス自身には魔力がないから使う事ができない。神槍自身もこの状態では無理だ。けど、『異能の力』を扱う上条がインデックスから知識を聞きだせばあるいは――。

「あるけど」

一瞬呼びかけた上条は、『けど』という言葉が気にかかるって、「君には……無理」インデックスは本当に言いにくそうに、「たとえ、私が術式を教えて君が完全にそれを真似した所で……君の能力（チカラ）がきっと邪魔をする」

上条は愕然と自分の右手を見た。

幻想殺し。そこに宿る力は、確かにステイルの炎を完全に打ち消していただ。なら、同じように神槍の回復魔術も打ち消してしまう恐れがある。

「く、そ！またかよ……またこの右手が悪いのかよ……ツ！」

ならば、電話を使って誰かを呼べばいい。青髪ピアスか、隣人の猫語男か。こういう『事件』に巻き込んで心配いらないタフな連中の顔がいくつか浮かぶ。

「…………？」インデックスはちょっとだけ黙つて、

「あ、ううん。そういう意味じゃないよ」

「？」

「君の右手じゃなくて、『超能力者』っていうのがもうダメなの」上条は背中から熱帯夜なのに、真冬の雪山のような感触を感じながら、

「魔術っていうのは、君たちみたいに『才能ある人間』が使うためのモノじゃないんだよ。『才能ない人間』が、それでも『才能ある人間』と同じ事をしたいからって、生み出した術式と儀式の名前が……魔術」

こんな時にナニ説明してんだ、と上条が叫ぼうとした所で、

「分からぬい？』『才能ある人間』と『才能ない人間』では、回路が違うの』。『才能ある人間』では『才能ない人間』のために作られた魔術を使う事は…………できない』

「なつ……」

上条は絶句した。確かに上条たち『超能力者』は薬や電極を使い、『普通の人間とは違う脳の回路を無理矢理に拡張している』。体の作りが違うと言われば、『確かに違うのだ』。

だけど、信じられなかつた。信じたく、なかつた。

学園都市には二三〇万もの学生が住んでいる。しかもその全てが能力開発の『時間割り（カリキュラム）』を受けているのだ。

つまり。この街にいる人間では、神槍を唯一救える『魔術』を使う事ができない。

目の前に人を救う方法があるのに、誰にも彼を救う事が、できない。『ち、くしょう……』上条は犬歯を剥き出しにして、

「そんなのつて、あるか。そんなのつてあるかよ！ちくしょう、何なんだよ！何で、こんな……ツ！」

神槍の震えが酷い。インデックスもそれを感じ取ったのか、としき！と叫ぶが返つてくるのは浅い呼吸音だけだ。

上条が一番耐えられなかつたのは、『自分の無能のツケが彼へ行く所だつた』。

この街に住む二三〇万もの学生には魔術を使えない。というのは一番最初に叩きつけられた『ルール』なのだ。

「…………？」

と、上条は自分で思つた事に、自分で違和感を覚えた。

『学生には？』

「おい、確か魔術つてのは『才能ない』一般人なら誰でも使えるんだつたな？」

「え？うん」

「さらに『魔術の才能がないとダメ』なんてオチはつかねーだろうな？」

「大丈夫だけど。方法と準備さえできれば、あの程度中学生だつてで
きると思う」インデックスはちょっとと考えて、
「確かに手順を踏み間違えれば脳内回路と神経回線の全てを焼き切る
事になるけど。私の名は一〇万三〇〇〇冊だから、へいき。問題な
い」

上条は、笑った。

確かに、学園都市に住む一三〇万もの学生は、みんな何らかの超能
力を開発されている。

だが、逆に言えば、超能力を開発する側の——教師はただの人間の
はずだ。

「…………あの先生、この時間でもう眠ってるなんて言わねーだろう
な」

上条当麻は一人の教師の顔を思い浮かべる。

クラスの担任、身長一三五センチ、教師のくせに赤いランドセルが
よく似合う一人の先生、月詠小萌（つくよみこもえ）の顔を。

神槍トシキは、喉の渴きと体の熱で目が覚めた。

「どしき？」

何だか古びた木造アパートの一室っぽいなあ、と布団の上で思つた
ところで、顔を覗き込むようにしてインデックスが視界に入つて來
た。

『インデックス？ここつて一体――』

みなまで言えなかつた。彼女が突然神槍に抱きついてきたからだ。
いや、神槍は寝たままなので覆いかぶさつて來た、と言つた方が正し
いか。
『いつ、インデックス？どうしたんだお前？魔術師はどうなつて――

ここでようやく背中の傷が消えている事に気が付いた。背中に手を回して確認してみたが、本当に綺麗さっぱり消えている。傷痕すら残っていない。

ますます混乱したが、インデックスは神槍の胸の上でひつぐ、ぐずつと嗚咽を漏らすだけでとても事情を聞ける雰囲気ではなかつた。さらに見ると、その小さな肩が震えているのがわかる。

『?』

いよいよ本当に分からなくなってきた。記憶を辿つてみても、上条の背中で一瞬意識が戻つてまたすぐに気を失つた所までしか思い出せない。

「おっ、やつと起きたかトシキ」

また新たな影が視界に入つて來た。ツンツン頭が印象的な少年、上条当麻だ。桶を持つてゐる所を見ると、水を汲んできたのかもしれない。

彼はインデックスの反対側に座ると、

「あれから大変だつたんだぜ？お前の傷を回復魔術で治すは、そのため先生の家に転がりこむは」

先生？と神槍は首を傾げる。

確かにあの重症を一日で治すとなると、何らかの魔術を使つたんだろうとは思つたが、"先生"という単語の意味がわからない。

それから上条に大まかな説明をして貰つた。その間、ずっとインデックスは神槍の上で小刻みに震えていた。

『あー、その。何だ、ほらつ。俺もうピンピンしてるし大丈夫だつて！
……なんかダルいけど』

説明を聞いて、事情は理解した。この街の学生に魔術は使えない事。なら能力開発を受けていない人——教師である月詠小萌にインデックスの頭から引っ張り出した回復魔術に協力して貰つた事。傷は塞がつても、体力の回復には時間がかかる事。
……神槍が眠つてゐる間、インデックスが付きつきりで看病してくれた事。

「ひつく、心配したもん」

『えーと――』

「心配したもん!」

今まで押しつけていた布団から顔を上げ、神槍に向かつて叫ぶインデックス。その顔は涙を流したせいか頬は桜色に上汽しており、目は真っ赤に腫れていた。

「心配、したもん」

少女はもう一度、重ねるように言つた。布団に寝ている神槍の体を、抱き枕のようにして一層強く抱きしめる。

『……ごめん』

神槍は自然と謝つた。どうにか誤魔化そうとしたさつきまでの自分が恥ずかしく思つた。

『……そ、ういや、その小萌先生って人はどこにいるんだ? 一言お礼が言いたいんだけど』

「ああ、小萌先生ならもうすぐ買出しから帰つてくると思うぜ?」
「今帰つたですー」

上条が言つた直後、玄関のドアが開いて、部屋に小さな少女が入つて來た。一三五センチぐらいの身長に、幼い顔つき。歳は……十二歳くらい?

どう見ても『先生』という単語には当てはまらない人物を見て、神槍はごく自然に、上条に疑問をぶつけた。

『その小萌先生つていう人の娘さんか?』

「え。……あー、いや。そうじやなくて」

『それじやあ、親戚の子供を預かつてるとか?』

……あれ?なんか正体不明の少女(というより幼女?)がプルプル震えてるんだけど……と神槍が不思議そうにその様子を見ていると、幼女は突然声を張り上げて、

「私は大人ですウウううううううううううううううううーーツツツ!!」
ボロい木造建築アパートに、ロリボイスが響き渡つた。

どうやらさつきの幼女が小萌先生本人だつたらしい。

あれからたつぱりお説教をご教授した神槍は、まだ体が本調子ではないためまた布団に戻った。

インデックスいわく、三日もすれば完全に回復するらしい。

それまでは布団の上で生活しなきやいけないのか……、とだだつこ少年神槍トシキは憂鬱な気分になつていたが、インデックスの健診的な看病（という名の羞恥プレイ）のせいで暇だなあ～なんて思う時間は、一時もなかつた。

上条は上条で、普段の不幸に対する愚痴の吐き口にされて色々と聞かされた。

と、そんな楽しい時間も終わりを告げ、小萌先生からの質問タイムに突入していた。

ちなみに血で汚れてしまつたインデックスの修道服は、今洗濯してるらしく、彼女は小萌先生のパジャマを着ている。

「上条ちゃん、結局この子達は上条ちゃんの何様なんですか？」

「妹＆兄弟」

「大嘘にもほどがあるですモロ銀髪碧眼の外国少女と赤髪黒眼の英国人ですか！」

「義理と腹違ひなんですね！」

「……変態さんですか？」

「ジョークです！ 分かつてるよ義理はマナー違反で実はルール違反ですよ！ それと上条さんにはボーアイズなラブの気は一切ありません！」

「上条ちゃん」

と、いきなり先生モードの口調で言い直された。

上条は黙りこむ。小萌先生が事情を聞きたがるのも無理はない。得体の知れない外国人を連れ込んで、しかも片方の背中には明らかに事件性を漂わせる刀傷、拳句の果てに『魔術』などという訳が分からぬものの肩棒を担がされたのだ。

それこそ、今この瞬間まで何も聞かれなかつた方が不自然というモノだろう。

「先生、一つだけ聞いていいですか？」

「ですー？」

「事情を聞きたいのは、この事を警備員や学園都市の理事会へ伝えるためですか？」

です、とあっさり小萌先生は首を縦に振った。

「上条ちゃんたちが一体どんな問題に巻き込まれてるか分からぬですけど」小萌先生はにつこり笑顔で、

「それが学園都市の中で起きた以上、解決するのは私たち教師の役目です。子供の責任を取るのが大人の義務です、上条ちゃん達が危ない橋を渡つていると知つて、黙つているほど先生は子供ではないのです」

月詠小萌はそう言つた。

何の能力もなく、何の腕力もなく、何の責任もないのに。

ただ真つ直ぐに、あるべき一刀を通す名刀のような『正しさ』で、言つた。

…………この人には敵わないと、上条は口の中だけで呟いた。

だからこそ、

「先生が赤の他人だつたら遠慮なく巻き込んでるけど、先生には『魔術』の借りがあるんで巻き込みたくないんです」

上条は真つ直ぐと告げた。

もう、無償で誰かの楯になるような人間が、目の前で傷つく所なんて、見たくなかった。

「むう。何気にかつくいー台詞を吐いてごまかそうとしたつて先生は許さないんですよー？」

「…………けど先生、いきなり立ち上がつたりしてどこへ…………？」

「執行猶予です。先生スーパー行つてご飯のお買いものしてくるです。上条ちゃんはそれまでに何をどう話すべきか、きつかりがつちり整理しておくんですよ？それと、」

「それと？」

「先生、お買い物に夢中になつてると忘れるかもしません。帰つて来たらズルしないで上条ちゃんから話してくれないと駄目なんですかねー？」

そう言つた小萌先生は、笑つていたと思う。

『…………これ以上、あの人は巻き込めないな』

小萌先生は『魔術』に巻き込まれる形でだが触れてしまった。科学一色の学園都市の教員なのに、だ。これ以上首を突っ込ませる訳にはいかない。

絶対に。

「うん……もうあの人はこれ以上魔術を使っちゃダメ」

布団の横で座っているインデックスの口調と表情が暗いモノへと変わる。寝転んでいる神槍も彼女の方へ目を向ける。

「魔道書っていうのは危ないんだよ。そこに書かれている異なる常識『異常識』に、違える法則『違法則』。そういう『違う世界の知識』つて、善惡の前に『この世界』にとつて有毒なの」

『違う世界』の知識を知つた人間は、それだけで脳を破壊されてしまうとインデックスは言う。

それを聞いた神槍は、あれ？ それなら俺てんせいしゃ ってどーなるんだ？ と思つたが、今は黙つておく事にした。

「……魔術師は宗教防壁で脳と心を守つてるから問題ない。けど、宗教観の薄い普通の日本人

なら——もう一度唱えれば——、」

——“終わる”。

きっとそれは、人としても生物としても、本当の意味で、終末を迎えるという意味だろう。

『つまり、超能力と魔術は併用できないって事か』

超能力と魔術。同じ『異能の力』でありながら、その本質はまったく違う。使う回路も違ければ、『使う人間』も違う。二つを同時に使うという事は、脳のパンクを意味する。

「……知りたい？ 私の抱えてる事情モノ、ホントに知りたい？」

インデックスと名乗る少女は、絞り出すような声で訊いてきた。

本当に、私の全てを知る覚悟はあるか、と。

本当に、私の全てを知つてもなお、自分を受け止めてくれるかと。
『……なんていうか、これじゃ神父さんになつた気分だな』
なんていうか、本当に。——今さらそんな事聞くまでもないだろ、
と神槍は笑いかけた。

「十字教なんて元は一つなのに、何で別れちゃつたんだと思う？」

『宗教に政治を混ぜたから、だろ？』

「うん……」と少しインデックスは疲れたように、

「そのせいで分裂し、対立、争い合つて——ついには同じ神様を信じる人さえ『敵』になつて。私達は同じ神様を信じながら、バラバラの道を歩む事になつた」

神様の言葉で荒稼ぎしようと思つた者、それを許せないと思つた者。似通つた様々な考え方を持つ人間が生まれ、やがては話し合う事をやめ、同じ考え方を持つ人間同士でグループを持つようになつた。

「……交流を失つた者達は、それぞれが独自の進化を遂げて『個性』を手に入れたの。それぞれの事情・問題に対応して、変化していくんだよ」インデックスは小さく息を吐いて、

「ローマ政教は『世界の管理と運営』を、ロシア政教は『非現実の認識と削除』を。そして私の属するイギリス政教は……」

インデックスは僅かに言葉を詰まらせた。まるで、それが苦い思い出のように。

「イギリスは魔術の国だから……イギリス政教は魔女狩りや異端狩り、宗教裁判、——そういう『対魔術師』の文化が異常に発達したんだよ」

元々は仲間であつた者達に剣を向ける文化が発達してしまつたイギリス政教は、いつの間にか『虐殺・処刑の文化』にまで発展してしまつた。

「イギリス政教にはね、特別な部署があるんだよ」インデックスはそつと、本当に消えそうな声で、

「魔術師を討つ為に、魔術を調べ上げて対抗策を練る。』

必要悪の教会^{ネセカリウス}』

敵を知らなければ敵の攻撃を防げない。かと言つて、汚れた敵を理解すれば心が汚れ、汚れた敵に触れれば体が汚れる。

必要だつたから。『必要な汚れ』だつたから。

だから、『汚れ』を一手に引き受ける必要悪の教会が生まれた。そして、その『汚れ』の到達点にして最たるモノが……、

Index—Library—Prohibition—Prohibition.

通称——禁書目録^{インデックス}。

とある噛みつきの定番定着（テンプレキャツチ）

「ざつけんなよテメエ……」

話を聞き終えると、上条は犬歯を剥き出しにしてインデックスを睨みつけた。神槍は口を挟む事なく、ただ黙つて彼女の話を聞いていた。

「そんな大事な話、何で今まで黙つてやがった!?」

「だつて。信じてくれると思わなかつたし、怖がらせたくなかつたし、その……あの、」

インデックスは顔を俯かせながらそう答えた。彼女の声は若干震えていた。その表情を、布団で寝ている神槍だけは見えたが、その顔は今にも泣き出しそうな子供のようだつた。彼女の言葉は段々と小さくなつていき、最後の方はほとんど聞こえなかつた。

それでも、『さらわれたくなかつたから』という言葉を、二人は聞いてしまつた。

「ふ、ざけんなよ。ざつけんなよテメエ!!」ブチリという音を、上条は確かに聞いた。

「舐めた事言いやがつて、人を勝手に值踏みしてんじゃねえ! 教会の秘密? 一〇万三〇〇〇冊の魔導書? とんでもねー話だつたし聞いた今でも信じらんねえようなおどぎ話みてーなお話だよ」

だけどな、と上条の怒鳴るような口調が優しいソレに変わる。

「たつたそれだけなんだろ』?』

インデックスの両目が、何か信じられないようなモノを見る目に変わる。

「見くびつてんじやねえ、たかが一〇万三〇〇〇冊を覚えた程度で気持ち悪いとか言うと思ってたのか? ザつけんなよ! そんな訳ねえだろ!』

と、今まで黙つていた神槍の右手が、インデックスの頭にポンと乗せられる。

『当麻の言う通りだ。それに見た事を一瞬で記憶できるなんて凄えじやねーか。まあそんな能力より、当麻の不幸能力アンラッキの方が何倍も恐ろ

しいけどな』

『さりげなく酷い事言われた!?』

上条のツッコミが冴える中、インデックスの涙腺が一気に緩み、神槍に倒れこんできた。神槍が大怪我を負つて目覚めた時とは違う涙の理由(ワケ)。きっと、今まで貯め込んできたものが溢れだしたんだろう。

嗚咽を漏らして布団に顔をくつ付けているインデックスの頭を、神槍はゆっくりと優しい手つきで撫でる。

「ほら!俺には右手があるし、魔術師なんか敵じやねーっつの!それにトシキだつて魔術師なんだろ?」

『だから、俺は魔術師じやなくて魔法使いだつての』

「…………けど、ひつく。補習で学校に行かなきやならないって言つてたから」

『ああ、確かに言つてたな』

過去の出来事を蒸し返され、さつきの格好よく決めた台詞が台無しの上条だつた。インデックスは疑いの眼差しを彼に向ける。

「…………あ、あつ。あーつ…………」

上条はなんとか逆転出来ないか模索するが、まつたく良い案が出てこない。むしろ噛みつきな展開しか頭に浮かばない。その内にインデックスはチーター真っ青な俊敏さで上条の頭を両手で固定し、カバさんリスペクトを思わせる大口を開け、ツンツン頭の罪人に鉄鎌を下した。

神槍は上条から助けを求められるも、とばつちりが飛んできそうで嫌なので好きなようにやらせた。人、これを生贊と呼ぶ。

『てかさ、インデックスの事は分かつたけど、トシキの事は何も教えて貰つてなくね?』

『え、?』

神槍の体がビクウウ!!と震える。

絶望は突然、
しつもん
上条の口から降りかかつて来た。

最初に言つておくが、神槍トシキは転生者だ。違う世界から——

一学園都市にやつてきた（落とされた）

だから魔法という別世界の技術を使えるし、この世界についての知識が異常なまでに乏しい。

「そういえばそうかも。ねえ、トシキはどこ所属の魔術師なの?さつき詠唱に古代ギリシャ語使つてたからギリシャ政教?」

……流石魔道書図書館。知識が豊富すぎて恐ろしく感じてきた。

てですね』

「そういうや、学園都市なんつー魔術から一番縁がない所にいる事からしておかしいよな」

なんか無駄に名推理しちゃつてるよこの人!?!と内心ビクビクで上条を見る神槍。だがインデックスから次々と追撃を喰らう。

「ギリシャ政教の魔術は動作魔術が主流だから、古代ギリシャ語の詠唱魔術なんて凄く珍しいんだよ。それを何でとしきが使えるのかな？そもそもこの前トシキサギタ・マギカが使つてた魔法の射手つて魔術だけど、私の一〇万三〇〇〇冊の中にも載つてないんだよ。こんな事初めてかも。ねえとしき、これつて一体どーゆー事なの？」

「えーと、その……。それはですね……」

上条とインデックスにどんどん追い詰められる神槍。その顔は冷や汗がだらだらで、無理に作った笑みは引きつっている。

とくしきい。早く薄情しないと噛みついちゃうかも」「ほらほらトシキさんや。早く吐いちゃつた方が身の為で

『いや、だから。それは事情があつて言えな——きや——・ぎ)やー

「…………（→合掌中の上条）」

『当麻テメ……目の前で泣き叫んでる人がいるのに何で助けねえんだよ!? つて痛アア!!』

「はつはつは。さつき助けなかつた仕返しだコラ。いや、それにしても人が泣き叫んでる所を見るのは心がイタムナ！」

『めちゃくちや棒読みだよねそれ！――あ、なんだろう。あつちに綺麗なお花畠が見える…………』

人、これを生贊と呼ぶ。

六〇〇メートルほど離れた、雑居ビルの屋上で、スタイルは双眼鏡から目を離した。

「インデックスに同伴していた少年達の身元を探りました。……あの赤髪の少年は？」

「生きてるよ。……だが生きているとなると、向こうにも複数の魔術師がいる筈だ」

女は無言だつたが、新たな敵よりむしろ誰も死ななかつた事に安堵しているように見える。

女は腰まで届く長い黒髪をボニー・テールにまとめ、腰には二メートル以上ある日本刀が鞘に収まっている。

神裂火織。正体不明の瞬殺斬撃で、神槍を殺しかけた人間。

不良神父さまのスタイルと同様、まともな恰好とは思えなかつた。「それで、あの右手は何だつた？」

「それですが、少年の情報はあまり集まつていません。それともう一人の魔術師の少年についてですぐ……」神裂は僅かに沈黙して、

「……戸籍、経歴、名前すら分かりませんでした。分かつてているのは古代ギリシャ語を用いた魔術を扱うとしか。それも肉体強化・防御術式・魔矢……おそらく彼の実力はこの程度ではないでしよう」

神裂の言葉を聞いて、スタイルは首は動かさず視線だけを彼女に向ける。白い半袖のTシャツのすぐ下、脇腹辺りに包帯が巻かれていた。神裂が神槍の背中を斬った時に、唯一喰らつた傷だ。

「君に一撃決めたつて事は……相当の実力者という事か。それもあるの子を守りながら……どうする？どうやら火傷みたいだから僕でも治せるけど？」

「結構です」

神裂の即答だつた。その返答にステイルは口角を吊り上げた。断られるふと分かつていてわざと聞いたのだ。

「にしても名前すら分からないとほね、情報の意図的な封鎖、かな。科学サイドに寝返つた裏切り者が、どこぞの魔術結社のスパイか……そんな所かな」

裏切り者。スパイ。

極少数だがそういう魔術師も存在する。現に上条の知り合いにそういう人物がいるのだが……いや、今言うのは野暮というものだろう。

ここで彼らは『あの少年達は五行機関とは別の組織を味方につけていると踏んだ』。他の組織が、上条と神槍の情報を徹底的に消していくと勘違いしたのだ。

「神裂、この極東の島国には他に魔術組織が存在するのか？」
「学園都市で動くとなれば、何人も理事会の網にかかる筈ですが」神裂は目を閉じて、

「敵戦力は未知数、魔術サイドなのか科学サイドなのかすら不明。対してこちらの増援はナシ。難しい展開ですね」

それはまさに勘違いだつた。上条の幻想殺し（イマジンブレイカー）は『異能の力』を相手にしない限り効果はゼロ。つまり学園都市の『身体検査』に使う測定機械でチカラを測る事が出来ない。よつて、不幸にも上条は最強クラスの右手を持っているのにも関わらずLEVEL0扱いなのである。

神槍に至つては全てが間違い。彼は七月一〇に『たまたま』学園都市に現われて、『たまたま』インデックスと知り合い、『たまたま』『彼女を守る事にしただけなのだから。そこにどこぞの『組織』の後ろ立てなんてないし、そもそも科学サイドと魔術サイドのどちらの人間なのかもはつきりしていないという、神裂達からすれば迷惑極まりない立場の人間なのである。

「最悪、組織的な魔術戦に発展すると仮定しましよう。ステイル、あなたの刻印（ルーン）は防水性において致命的な欠陥を指摘された、と

聞いていますが

「その点は補強済みだ。刻印にラミネート加工を施した。同じ失敗は踏まないよ」まるでトレーディングカードのような刻印を手品師のよう取り出し、

「今度は建物のみならず、周囲二キロに渡つて結界を刻む……使用枚数は十六万四〇〇〇枚、時間にして六〇時間ほどで準備を終えるよ」現実の魔術はゲームのように呪文を唱えてハイおしまい、という訳にはいかない。

神話や伝承に基づく魔術的意味を理解し、それを様々な道具や動作によつて再現してやつと、魔術というモノは発動してくれる。魔術師の実力とは威力や規模というより、どれだけ相手に自分が組み上げた術式を解析させないか、というのが最も重要と言える。基盤となつてゐる魔術的意味に対しても対策を擊たれたら、もうその時点で魔術戦の勝敗は決したのと同じだからだ。

その点、呪文を唱えてハイおしまいで本当に『魔法』を扱える神槍トシキは、やはり『魔術師』とはどこかズれてゐる存在なのだろう。とにかく、『敵の戦力は未知数』というのは魔術師にとつて大きな痛手だった。

「楽しそうだよね……」

スタイルはポツリと小さく呟いた。

「本当に楽しそうだ……。あの子はいつでも楽しそうに生きている。……僕たちは、一体いつまであれを引き裂き続けばいいのかな……」「複雑な気持ちですか？　かつてあの場所にいた』あなたとしては……」

「フツ……いつもの事だろう？」

炎の魔術師は答える。まさしく、いつもの通りに。

「おつふろ♪おつふろ♪お・ふ・ろお♪」

と、上条と神槍の間で、両手に洗面器を抱えたインデックスは歌つていた。バジヤマから安全ピンだらけの修道服に着替えている。

上条はいつもの学生服だが、神槍は例のやけにボロボロの茶色いローブをはおつている、その下は黒のTシャツにジーンズなので、少々真夏にしては重装備の気もするが、まあ普通の格好であつた。

それにしてもあんなにバラバラな修道服をどうやつて洗つたんだろうか？やはりパーツずつに分解したんだろうか？

「何だよそんなに氣にしてたのか？正直、匂いなんてそんな氣になんねーぞ？」

「汗かいてるのが好きな人？」

『うわ…お前そんな趣味があつたのか……。ちょっと俺から離れてくれる？具体的には一億キロぐらい』

「地球から出て行けどッ！？ってか俺にそんな趣味はねえッ!!」

あれから三日経つて、ようやく神槍があちこち出歩けるようになつた時に言つた彼女の願いが風呂だつた。

ちなみに小萌先生のアパートには風呂がなく、管理人室のモノを借りるか、アパート最寄にあるボロツボロの銭湯へ行くという究極の二択しかなかつた。

そんなこんなで、洗面器を抱えて歩く若い男一人（傍から見れば一人は男か女かよく分からぬが）と少女がいた。

小萌先生は相変わらず何の事情も聞かずに神槍たちの事をアパートに泊めてくれた。神槍としても満足に動ける状態ではなかつたので居候状態である。

「どしき、どしき」

人のローブの二の腕を甘く噛みつつインデックスがややくぐもつた声で言う。噛み癖のある彼女にとつて、どうやらこれは服を引っ張つてこつち向かせる、ぐらいのジェスチャーらしい。

『ん？どうした？』

神槍は呆れたように言つた。同じように上条も呆れた様子でそれを見ている。

この三日間で二人合わせて六万回くらい彼女に名前を呼ばれたからだ。

「何でもない。用がないのに名前が呼べるつて、なんかおもしろいか

も」

たつたそれだけで、インデックスはまるで初めて遊園地にきた子供みたいな顔をする。

インデックスの懐き方が尋常ではない。

流石に六万回も用もなく名前を呼び続けられたら鬱陶しくなつてくるが、神槍たちは逆に今までこんな簡単な事もできなかつた彼女の方に複雑な気持ちを抱いてしまう。

「どうまどうま、ジャパニーズ・セントーにはコーヒー牛乳があるつて、こもえが言つてた。コーヒー牛乳って何？カプチーノみたいなの？」

「……んなエレガントなモン錢湯にはねえ。んー、けどお前にやデカい風呂は衝撃的かもな。イギリスつてホテルにあるみたいな狭いユニットバスがメジャーなんだろ？ありや？インデックスだけじやなくてトシキもか？お前あんま外国人つて感じがしねえからさ」

『いや、確かにイギリスじやユニットバスが主流だけど、俺は前に日本に住んでた事があるからあんま珍しくもねーかな』

神槍トシキが、トシキ・スプリングフイールドではなかつた時。つまり今のトシキにとつては前世の前世は生糸の日本人だつた。

「んー？……私はその辺はよくわかんないかも」

「あん？もしかしてお前日本生まれ？何だ、ガキの頃からこつちにいたんじやお前ほどんど日本人じやねーか」

『それで日本語がペラペラなのか？』

神槍のその問いにインデックスは長い銀髪を左右に流すように首を横に振つた。

「ううん。そういう意味じゃないんだよ。私、生まれはロンドンで聖ジョージ教会の中で育つてきたらしいんだよ。でも、こつちに来たのは一年前くらいかららしいんだね」

「らしい？」

上条が曖昧な表現に首を傾げたところで、

「うん。一年ぐらい前から、記憶がなくなつちゃつてるからね」

インデックスは、笑つていた。

突然のカミングアウトに神槍も上条も、何も言えなかつた。ただ、その笑みが完璧な笑みだからこそ、その裏にある焦りや辛さが見て取れた。

「最初に目が覚めた時は、自分の事もわからなかつた。だけどとにかく逃げなきやつて思つた。昨日の晩御飯も思い出せないのに、魔術師とか禁書目録とか必要悪の教会とか、そんな知識ばつかりぐるぐる回つてて、本当に怖かつた…………」

「……じゃあ。どうして記憶をなくしちまつたかも分かんねーって訳か」

「うん」

『チツ……』

インデックスの言葉に、上条は夜空を見上げ「くそつたれ」と呟き、神槍は荒々しく舌打ちした。

もつと早く——せめて一ヶ月ぐらい早くに彼女と会えていれば……。

「むむ？ どうま、なんか怒つてる？」

「……怒つてねーよ」

「なんか気に障つたなら謝るかも。どうま、何キレてるの？ 思春期ちゃん？」

「その幼児体型にだけは、思春期とか言われたくねーよな」

上条のその言葉にインデックスはムツとした表情をした。神槍も気持ちは分かるが、それを年下（おそらく）であるインデックスにあからさまに態度に出すのはどうかと思う。

「……何なのかな、それ？ やっぱり怒つてるよう見えるけど？ それともあれなの？ どうまは怒つたふりして私を困らせてる？ どうまのそういうところは嫌いかも。少しはとしきを見習つたほうがいいんだよ」

「あのな……。元から好きでもねーのに、そんな台詞吐くなよな。いくらなんでも、お前にそこまでラブコメっぽい素敵イベントなんざ期待しちゃいねーからさ」

上条の言葉を聞きながら、インデックスの様子が変わっていく事に

気づいた神槍は、フォローしようときほど思つた事をそのまま口に出す。

『駄目だぞ当麻。インデックスはまだ“子供”なんだから、もつと優しく接しないと……ってあれ？ なんで上目遣いで黙つてしまわれるのですか…………姫？』

「どしきー！ どうま！」

インデックスは頬を赤くして、ふくつと膨らませながら鈍感コンビを睨みつけ、

「だいつきらい！！」

神槍と上条は女の子に頭のてっぺんを丸かじりされるという、メタルレアな経験値を手に入れた。

「なんで俺がこんな目に……不幸だ」

『黙れ。お前に愚痴る資格はねえ。つてかお前はさつさと地球から出てけよ』

「それ本気だつたのかよ！！」

『Good luck!!』

「スゲー良い笑顔で親指立てて“頑張れ”とか言つてんじゃねーよ！！行きませんからね、上条さんはずっと地球上に居続けるからね！」

そのまま二人で雑談（一方的な罵倒とも言う）をしながら銭湯へと向かっていた。インデックスは二人を置いてさつさと先に行つてしまつた。それでも時々二人がちゃんと付いてきているか確認しているのが、神槍にしてみればかなり子供っぽい。

「あれ……？」

『…………あーあ、またかよ』

そして、大通りの横断歩道の途中で、二人はある違和感に気がついた。

この感覺を——神槍は知つてゐる。

「人が……いない……？」

そういえば、インデックスと歩いていた時から一度も人とすれ違つ

ていなかつたか……。

「ルーン」

その時、コツコツと二人の背後から足音が響く。その感情が一切感じられない声に、神槍は背中の辺りに妙な疼きを感じた

「スタイルが人払いのルーンを刻んでいるだけですよ」

「……テメエは」

「……神裂火織、と申します」

人通りの全くない……人間の気配がまったくしない交差点のド真ん中にいたのは、以前インデックスと共にいた時に襲ってきた魔術師だつた。

名は、神裂火織。

『……テメエか』

「トシキ、知つてゐるのか!?」

『ああ。俺の背中を……いや、インデックスの背中を斬ろうとした奴だ』

神裂はその時と全く同じ格好をしていた。相変わらず二メートル以上ある刀を腰にぶら下げており、その表情には『無』が張り付いている。

「改めて率直に言います。魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが

「……嫌だ、と言つたら?」

上条のその言葉に、神裂は片目を閉じ、長い日本刀の柄に手をかけた。

「仕方ありません」彼女はもう片方の目も閉じて、「名乗つてから、彼女を保護するまで」

「ドン!!」という衝撃が地震のように足元を震わせた。まるで爆弾でも爆発させたようだつた。

真後ろの、蒼い闇に覆われていた筈の夜空が夕焼けのようなオレンジ色に焼けている。どこか遠く——何百メートルも先で、巨大な炎が燃え広がっているのだ。

例えば、インデックスがいる場所で、とか。

「イン、デックス……ッ！」

『駄目だ、当麻！』

神槍が叫んだその瞬間、ビュオツ！と空気を裂くような不可視の斬撃が飛んでくる。その斬撃は鋼鉄で出来た風力発電のプロペラを、まるでバターでも裂くように切断した。除々に滑るように、プロペラの羽根が歩道橋に落下し、突き刺さつた。

また、“斬撃”だ。

「何度でも問います」

その光景と夕焼けのような空を、ただ見ている事しか出来なかつた上条の背中に、魔術師の声が響く。

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護したいのですが」

「…な、なに、言つて——やがる。テメエを相手に、降参する理由なんざ——」

そう言いながらも、上条の足はガクガクと震えていた。対して神槍は目を細くし、今は神裂の動きを観察している。

「幾度でも、何度でも問います」

神裂は刀を抜かない。ただ、刀の柄に触れただけだ。なのに、今度は斬撃が地を這うように二人に襲いかかる。

斬撃によつて抉られたアスファルトが弾丸となり、衝撃波と共に二人の間を通過した。二人の遙か後方で、アスファルトが抉られた音が響く。

「魔法名を名乗る前に、彼女を保護させてもらえませんか？」

「——つ」

上条は黙つて自分の右手に視線を移す。それが異能の力なら善悪問わざ触れるだけで打ち消す右手。魔術師にとつては天敵とも言える、右手。現にただの高校生である上条は、このチカラを使って炎の魔術師を倒した事がある。

だから大丈夫。勝てる——上条は自分に言い聞かせるように呟き、決意したように一步前に踏み出しが、それを神槍はさらに上条の前へ立つ事で制した。

「……トシキ？」

上条は赤髪が印象的な少年に尋ねる。赤い少年はただ一言、振り返る事もせず、一言。

『お前はインデックスの所へ行け』

「ナニ言つてんだ!? そんな事できる訳ねーだろ!?

上条は叫ぶが、神槍はやけに落ちついた声で、

『状況をよく考えろ。敵は『組織』だ。一人じゃない』

確かに神裂が囮となつて二人をひきつけ、その間にスタイルがインデックスを襲う可能性もある——けど、

『だからって……お前一人を置いて行けるかよ……!』

『当麻、いい加減にしろよ』神槍は鋭い眼光で魔術師を睨みつけながら、

『お前は“魔法使い”つて言葉の意味をまるで理解してない。『魔法』つてのはな、“不可能を可能にする”為のモノなんだよ』

こんな時にナニ言つてんだ、と上条が叫ぶ前に、

『まだ分からぬのか? “魔法使い”であるこの俺が、“不可能を可能に”しちまえるこの俺が——あんな下つ端キヤラに負ける訳ねーだろ』

神槍は振り返らない。振り返つて良いレベルなど、どうの昔に過ぎてている。

最後に彼は小さく、“行け”と重ねるように言った。

「ちつ、きしよう……!——死ぬんじやねえぞ、トシキ!!」

僅かに渋る様子を見せた上条だが、背を向けて夕焼けのように明るい夜空の方向へ走りだした。

「七——」

神裂は斬撃を放とうとするが、突如襲いかかって来た光の矢に妨害されてしまう。

「…………」

あくまで刀は抜かず、鞘のままの一振りで光の矢を撃墜し、神裂は攻撃の出所にいる少年を見た。

『さて、リベンジでもすつか。……魔術師』

少年はそれ以上なにも言わず、純粹な敵意を神裂にぶつける。

「……仕方ありません」彼女もまた、長い刀の柄に手をかけ、「まずは、あなたの答えを変えてみせましょう」

おそらくこの世界で初めてであろう——魔法使いと魔術師の本気の戦いが幕を上げる。

とある聖人の実力証明（インディード）

「私に勝てると思つていいのですか？以前敗北したあなたが『おいおい。『あの程度』の俺に勝つだけで天狗になつてんじやねーよ』

言いながら神槍は魔力を練り、自身の身体能力を向上させると同時に、魔法障壁で体を覆う。

『あなたがど、所属の魔術師で、どのような目的で禁書目録に近づいたかは知りませんが』神裂は相変わらずの無表情とよどみのない声で、

「手を引いて頂けませんか？相手が聖人だつたと上司に伝えれば、納得もするでしょう」

聖人。

その言葉に神槍は眉をひそめる。言葉の意味は分からぬが、おそらく強さの度合を顕わす何かだろうと神槍は推測した。

それも神裂の様子から察するに、かなり上の実力を顕わす意味だ。『前にも言つたけど、俺はインデックスの魔道書を見るつもりなんかねーし、上司からの命令でアイツの傍にいる訳じゃねーよ』

それでも、神槍は闘うと告げた。相手がこの世界においてかなりの実力者だろうと関係ない。相手がかなりの実力者なら、こつちは世界一つ救つた英雄だ。何を恐れる必要がある？

』

自分の決意を見せつけるように、神槍は拳を握つた。それを見て神裂は説得を諦めたのか、刀に手をかける。

「七閃」

再び、正体不明の斬撃が神槍に襲いかかる。その速度はまさに瞬速。瞬間と呼ばれる時間の内、七回殺せるというのも嘘ではないだろう。だが、どんなに早い攻撃でもあらかじめ来るのが分かつていれば避けるのは容易い。

横に半歩移動しただけで斬撃を避けた神槍は、そのまま神裂に突っ込む。

『質問するのは勝手だけど、答えは変わらねえよ』

「……なら、変えてみせるまで」

神裂は斬撃を避けられ僅かに驚いた表情を見せたが、すぐに元の無表情に戻った。

拳が届く範囲までやつてきた神槍は拳に力を集中させ、神裂に一撃を入れようとする。

『ツ！――？』

だが、唐突に感じた肉を裂かれる痛みに、思わず距離を取った。神槍は痛みの発生源——右の拳を見る。何か鋭利な刃物に切り裂かれたように肉が切れていて、血が垂れていた。

『……糸？——いや、ワイヤーか』

元々の細さに加え、夜の闇という事もあり全く目視できなかつたワイヤーが、血がべつたりくつついたため神槍の目に露わになつた。ワイヤーが斬撃の正体だ。ピンと張つたワイヤーを超高速で操る事で、刀の長さに関係なく斬撃に見せて切り裂いていたのだ。

普通のワイヤーならここまで早く動かしたらすぐに切れてしまう筈だが、そこは魔術で強化しているのだろう。

(当麻を行かせて正解だつたな)

たとえ、魔術で強度を上げていても、ワイヤー自体は魔術でもなんでもない『金属』だ。上条の右手は異能の力ならなんでも打ち消せるが、逆に言えば『金属』のような異能の力ではないモノには何の効果もない。

本人には悪いけど残つても足手まといになつてたな、と神槍は思つた。

推測もそこそこに、神槍は掌を神裂に向けて口早に、

『魔法の射手・光の20矢』

「(詠唱が早すぎてつ、妨害が間にあわ……ツ!)」

四方八方から光の矢が神裂に襲いかかる。

が、神裂はそれを横移動しただけで避ける。しかし神槍は既に動き出していた。

『ほらよ、じつくり味わえロボット野郎』

神裂の眼前にまで来ていた神槍は、一般人なら即死であろう威力を持つ拳で彼女に一撃を入れる。

彼女は特に驚く事もなく、右腕でそれをガードした。しかし衝撃までは殺せず、ズズツ！と何メートルか後ろに下がる。

神槍は彼女が止まるのも待たず、無詠唱の限界本数である10本も

の光の矢を放つた。

芸がない、とでも言いそうな表情で神裂は鞘を振り回すようにして叩き落としていく。

「……あなたの実力は分かりました。詠唱による閃光術式を核とした臨機応変な状況に対応できる戦闘スタイルの様ですね」

神裂は称賛しながらも、冷ややかな目で、

「しかし、それだけでは私には勝てません。この程度で『聖人』に勝てるなども思ったのですか？……だとしたらあなたは聖書を読み直すべきです」

『なるほど……これが聖人か。そもそも俺みたいな人間とは違う身体を持つてるみたいだな』

実力は十中八九神裂が上だろう。莫大な量の魔力を有していた全盛期ならともかく、僅か10分の1——魔法の射手五〇〇本分の魔力しかない今の神槍では到底敵わない。

何より、彼女はまだ魔法名を名乗っていない。

しかし、神槍は呪文を紡ぐ。今の自分に出せる最高の一撃を放つた

めに。

『ウエニアント・スピーリトウス・フルグリエンテース
來 タ れ 雷 精 風 の 精 —』

「させるとしますか？」

だが神裂がそれを許さない。彼の詠唱を止めるためにワイヤーによる斬撃が次々と飛んでくる。

神槍はそれを紙一重で避けながら、時には避け切れず額から血を流しつつも、詠唱を決して止めない。

『フレット・テンペスター・アウストリーナ
雷を纏いて吹きすさべ 南洋の風、 雷 の 暴 風 ！』

そして、神槍は全ての詠唱を完了させた。
直後。

神槍の突き出した右手から、雷を纏つた水平に突き進む竜巻が神裂へと襲いかかる。速度は音速を超えていた。その様はまさしく、暴風そのもの。しかも雷のオマケ付きだ。

聖人に激突した瞬間、ゴオオオオオオオオオオ!!と爆音のようなものが響き渡り周囲の建物の窓ガラスが一斉に割れた。
『どうだ?』『要望通り本気つて奴を見せてみた訳だけど。……つか魔力の半分持つてかれたぞ』

神槍の足元から聖人までの地面が、飛行機が胴体着陸したかのように抉れていた。大気が焼けたのかコゲくさい臭いもする。

人間が喰らえば腕どころか原型すら残さないであろう一撃を受けて、無事でいられる筈がない。

神槍は目を細め、決して小さくない期待と共に事の成り行きを確かめようとする。

“しかし”、

「……閃光術式はあくまでフェイク、だつたという訳ですか。まさかこれほどまでの一撃を隠し持っていたとは……撤回しよう、あなたに聖書を読み返す必要はありません。ですが、やはり聖人には届かない」

今だ晴れない土煙りの中で、二本の足で立っている影があつた。

聖人——神裂火織。

突如、土煙が七つに分断され一気に晴れる。見れば、無傷という訳ではないらしい。身体のあちこちから血を流している。
彼女はドロリとした感触がする唇を動かし、

「七閃」

神槍は魔法障壁を前方に集中させる。ハナから防げるとは思っていない。少しでも食い止めて避けるまでの時間を稼げればそれで良い。

ギシギシ、と障壁の役割を補う魔法陣が立てる嫌な音を聞きながら、神槍が横に転がるように回避した直後——斬撃が通り過ぎた。
「七閃」

無機質な声とチン、という金属音。前方から合計七本もの斬撃が地

を這うようにしてアスファルトを巻き散らしながら襲いかつてくれる。

神槍はそれを見て回避は不可能だと判断すると、『斬撃に向かつて自ら身体を前へ走らせた』。

当然、斬撃が人肉を切断しようと迫りくる。しかし神槍は飛んできた握り拳大のアスファルトの破片にわざとぶつかり、後ろに吹つ飛ぶ事で斬撃から身を守る。

『がつ――ハ……くつ』

地面に叩きつけられ、肺から酸素を吐きだされるのも構わず、神槍は立ち上がる。

「七閃」

聖人は刀を抜いてすらないない。魔法名を名乗つてすらないない。なのに、斬撃は神槍を確実に追い詰めていく。

目の前から空気を裂いてやつて来る斬撃——ワイヤーに神槍は手を伸ばすように突き出した。

ガギイインンン!! という音が辺りに響き渡る。魔法障壁とワイヤーが激突した音だ。

先程の一連で、一秒にも満たない時間だが斬撃を受け止められる事は分かっている。その僅かな時間の中で、神槍トシキは確実に勝利へ向けての一歩——“ではなく”一手を差し出す。

ギシ、と神槍は一時的に食い止められているワイヤーを力強く握りしめる。掌の肉が裂けるのも構わず、握りしめる。

そして一言、

『白き雷』
フルグラティオ・アルビカанс

瞬間、闇に包まれていた大通りに七本の光の筋が出現した。

神槍の掌から放出された雷撃が、ワイヤーをつたつて闇を照らしているのだ。その時に起こる摩擦熱が、光となつて二人の肉眼に映つているのである。

「なつ!?

神槍はこの時、初めて完全に神裂の無表情が驚愕に染まる瞬間を見た。

七本の光の筋が、まるで導火線のように神裂の手元へ集結するよう
に迫りくる。

さつきも言つた通り、ワイヤーは金属だ。そして金属は電気をよく
通す物質——導体として知られている。

なら話は簡単だ。

ワイヤーに高圧電流を浴びせれば、あとは勝手にコントローラーで
ある神裂の手元へ雷撃を送り届けてくれる。

ジイイイイイイイ!!と放電しながら自身を焦がそうと近づいて
くる七本の雷撃を見て、神裂は苦汁を舐めさせられる気持ちで自ら
七本のワイヤー全てを手離した。

今まで絶対的な威力を誇っていた、七閃を捨てる行為だと知りながら

ら。

『セリエス・フルグラーリス
魔法の射手・雷の100矢!!』

神裂が慌てて敵に意識を戻してみれば、既に神槍は懐へ潜り込んで
おり、拳を打ちこんでいた。そんな状況でも神裂は見逃さなかつた、
彼の拳に膨大量の雷撃が吸収されているのを。

「ぐつ、ぎ——ツ！」

咄嗟に鞘を楯にして防いだものの、彼の拳から伝わってくる雷撃と
衝撃が、その場で耐えきる事を許さなかつた。

それこそ神裂の身体は砲弾のように吹っ飛び、何十メートルも先で
やつと停止した。

『ハア、ハア……』

神槍は乱れた息を必死に整えていた。視界にチラつく星のような
光を無視し、神裂の方を見る。

前を見た時には、神裂の蹴りが眼前に迫つていた。

『ぐつ……!』

人間には到底出せない力で放たれたその一撃は、魔法障壁で緩和されて
いる筈なのに神槍の腹部に思い切りめり込んだ。

口から血がこぼれ出すが、それを手の甲で拭い、追撃に備える。

神裂は七閃を封じられると、すぐさま戦法を変えてきた。一刀両断の斬撃から、一撃粉碎の近接格闘へと。

手足に加え鞘を鈍器として攻撃を繰り出す神裂に、神槍は完全に防戦一方になつてしまふ。

ガードすれば痺れるような痛みが襲い、避けねば次の一撃が既に発射されている。

このままではジリ貧になる、分かついても形成を逆転出来ない。焦りを感じつつも、神槍には何も出来なかつた。

そしてついに、神槍の腹部に神裂の拳が命中した。

『ゞつ……あ……ッ!!』

後ろに吹つ飛ばされ、口から血が漏れる。

それでも神槍は立ち上がり、口についた血を払つて神裂を睨みつける。

「もう、良いでしよう?」むしろ痛々しそうな、小さな声だつた。

「あなたが彼女にそこまでする理由はない筈です。聖人を相手にここまで生き残れれば上等です、それだけやれば彼女も責める事はないでしょ?」

『……………』

口の中の鉄の味を噛みしめながら、神槍は思い返す。

異世界に落とされ、最初に出会つた小さな少女の事を。

少女は笑つていた。「おなかがへつた」とか言つて、笑つていた。

でもその笑みは……笑みであつて笑みじやない——幻想と虚勢で作り上げられた薄っぺらいモノだつた。

白い少女はとある事情を抱えていた。特殊な体質を持つていて、頭の中に爆弾のような知識を溜めこんでいるという……『小さい事情』を。

そのせいで少女は大勢の魔術師から追われる身だ。ぶつ倒れるまで空腹に我慢しなきやいけない立場にいる人間だ。

だからつて、「たすけて」と叫ぶ事すら許されないのか?

だからつて、人知れず泣いて、絶望して、いつまでも逃げ続けるよう人生を送らなくちゃいけないのか?

(そんなのは……間違ってる)

だつて、インデックスは何も悪くない。

生まれつきの体質を利用されただけで、自ら望んで魔導書図書館なんかになつた訳じやない。限られた人間に悪用されているだけで、世界全体から嫌われるような事をした訳じやない。

(そんなのは間違ってる……!!)

きっと、神槍自身がサラリと何の気もなしに言つた『約束』に、少女は歓喜したのだろう。嬉しかつたんだろう。心の底から——笑えたのだろう。

『神裂火織。ひとつだけ答えろ——』

神槍は血にまみれた拳を握る。

握る！

『テメエは本当に——インデックスが核爆弾かなんかの危険物にしか見えねえのかよ？上司から命令されたつて理由だけで——アイツに涙を流させても良いつて思つてんのかよ？そんな素晴らしくて誰だつて何だつて救える力を——こんなつまんねえ形で振るつても良いとホントに思つてんのかよ！？』

『魔法使い』の少年は叫ぶ。血を吐くように、叫ぶ。

こんな事でわざわざ、不可能を可能にする必要なんてない。だつて、少女は神槍がサラリといつたあの『約束』に救われたんだから。だから今度も、サラリとあのボロボロな少女を救つてやる。

『答えるよ、聖人』

最後に神槍は、重ねるように言つた。

「……私。だつて」

聖人は追い詰められていた。

今まで圧倒的な力で敵をねじ伏せていた、この世界で核爆弾と同等の扱いを受けるような人間が、だ。

「私だつて、好きでこんな事をしている訳ではありません」

『?ナニ言つて——』

「けど、こうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまうんですよ」

神裂は遮るように言つた。その口調は、今にも泣き出しそうな子供みたいだつた。

けれど、神裂火織は言つた。

「私の所属する組織の名前は、あの子と同じ、イギリス教会の中にある
——必要悪の教会」

血を吐くように、言つた。

「彼女は、私の同僚にして——大切な親友、なんですよ」

とある戦闘の終結同盟（アウトフレンド）

神裂の言葉に、神槍の頭があつという間に「？」で埋め尽くされていく。

（コイツが……インデックスの同僚？ 親友？ って事は……必要悪の教会の人間つて事か？）

おかしい、と神槍は思った。

インデックスは、イギリス政教の教会を安全地帯としていた。そこに辿り着ければもう大丈夫だと言っていた。

なのに、今まで敵だと思って恐れていた人間が、味方の筈のイギリス政教の魔術師だった？

神槍はゆつくりと言葉を選ぶように、

『おかしいだろ……。お前の話が本当なら、何でインデックスを襲うんだ？』

「そうしないと彼女は生きていけないんです。……死んで、しまうんですね」 神裂は目を伏せて、

「完全記憶能力……魔術でも超能力でもない『ただの体質』。それが『原因』であり『全て』です……」

神裂は全てを話した。

インデックスの脳の八五%は一〇万三〇〇〇冊の記憶のために使われている。

故に彼女は残りの十五%しか脳を使えない。

並みの人間と同じように『記憶』していけば、すぐに脳がパンクしてしまう。

しかし、残りの十五%でも並みの人間と同じように『忘れる』事によつて整理するため問題はない。

だけど、インデックスには“それ”が出来ない。

一度見たモノを絶対に忘れない——忘れられない、完全記憶能力のせいで。

人間の脳の容量は意外に小さい。それでも人間が生きていくのは、『いらない記憶』を『忘れる』事によつて、知らず知らずの内に脳

を整理してパンクするのを防いでいるからだ。

でもインデックスは『忘れる』事が出来ないため、どうでもいいゴミ記憶にあつという間に残りの十五%を埋め尽くされてしまう。

脳のパンク——つまり、死。

自分の力で『忘れる』事が出来ないから、魔術などという異能の力に頼つて『忘れさせる』しか生存方法がない。

『……いつまで、だ?』

否定ではなく質問をしてしまった時点で、神槍は心のどこかで認めてしまっていた。

『アイツの脳がパンクするまで、あとどれくらい保つんだ?』

「記憶の消去は、きつかり一年周期に行います」神裂は疲れたように、「……あと三日が限界です。早すぎても遅すぎても話になりません。
"ちょうどその時でなければ記憶を消す事はできないんです"。
……あの子の方も、予兆となる、強烈な頭痛が現れていなければ良いのですが」

神槍はゾッとした。インデックスは一年ほど前から記憶を失つている、と言つていた。

そして、頭痛。——神槍はてつきり、背中の怪我を治してくれた時の回復魔術の反動だと思つていた。

事実、魔術に一番詳しいインデックス本人がそう言つていたのだから。

“だが、インデックスが何か勘違いをしていたとしたら?”

もう彼女は、いつ頭がパンクしてもおかしくない状態で動きまわつてているだけ、だつたら?

「分かつて、いただけましたか?」

神裂火織は言う。瞳に涙はない、そんな安っぽい感情表現すら許さないという感じで。

「私達に、彼女を傷付ける意思はありません。むしろ、私達でなければ彼女を救う事はできない。引き渡してくれませんか、あなたが本当にあの子を想つて今この場に立つてゐるのなら、それがあなたにとつての『最善策』の筈です」

『……………』

神槍は黙りこんでしまう。一瞬、彼女の顔が脳裏をよぎり奥歯を噛み締める。

「それに、記憶を消してしまえば彼女をあなたの事も何も覚えていませんよ。目覚めた後の彼女には、魔術師のあなたは『一〇万三〇〇〇冊を狙う天敵』にしか映らない筈です」

『……………』

神槍は黙つて、黙つて黙つて——ひとつの違和感を覚えた。
「そんな彼女を助けたところで、あなたには何の益にもなりませんよ」
『……ふつ、ざけんなよ』魔法使いの少年の瞳に、力が戻る。

『そうやつて、利益とか不利益でしか考えられねえのかよテメエは!?
前にも言つたよな、アイツがどんな事情を抱えていようが、俺はいつ
でもどこでも駆けつけて——アイツを救うと!!不可能とか可能だと
かの前に、これだけは絶対なんだよ!!』

『……………』

『もう一つ答える、魔術師。何で、誤解を解こうとしねえんだ? イン
デックスが『忘れてる』だけなら、「自分達は仲間だ、怖がる必要はな
いんだよ」って言えばいいだろ。それなのに、何でテメエらは敵とし
てアイツを追いかけ回してんだよ! ナニ勝手に諦めてんだよ、見限つ
てんだよ! テメエ、アイツの気持ちを何だと

「——うるつせえんだよ、ド素人が!!」

神槍の叫びが、真上から襲いかかつて来た神裂の咆哮によつてかき
消された。

「知ったような口を利くな!! 私達が今までどんな気持ちであの子の記
憶を奪つて來たと思つてるんですか!? 分かるんですか、どこの馬の骨
かも知らないあなた如きに! あなた達はステイルが殺人狂だとか言
いましたけどね、アレが一体どんな気持ちであの子に敵を名乗つてい
るのか! 大切な仲間のために泥を被り続けるステイルの気持ちが、あ
なたなんかに分かるんですか!?

『——ツ!』

何か思う前に、神裂の蹴りがクロスガードの上から襲いかかる。遠

慮も手加減もない一撃に、神槍の身体が浮いて、二、三メートルも転がつた。

腕の骨が折れたんじやないか、と思つてしまふぐらいに両腕から痺れるような痛みを感じる。

両腕の状態を確認しようとすると前に、頭上の月を背負うように神裂が飛びかかってきた。聖人としての能力を活用し、純粹な脚力だけで真上に三メートルも飛び上がり、
『……ぐつ。障壁最大!!』

ヒュンッ!!という虚空を破るような音と共に、神裂の落下コースを塞ぐように合計10枚もの魔法陣が現れる。一枚一枚に防御の意味が込められている、即席の堅牢な楯だ。

「あアアアああああああああああああああああああああああああ!!!」

神裂の咆哮とバキゴキ、というガラスが破られるような音。

七天七刀の鞘、その平たい先端が、それら全てを突き破り神槍の腹部に突き刺さつた。

『が……ぐあッ!!』

もはや胃液など出し尽くした神槍の口から、赤黒い鮮血が飛び出した。

「私達だつて頑張つたよ、頑張つたんですよ！春を過ごし夏を過ごし秋を過ごし冬を過ごし！忘れないように一つの約束をして日記やアルバムを胸に抱かせて！」

右手左手右足左足鞘——鞭のようにしなるくせに金属バットのように硬い鈍器が、神槍の全身に次々と降り注ぐ。

常に身に纏つている魔法障壁など意味がなかつた。それでも神槍は必至に攻撃をいなし、受け流す。インパクトを逃がしている筈なのに、体に痣や出血が増えていく。

『……ッ！』

横からバットのフルスイングのように迫る鞘を見て、神槍は腕でガードしたが、足が浮き、吹っ飛ばされる。

背中を地面上にこすりつけて、やつと止まつたと思い顔を上げると、神裂の杭のような踵かかとが顔を踏みつぶさんと振り下ろされたところ

だつた。

転がるようにそれを回避する。一瞬前まで自分がいた地面は、蜘蛛の巣状にヒビが入り碎かれていた。

「……それでも、ダメだつたんですよ」

ピタリと、嵐のような攻撃が止まつた。

「日記を見ても、アルバムの写真を眺めても……あの子はね、ゴメンなさいつて言うんですよ。それでも、一から思い出を作り直しても……ゼロに還る」

ガチガチと震えて、もう一步も動けないという感じで。

「私達はもう……耐えられません。これ以上、彼女の笑顔を見続けるなんて、不可能です」

始めからインデックスが失うべき『思い出』を持たなければ記憶を失う時のショックも減る。だから、親友を捨てて『敵』である事にした。

インデックスを孤独にして、思い出（すべて）を真っ黒に塗りつぶす事で。

『……』
インデックスの失うべき思い出を少しでも軽いモノにしようとした。

指を一ミリでも動かすだけで気が飛ぶような体の神槍は、ぼんやりとしている頭で神裂の言葉を噛み締める。

（……ツライだろうな。一夜前までは笑顔で抱きついてきた人間が、一夜明けるだけで冷たい目で他人のように接しられるんだから）

実際にその立場にいない神槍でも、なんとなくわかつた。

それは、とてもとても悲しくて、涙が止まらないような事なのだろう。

『だけど、それは。

『ふざけん、な……』神槍は、生まれたての小鹿のように震える二本の足を動かし、

『不可能だからって、そこで立ち止まつたのか。自分が耐えられないからつて、語り合う事をやめたのか!! テメエは一番ツライ筈のイン

デックスを見捨てて自分だけ逃げたんだ。テメエの臆病のツケをイ
ンデックスに払わせてんじやねえぞ!!』

神槍は立ち上がった、足元に血の池を作りながら。

彼の、鮮血で濡れたせいで垂れ下つた前髪から覗く、ギラリとした眼光に、不覚にも神裂は体が震えた。

「じゃあ。他に……どんな道があつたと言うんですかッ！」

『道がないなら作ればいい！一年経つても救えないなら、次の一年をまた頑張ればいいだろ!!可能にするための努力を、インデックスが死ぬまで続けるよ！たつたそれだけの事だろうが!!』

もう魔力も何もない拳を、振りかぶる。それだけで体のあちこちから血が噴き出した。

「その、体で……戦うつもりですか？」

『……黙れ。悲劇のヒロイン気取りの臆病者が吠えてんじやねえぞ』

「戦つて、何になるんですか？」逆に、神裂の方が戸惑つているようだつた。

「たとえ私を倒したところで、背後には必要悪の教会が控えています。……教会全体から見れば私など、こんな極東の島国に出張させられるような下つ端にすぎません」

それはそうだろう。もしも彼女が上に進言できる立場にいる人間なら、少なくともこんな島国にはいない筈なのだから。

『黙れって……言つてんだろう!!』

振りかぶっている拳に、力が宿つた。

『んなモン関係ねえ!!テメエは何のために力を求めたんだよ!!』

ボロボロの足を一步、前へ。

『こんな風に挫折するためか？違うだろ、そうじやねえだろ！不可能を可能に、弱い自分じや救えない者を救える者に！救いたい者を救えた者に変えるためじやねえのかよ!!』

神裂の目を真正面から睨みつけて、

『テメエは何のために強くなつた!?』

ボロボロの右手に力を込め、血まみれの拳を握り、

『テメエはその手で、誰を守りたかつた!?』

力も何もでない拳を、神裂の顔面へと叩きこんだ。

それでも、神裂は投げだされるように後ろへ倒れこんだ。

『テメエが守ろうとしているのは、インデックスじゃねえ。自分自身

だろ！』崩れた神裂を見下ろすように、

『だつたら……テメエは立ち上がるべきだ。インデックスの敵として
じやなくて、『仲間』としてな』

神槍はゆっくりと、ペタンと座り込んでいる神裂に手を差し伸べた。

『生憎、俺は戦闘魔法以外はからつきしでな。忘却術（記憶を封じたり感情を操つたりする魔法）は専門外なんだ。だから――“力を貸してくれ、神裂”』

「…………」

神裂はしばらく呆然とした表情で、神槍を眺めた後、

「……本気ですか？ だつて、私達は敵同士なんですよ？ 私がその気になればいくらでもあなたを切り刻む事が出来るんですよ？」

『別に笑い合う仲間になれつて言つてる訳じやねえよ。目的が同じだから成立する部分同盟として、だ。お前らの事を不要だと判断したら俺は容赦なく同盟を切る』

物騒な事を言つてゐるくせに、神槍は誰がどう見ても笑つていた。まるで一〇年来の親友に笑いかけるようだ。

「……そういう事でしたら、了承しましよう」

神裂は手を取り、立ち上がった。彼女は元の無表情に戻つて、

「何か策もあるのですか？」

『とりあえずは科学から探つてみようと思う。超能力は記憶関連も結構あるらしいしな』

『期限は三日……良い悪あがきを期待しています』

『――』神槍は踵を返し、彼女に背を向けて歩き出し、

『上等だ』

とある病魔の対策治療（ディスピクシイクシール）

三日後。

神槍（しんやり）と神裂が激闘を繰り広げていた一方その頃、炎の魔術師スタイル・マグヌスにコテンパンにされた上条当麻は、もはや避難所扱いになつている月詠小萌の家で目を覚ました。

『ん？……やつと起きたか、当麻』

「トシキ？——ツ！？」

起き上がるうとしたが全身に走る痛みに中断され、また寝転がる上条。その隣では神槍が一冊の分厚い本を読み終え、床に置いたところだ。

「痛てて、何だこりや。陽が昇つてるつて事は、一晩明けたんだろ。今何時なんだよ？」

いや、と答える神槍の表情には多少の疲れが見えた。

聖人との戦いを終えた彼は、すぐにインデックスの元へ向かつた。その途中で倒れている上条を発見、回収し、銭湯で待つていたインデックスに魔術師に襲われた事を話した。（マジ泣きされたので必死になだめた……やつぱ子供じやん）。

『三日。三日も気絶してたんだよ、お前は』

「みつか……三日だつて！——ツ！ インデックスはどこだ!?」

上条が焦っているのには理由がある。神槍が神裂火織からインデックスの事情を聞いたのと同じように、彼もスタイルから説明を受けたのだ。

インデックスの記憶消去までの猶予時間、それが三日だつた。自分はその大事な大事な三日間を丸々無駄にしてしまつた。

悔やんでも悔やみ切れない時間の浪費だ。

もしかしたら彼女はもう……、上条の頭に最悪な展開がよぎる。

『大丈夫だ。アイツなら今、小萌先生と管理人さんトコの風呂に——』
「ただいまです！」

ほら、帰ってきた。神槍がそう言うと、ドアが開き少女二人（いや片方は成人してる……はず）が入つて來た。

と、上条が起きている事に気づいたインデックスが駆け寄つてき
た。

「どうま、大丈夫!?どこか痛くない!?」

「痛いって、あのな。そんなに痛かつたらのた打ち回つてるつつの。
何だよこの全身包帯、お前ちよつと大袈裟すぎんじゃねえの?」
「……」

インデックスは何も言わなかつた。

それから、ついに耐えきれなくなつたという感じでじわりと涙があ
ふれてくる。そこで、気づいた。“痛みを感じない方が危ない状態”
だという事に。

眼前に迫る業火を思い出してしまい、体温が下がつたような寒気を
感じた。

そんな上条の様子に気づいたのか、神槍は小さく笑つて持つている
皿を見せながら、

『なんか食べるか？お粥にリンゴやら色々あるぜ？』

「いや食べるつてこの手でどうやつて食えつて——」

言いかけて、上条は神槍とインデックスの手におハシが握られてい
る事に気づいた。

「……あの、お二人さん？」

「うん？今さら気にしなくてもいいんだよ？こうして私かとしきが食
べさせてあげなきや三日の間に飢え死にしちやつてるんだから」

「……いや、いい。とりあえず深く考える時間をください神様」

（え、何？つまりこーゆー事？この不幸の化身こと上条当麻が三日も
の間、可愛いヒロインと中性的な美“少年”（→男なのが非常に残念）
に看病プレイをされていたと？あの男の夢であるはいご主人様アー
ン？とかを？）

「……おお。

お父様お母様、わたくしにもまだまだ幸せがあつたようです、と不
覚にも純情少年上条の瞳から涙がほろりとこぼれ落ちた。

『……なんで泣いてんだよ。ほら、とりあえず食べとけつて』神槍が差

し出したお皿の上には綺麗に切られたりングがある。

なにげにウサちゃんカツトなのがグッジョブ!!とバクバクとリンクゴを食べ進めていく幸運値が吹っ切れている上条。

しかし、少年は知らない。

この世界は少年が思っているよりずっと、不幸に溢れている事に。

「うう、こんなに幸せなのは初めてです……。ひつゝ、ヒロインと美人さんに囲まれているなんて……」

『……………』
神槍の表情が、凍つた。

「？」あれ？なんだか様子がおかしいぞ、と最後のリンクゴを食べ終えた上条は、笑顔のまま固まっている神槍に視線を向ける。

顔は笑顔だけど目がまつたく笑つてないのは気のせいですか？と不幸の予感を感じ取った上条。明らかに怒ってる。

そこで、上条はようやく思い出した。彼が前に言つていた一言を。
——今度俺のコンプレックスである女顔の事をいじりやがつたらボコるるので覚悟しろ。

ボコる？え、美人さんって言つただけでアウトなの？

「えと、もしかして……まさかのブチ切れモードでせうか？」

『……………』

神槍は答えない。花も恥じらう美笑を維持したまま、聖人さえ厄介だと言つたパンチが不幸野郎に降りそそぐ。

神槍トシキという少年が本当の意味でブチ切れる事はあまりない。少しイラツつと来たりする事は多々あるが、マジで手が出たりする事はごく稀である。

しかしそれには例外がある。

コンプレックスである女顔の事を言わると、問答無用に沸点を突破してしまうのだ。例えば「女っぽい」とか「中性的だね」とか「美人さん」とかである。

これには過去のトラウマが関係しているのだが……今は秘密にさせていただこう。

魔法使いの少年にも触れられたくない部分があるという事でここは、一つ。

「うん？ 今なんか変な説明タイムがあつた気がするんだよ」

『気のせい氣のせい。それとインデックス、そういう発言は控えるよう』

「……つーかトシキ、突然ボコボコにされた上条さんに対するごめんなさいはどうした』

ただでさえボロボロな身体に、パネエ威力のパンチを決められた上条は、力を振り絞つて抗議するが「人の性別さえ認識できない奴なんて滅べばいいんだ」と未だにイライラしている神槍に一刀両断されてしまう。

もはや「不幸だ」と言う体力も残っていない上条はもぞもぞと布団に戻った。

と、この三日間小萌先生の家にある医学書を読み漁っていた（らしい）神槍がスクッと立ち上がり、玄関に向かう。

「——？ オイ、トシキ。どつか行くのか？」

『ちよつと“良い医者”っぽい人を見つけたから直接会つてくる』
時間がない。

インデックスは隠しているが、明らかに顔色が悪いし米神を押さえ
る仕草が増えている。

おそらくは頭痛。頭のパンクの予兆。

この三日間、持ち主が教師なだけあつて家にも大量の本があつたので粗方は読んでみたが、そもそも小萌先生とは分野が違うらしく完全記憶能力に関する記述は見つけられなかつた。

もしかしたら、あまり知られていない体质なのかも知れない。

だが、まったく収穫がなかつた訳ではない。

様々な医学書に出てきた一人の医者。本によると『死なない限り』
あらゆる患者を救う事が可能だと言う。

嘘かも知れないし本に大袈裟に書かれているだけかも知れない。
完全記憶能力なんて知らない、と言で断じられてしまうかもしね

い。

(それでも、今の俺にできる事はそれぐらいしかない)

「としき、どこか行つちやうの?」

『すぐに戻つてくるよ。その間、当麻と仲良くしてんんだぞ?』

『?……うん!』

ポンポン、とインデックスの頭を優しく撫でる。彼女は不思議そうな顔をしたが、除々に笑みが広がつてくる。

上条はその横で「お兄ちゃんかよ」と呟いている。

適当に上条に言い返して、「行つてくる」とインデックスに言つてからバタンと扉を閉める。

『……待つてろ』

重ねるように呟いてから、神槍は走り出した。

絶望から逃げるためでなく、希望を抱えて戻つてくるために。

すっかり残業になつてしまつたね、とカエル顔の医者は蛍光灯の光に照らされる診察室で呟いた。回転式のイスをクルクル回して窓から外を見てみれば、もうすっかり陽は落ち満月がこんにちはしている。時刻は……十一時半か。

嫌がらせとしか思えないほど机に散乱している書類達を見て、息を吐く。医者は何も手術や患者と話しをするだけではない。書類作成だつて仕事の一つだ。

(やつと終わつた。手術二連チャンのあとに三十枚は流石にキツイね)

書類処理用に誰か雇つちやおうかな、と半分以上本気で思う。

ハアともう一度小さく息を吐いて、白衣をはためかせイスから立ち上がろうとする。

立ち上がろうと、腰に力を入れた瞬間だつた。

『なあ、完全記憶能力つて知つてるか』

開けたままにしておいた窓から声がしたのは。

見れば、赤髪とまつ白い肌が特徴的な少年が窓の外からこちらを見ていた。

ここは五階だ。間違つても足が届く高さではない。壁にひつ正在するよりも見えない。身体がグラついていない所を見ると、ちゃんとした足場に立つてているかのようだった。

「……念動力でも使つて空中に力場を造つているのかい？随分と奇抜な登場方法だね。とりあえず入つて来たらどうだい？ウチの診療は二四時間制だよ」

『遠慮しとく。時間ががないんだ、質問に答える』

「ハア、とカエル顔の医者はまたまた小さく息を吐いた。『まだ残業は終わりそうにないな』と。

「完全記憶能力ね。あれは病氣というより体質だね？分野的には脳医学になるのかな。でもま、問題ない。僕は医者だよ？医学つていう大きな分類の中に入つてさえいれば、何でも解決できる」

医者は引き出しから白紙のカルテを取り出し、

「で、患者は君なのかな？それともどこかで待つてているのかな？ああ、そうだ。この僕に相談した時点では誰であろうとソイツは僕の患者だ。完璧な健康体になるまでは麻酔薬を注射してでも逃さないからね？」
『お前……』

「ん？ん？そんな意外そうな顔しないでくれ。確かに、その症例に対しては二六ほど治療策を用意しているけど……どれがお好みかな？なるべく話は早く済まそう、その方が僕も助かる」

カエル顔の医者はニコリと笑い、乱れていた白衣を改めて着直した。

「一〇分間だ。良いな！」
どうやらこの物語は、罪もない小さな少女を見捨てるほど腐つちやいないらしい。

ギリギリと。ステイルは今にも上条の喉に喰いつきそうになるのを必死に抑えて言い放ち、きびすを返してアパートのドアへ向かった。

神裂は何も言わずにステイルに続いて部屋を出たが、その目はとても辛そうに笑っていた。

バタン、とドアが閉まる。

後には、上条と頭を圧迫され指一本動かせないインデックスだけが残された。命を懸けて——上条ではなく、インデックスの命を削つて手に入れた一〇分間。

「——コイツに“着いてくるな”って言われた時も、トシキの背中が斬られた時も。なんで俺には何もできねーのかな」

返事は、ない。

彼女はもう、答えてくれない。

「……どうして、たつた一人——苦しんでる女の子を助ける事もできねーのかな」

ぐつ、と。

悔しさのあまり右手を握る。

握るだけで、他には何もできない自分に嫌気が刺した。

「あ——か。ふ」

ぐつたりとしたインデックスの口から声が漏れて、上条はビクンと肩を震わせた。

インデックスが、薄目を開けていた。何で自分が布団の上なんかで寝転がっているのか、ここで眠つていたはずの上条はどこへ行つたのか、ちょっと出てくると言つて居なくなつた神槍は無事なのか、ただそれだけが心配だと言わんばかりに。それだけが心配だと言わんばかりに。自分の事など、すっかり忘れて。

「……」

上条は奥歯を噛み締めた。

恐い。

今の彼女の前に立つ事が、他のどんな事より恐かった。
だけど、逃げ出す訳には、いかなかつた。

「どう、ま?」

上条が布団に近づくと、インデックスは汗びつしょりの顔で安堵したように、心底安堵したようにホツと息をついた。

「……ゴメン」

「……? どうま、としきは帰ってきた? 今どこに居るの?」

「アイツは……、今も戦つてるよ。『俺と違つて』」

「?」

言葉の意味が分からずインデックスは首を傾げるが、やがて部屋に落書きのような陣が張つてある事に気がついた。

「どうま、部屋に陣が張つてある」

布団の近くに描かれている模様を見ながら、何も知らない少女みたいに首を傾げている。

「……っ」

上条は一瞬、奥歯を噛み締めた。

ほんの一瞬、誰にも気づかれる事なく、表情は戻る。

「……回復魔術、だつてさ。お前の頭痛がそんなひどくなんのがいけねーんだぞ?」

「? 魔術つて……誰が」

そこまで言つた時、ようやくインデックスは『ある可能性』に気がついた。

「!」

もう動かせない体を無理矢理に動かして、インデックスは跳ね起きようとする。ズキン、とその顔が歪んだのを見た瞬間、上条は思わずインデックスの両肩を掴んで強引にでも布団に押し戻した。

「どうま! また魔術師が来たんでしょ! もしかしてどしきが今戦つてるつてアイツらとつて事!? なら早く行かなきゃ!!」

「……もう、良いんだ。インデックス」

「どうま!」

「終わつたんだよ。……もう、終わつちまつたんだ」

上条当麻はそう告げた。

「……ゴメン。俺、強くなるから。お前をこんな風に扱う連中、全部一人残らずブツ飛ばせるぐらい強くなるから…」

泣く事さえ、卑怯。

同情を誘う事など、もつてのほか。

“アイツと違つて”、既に諦めてしまつた自分は。

「……待つてろよ。今度は絶対、完璧に助け出してみせるから」

インデックスの目には、それがどんな風に映ったのか。

インデックスの耳には、それがどんな風に聞こえたのか。

「分かった。待ってる」

事情を知らなければ、上条が保身のためにインデックスを売つたとしか見えない。

なのに、彼女は笑っていた。

上条には、分からぬ。

どうして彼女がこんなに人を信用してくれるのか、そんな事はもう分からぬ。

だけど、一つだけ分かっている事がある。

自分はもう、嘘を貫き通す事ぐらいでしか彼女を笑顔にできないほど、諦めてしまつた人間だという事だ。

と、その時。

落書きのような模様が描かれている窓が、外から石を投げられたかのように粉々にバリいいイイイイイイン!!と碎け散つた。

「ッ!」

向かってくる無数の鋭利なガラスの欠片を見て、上条は咄嗟に体を楯にしてインデックスを庇おうとする。

が、理解不能な事にガラスの欠片は上条とインデックスを避けるよう軌道を逸らした。バラバラと上条達の周りにガラスが散らばる。「え?」

自分とインデックスが無傷である事を果然と確認して、上条は窓の方を見た。何かが窓をぶち壊しながら部屋に入つてくるのを、彼は見逃さなかつた。

石でも転がつていると予想したが——違つた。

転がつてゐるのではなく二本の脚できちんと自立しているようだ。段々と上に視線を上げてみると、『それ』には手もあつた。片手に2メートルほどの金属制の筒……金属パイプ?を持つてゐる。さらに上を見ると、男と女の狭間に居るような容姿。

何より、ルビームに鮮やかで印象に残る赤髪。

「……と、しき?」

『つたく、ナニ勝手に諦めてんだバーカ。お前らしくもねえ』

今までのシリアル空間は何だったのか、と場違い思考を与えるような軽口を彼は言つた。

しかし。その口調を聞いて、何故かしつくり来ているのを上条は感じていた。

ボロボロのローブを纏い、背丈より長い棒状のモノを持った彼を見ていると、

(おいおい。これじゃホントに……)

『手伝え、当麻。インデックスを助けられるのはお前しかいない』

魔法使いが、そこにいた。

とある小部屋の大規模戦闘（ビツクスケール）

「どしき！」

突然現れた神槍に上条は固まつてしまつたが、インデックスは彼の無事な姿を見てすぐに名前を呼んだ。

『インデックス……、良かつた。どうにか間に合つたか』

彼はホツとしたような表情で布団のすぐ傍にしゃがみ込み、汗で額に張り付いてしまつてゐる彼女の前髪を優しい手つきで払つてやる。インデックスはそれに笑顔で応じた。その顔には喜びの他にも安堵の色も見て取れた。心配していたのだろう、神槍の事を。頭を圧迫され口々に動かす事も出来ない自分の身体よりも。

自分の事など、蔑ろにして。

『ごめんな、インデックス。もつと早く帰つてこれれば……』

いいよ。そんなこと、と彼女は言つた。

笑顔で——言つた。

『つ……。すぐに、こんな事終わらせるからさ。もう少しだけ、待つてくれるか……』

もしかすると、当人のインデックスよりも実際に痛みを感じていな
い神槍の方が、酷い顔をしていたかもしれない。

それを見上げていたインデックスは、むしろ彼を気遣うような音色で、

「……うん、待つてる。だからね……」

——どこにも行かないで。

と、言つて、笑つて、ゆつくり瞼を落として、

「……」

ぱたり、と音を立てて。インデックスの手から力が抜けて、布団の上に落ちた。

再び意識を失つたインデックスは、まるで死人のようだつた。

「いん、でつくす……？」

今まで呆然としていた上条が我に返り彼女の名を呼ぶが、応答はなかつた。返事はないくせに、その顔には悲痛の表情が張りついてい

た。

ついに頭の圧迫が限界を超えた、脳が本来の仕事を放棄したのか。想像を絶する激痛に精神が持たなかつたのか。

そんな事は分からぬし、分かる必要もない。

彼女が苦しんでいて、救いを求めている事さえ分かつていればそれでいい。

『……』

神槍はピクリとも動かないインデックスの小さな手を取つた。その手は温かかった。彼女と過ごした時間は楽しかつた。

その事実をもう一度噛み締めて、

『……当麻、今からインデックスを助ける方法を教える。いいか、一言でも聞き逃すな。集中力を欠くな。もうタイムリミットは過ぎてるんだ、二度説明している暇はねえ』

「つ……分かつてる。ああ、分かつてるよ!!」

握つていた手を離して、そつと布団の上に戻す。そして上条と視線を合わせて、

『それでいい。それでこそ上の上条当麻だ』

力エル顔の医者いわく。

人間の脳は元々一四〇年分の記憶が可能との事。一〇〇年程度しか生きられない人間がどれだけ知識を溜めこんでも、容量をいっぱいにする事はできない。残りの四〇年分はどうやつたつて埋められな。日々『覚える→忘れる』のループをしているのだから尚更だ。

なら、『覚える→忘れる』のループができるない完全記憶能力者の場合はどうだろうか。記憶力にモノを言わせて一〇万三〇〇〇冊もの本の内容を全て記憶したらどうだろうか。

それにしたつて答えは変わらない。そもそも人の記憶は一つだけではなく、言葉や意味を司る『意味記憶』、運動の慣れを司る『手続記憶』などがある。記憶の種類によつて入れ物が違うのだ。

頭に強い衝撃を受けて記憶喪失になつても、赤ん坊のようにハイハイから始める訳ではないのと同じように。

“どれだけ本の内容を覚えて『意味記憶』を増やした所で、思い出を司る『エピソード記憶』を削らなきやいけないなんて有り得ない”のと同じように。

ここまで話して、神槍は床に散らばっている本の大群を見た。彼が三日間の間読みふけっていた医学書の山だ。

（そもそもあれだけの医学書に名前すら載つてない時点で気づくべきだつたんだ。医学書に載せる必要がないぐらい、“無害な体質” だつて事に）

「けど、何で？ 完全記憶能力が原因じやないなら、何でインデックスはこんなにも苦しんでるんだ……？」

『あるだろ、当麻。この世界には無害な体質を不治の病にしちまえる技術が。不可能を可能にしちまえる文化が』

そこまで言われて、上条はハツ、と息を詰まらせた。

そう、あつたではないか。この数日『それ』にどれだけ困られたか。

『魔術』か……いや、でも待つてくれ。魔術が原因なら一体誰がインデックスをこんな風にしたつて言うんだ、スタイル達が嘘を言つているようには見えなかつたぞ』

『アイツらは嘘は言つてない。間違つた情報を真実として話しただけだ。前にも言つたろ？ 「あんな下つ端キヤラ」つて。そしてアイツらの上司はインデックスをどうしたいんだつけ？ インデックスの何を恐れてるんだつけ？』

「そりや『反乱』に決まつて……ッ！」

『やつと気づいたか。頼むからもう少し勉強しような？』

そうだ、教会はインデックスに『首輪』をつけたがっていた。

一年おきに教会の術式と技術（メンテナンス）を受けなければ死んでしまうような、首輪を。

一〇万三〇〇〇もの爆弾とも言える魔導書を記憶しているインデックスが絶対に裏切れないようにするための、絶対的な拘束を。

ここまで話せばもう分かつただろう。

教会がインデックスの頭をいじつて、『たつた一年分の記憶で頭が

パンクする』ように細工をしたんだ。

おそらく——いや絶対に魔術的な一品を使つたのだろう。魔術と言われて一般人が真っ先に思い浮かべる有名どころの一角、呪いだ。禁書目録の反乱を防ぐための首輪のろいだ、かなり強力かつ複雑なモノに違いない。とてもあと数分で解除できるとは思えない。

絶望だ。失敗だ。不可能だ。玉碎とさえ言つていいかもしれない。かくして少女は救われる事なく、覚えている事を許されず、このクソッたれなループに囚われてながら生き死んでいく……と。

……しかし、それは、

『幻想を打ち碎く拳がなかつた場合のお話だ。』

相手が体质や病気なんていう普通のモノじやなくて、『魔術』という『異能の力』であるならば、

——上条当麻の右手は、たとえそれが神様の奇跡システムであつても触れただけで打ち消す事ができるのだから。

「……」

——そんなに自分の力を信じているなら消してみろよ、主人公氣取りのミュータントが!!

ついさつき自分自身を散々に打ちのめしたスタイルの言葉に、上条は小さく笑つた。

〔主人公氣取りじやねえ——〕

上条は笑いながら、右手を覆い尽くすように巻いた真っ白な包帯を解いていく。

まるで、右手の封印を解くように。

〔——主人公に、なるんだ〕

言つて、上条はボロボロの右手をインデックスのおでこの辺りに押し付けた。

……。

……、
……？

——つて、あれ？」

起きない。何にも起きない。

インデックスは相変わらず苦しそうに眉を寄せている。呪いが解けたようには見えない。

「……………
としきサン？」

『…………分かつたから捨てられた子犬みたいな目でこっち見んな。異能の力に触れてないだけで、仮説が外れてる訳じやねーよ。…………たぶん』

『…………
ぼそっと弱気発言しながら、神槍は改めてインデックスの全身を見た。

『一年間も記憶なんつー複雑な構造を制御する呪いだ。呪文を唱えてハイおしまいって訳じやないだろうから、呪印か何かがある筈だ……』

「けど、そんなモンどこにも……あー」

神槍と同じように怪しい模様とかがないかインデックスを見ていた上条の視線が、ある一点で止まつた。具体的には首から下にあって腹より上有るヤツ。

『…………』神槍は思わず手を止めて非難の視線ジト目で言う。

『…………当麻？こんな時に発情するとかテメエは万年発情ネコの進化形か何かですか？』

「いやそれは流石に言い過ぎじゃね!?ほつ、ほら上条さんだつて由緒正しき男子高校生の一員な訳で少しだけそういう興味を持つちゃつても見逃して欲しつつ一かしようがな——つてさりげなく詠唱始めてんじやねーよ！」

慌てて止めに入る上条だが、変態にはヤサシーオシオキが必要ですとばかりに神槍はぶつぶつと詠唱を進めていく。

まさかの仲間割れエンドでせうかつ!? と冷や汗ダラダラ上条が仙人ばりの悟りを開く一步前で、地獄へ誘う呪文を唱えていた（上条にはそうとしか聞こえない）神槍が一旦詠唱を中止して訊いてきた。
『He-i 当麻、雷テンペスター・ブルグリンスの暴風テンペスター・オブスクランズか闇アーチの吹雪スノウかどつちがいい?』

「意味分かんねーけど上条さんの直感が逃げろと叫んでいるのは気のせいかな?」

『失礼だな。ちゃんとお前にも選択肢を用意してあげてるだろ？前者は焼死コース後者は凍死コースって感じで』

「俺の予想これ以上ないほどばつちり当たつてんじやん！」

『ダイジョブだつて。運が良ければ血が噴き出すぐらいだつて』

『死!!』

時間がないのも忘れてぴーちくぱーちく騒ぐ一人だつたが、インデックスの事を思い出し呪印探しに結局戻る。

当事者であるインデックスが気づいていないという事は、彼女本人では確認できない場所にある事になる。

（インデックス本人が気づけない場所……つむじ、後頭部、身体の内側……内側？体の中か！）

と、神槍はもう一度インデックスの顔を見る。

苦しそうに動く眉毛、硬く閉じられた瞳、粘着質でベタベタしている汗が伝う鼻——それらを無視して、神槍は浅い呼吸を繰り返す小さな唇に視線を落とす。

体内、と言つても怪しい場所なんて五万とある。それら全部を探すには時間が足りない。しかし頭の中身に関する呪いなら、当然頭部に近い方が効率がいいに決まつている。頭に近く、インデックス自身では確認できず、さらにメンテナンスの時に作業がしやすい場所。

『……口の中か？』

神槍は両手の人差し指を彼女の唇の間に滑り込ませて無理矢理開かせ、顔をぐつと近づけて覗きこむ。

「お、おい……」

二人の顔がほぼ零距離になつて上条は慌てたが、神槍は無視した。変態と喋る趣味はありません。

喉の奥。

直線距離ならつむじより『脳』に近く、滅多に人に見られない場所。そしてそれ以上に人に触れさせない場所。

その赤黒い喉の奥に、数字の『4』にも似た不気味なマークが刻まれていた。

『あつた、「呪印」だ。……お前の出番だぜ、幻想殺し』

ああ、と返事と言うよりは自分に言い聞かせる調子で言つてから、上条は意を決して少女の口の中に右手の人差し指を一気に押しこんだ。

ピリ、と。静電気のような感触を指先に感じ取ると同時、

バギン！、と。上条の右手が勢い良く後ろに吹き飛ばされた。

「がつ……！」

『当麻!?』

元々ボロボロだつた右手の包帯の傷が開いて、ボタボタと音を立てて血の滴が畳や布団の上へ落ちていく。

そして、血で汚れてしまつた布団。

そこでぐつたりと倒れていた筈のインデックスの両目が静かに開き、その眼は赤く光っていた。

しかしそれは眼球の色ではない。

“眼球の中に浮かぶ、血のように真つ赤な魔法陣の輝きだ”。

(まずい……ッ!!)

上条が本能的な背筋の震えに、壊れた右手を叩きつける前に、ゴツ！、という凄まじい衝撃が二人の体を壁まで吹き飛ばした。

『がつ、は……』

壁を突き破らなかつたのが奇跡に思えた。それくらいの激痛が全身に走る中、二人は何とか立ち上がる。力加減を間違えたのか、握っていた鉄パイプから嫌な音が聞こえた。

「——警告、第三章第二節。Index—Library—Program—Program——禁書目録の『首輪』、第一から第三までの貫通を確認。再生準備……失敗。『首輪』の自己再生は不可能、現状、一〇万三〇〇〇冊の『書庫』の保護のため、侵入者の迎撃を優先します」のろのろと。インデックスは、まるで骨も間接もない、袋の中にゼリーが詰まっているかの不気味な動きでゆっくりと立ち上がる。その両目に宿る真紅の魔法陣が二人を射抜く。

そこには人間らしい光ではなく、そこに彼女らしいぬくもりは存在しない。

中身が丸ごと入れ替わっているかのような彼女を見て、二人は本能

的に同じ事を考えていた。

——魔力がないから、私には使えないの。

『……そうだよな。考えてみればおかしな話だよ』

神槍は背丈ほどの長さの鉄パイプを胸の前へ横水平に持つて来て、口の中で小さく言つた。

『“超能力者でもないお前が、一体どうして魔力がないのか”。もつと早くに気づくべきだつた』

教会は二重三重のセキュリティを用意していた。もし仮に、誰かが『完全記憶能力』の秘密に気づき、『首輪』を外そうとした場合。インデックスは自動的に一〇万三〇〇〇冊の魔導書を操り、その『最強』とも言える魔術を使つて、文字通り真実を知つた者の口を封じる。

その自動迎撃システムを組み上げるために、インデックスの魔力は全てそこに注ぎ込まれてしまつたのだ。

その証拠に、魔法使いである神槍が探つてもまつたく感じられなかつた筈の魔力が、今はどうしようもないぐらい伝わつてきていい。ロボットがプログラムに従つて精製しただけのような、氣色悪いほど清潔で透明で——感情という色がまったく混ざつていない魔力が。

「——『書庫』内の一〇万三〇〇〇冊により、防壁に傷をつけた魔術の術式を逆算……失敗。該当する魔術は発見できず。術式の構成を暴き、対侵入者用の特定魔術^{ローカルウェポン}を組み上げます」

インデックスは、吊り人形のように小さく首を曲げて、

「——侵入者個人に対しても有効な魔術の組みこみに成功しました。これより特定魔術『聖ジョージの聖域』を発動、侵入者を破壊します」

バギン!、と凄まじい音を立ててインデックスの顔の前に、直径二メートル強の魔法陣が二つ、重なるように配置された。それはインデックスの両眼と連動しているようで、彼女が軽く首を動かすと空中に浮かぶ魔法陣も同じように後を追つた。

「。 、 」

インデックスが何か——もはや人の頭では理解できない『何か』を

歌う。

瞬間、空中に浮かんでいた二つの魔法陣がいきなり輝いて、爆発した。飛び散ったのは炎ではなく真っ黒な雷。インデックスを囮むよう走り抜けたそれは、空間を直接引き裂いたように見えた。

めき……、と。何かが脈動するように亀裂が少しづつ『開いて』いく。わずかに開いた漆黒の亀裂の隙間から覗いたのは、獸のような匂い。

『ツツ!!』

それを『見た』神槍は即座に動いた。『アレ』は……『ヤバイ』。危険すぎる。理屈うんぬんの前に『アレ』だけは止めるべきだ。

片方の少年が畳の地面を踏みしめ、片方の少年が右手を強く握りしめたその瞬間、

ゴツ!!と亀裂の奥から光の柱が襲いかかってきた。

もう例えるなら直径一メートルほどのレーザー兵器に近い。太陽を溶かしたような純白の光が襲いかかってきた瞬間、上条は迷わずボロボロの右手を顔の前に突き出した。

じゅう、と熱した鉄板に肉を押しつけるような激突音。

……消えない。

異能の力相手なら無敵とも言える効力を持つ右手で触れているのに、『光の柱』は消えてくれない。

ステイルの魔女狩りの王のように、消しても消してもキリがない感じ。畳につけた両足がじりじりと後ろへ下がり、ともすれば重圧に右手が弾き飛ばされそうになる。

「ぐつ……ツ?」

上条は思わず空いた左手で吹き飛ばされそうな右手の手首を掴む。掌の皮膚がビリビリと痛みを発した。『魔術が喰い込んできている

……右手の処理能力が追い付かず、ミリ単位で光の柱が上条の方へと近づいてきているのだ。

(単純な『物量』だけじゃねえ……ツ! 光の一粒一粒の『質』がバラバラじゃねえか!!)

ぐちゅ、と。光の柱を受け止めている右手の掌が裂けて、血飛沫が

舞つた。二本の脚がズズつと後ろへ押される。

このままでは少女を助ける以前に、殺されてしまう。

(……いや、んな事アどうでもいい！今度こそ：俺が、他の誰でもねえこの俺が！インデックスを助けると決めたんだ！！もう絶対に――)
——逃げないと、決めたんだ。

犬歯を剥き出しにして光の柱に喰らいつく上条だが、想いだけでは誰も救えない。抗えない。

そんな上条に、禁書目録はさらに牙を向く。

「威力強化の必要性を確認。特定魔術『聖ジョージの聖域』の術式を組み替え、出力上昇を試みます……成功。第二特定魔術、命名『罪人は笑わない』

轟ツ!!と大気を吸い込むような音を立てて、今まで白い輝きを放っていた光の柱が真っ赤に変色した。しかし色が変わつただけだ。その筈なのに、上条の右手に生じていた痛みが倍増した。
「がつ……ぎ……ッ！」

「……」

インデックスの真っ赤に輝く瞳が、獲物を仕留めた狩り人のように上条を射抜いた。

『自動書記』^{ヨハネのペン}は最優先迎撃目標・上条当麻への勝利を確信した。

このまま聖ジョージの聖域の派生術式『罪人は笑わない』を発動し続ければ侵入者の撃破を達成できる。一〇万三〇〇〇冊の知識がそう判断を下した。あとは第二迎撃目標・神槍トシキを始末し、修復不可能なダメージを負った『首輪』に応急処置を施す。それで終了だ。『自動書記』は日次を確認するよう、自身の役割を整理していく。それ以外の事は何も考えないし、考える為の感情も持ち合わせてはいない。

「?」

と、整理の途中で自動書記は首を傾げた。真っ赤な光の柱越しに対象の位置情報を確認する。上条当麻の位置を……ではない。それは取得済みでコンマ単位の更新も滞りない。今も理解不能なあの右手

を使つて耐えている姿が観える。だから、上条当麻に關してではない。もう一人の方の……、

聖ジョージの聖域発動前は上条当麻の隣にいた、神槍トシキはどこへ行つた？

「——『書庫』内の一〇万三〇〇〇冊の中から、魔力感知式の最適術式を割り出します……成功。該当する魔術数、一万一〇〇二。その内、今この場で即時に発動できる魔術から最も最適な感知術式を選出……成功」

神槍の位置を探るための準備を進めながら、自動書記は半分『既に撃破』という判断を下していた。紅い光の柱は決して無視できない威力を持つていて、光の柱と壁の隙間は『亀裂』が埋めている。こちら側へ来て危害を加えられる事はない。大方、光の柱に巻き込まれて消失したのだろうと。

あくまで九九パーセントを百パーセントにするための確認。自動書記は優先度は低いと判断しながらも準備を完了させた。

ヒュン！という虚空を突き破るような音が響くと同時に、インデックスの頭上に天使の輪のようなモノが現れた。それは常に回転しているようで、窓から入つてくる月明かりを浴びて白いボディがひと際輝いて見える。

インデックスは抑揚のない、不気味なほど冷静な声で、

「——これより魔力感知式魔術『神の目は全を見抜く』を発動、侵入者の位置情報を取得します」

『天使の輪』から次々と情報が送られてくる。しかし自動書記が求めているのは神槍トシキの居場所のみ。それ以外の情報は無視していく。

そして、天使の輪から求めている情報が伝えられて來た。

神槍トシキの位置情報……自身より後方約三〇センチ。

つまりは、^{エーミツタム}『解放』。

「！」

背中からの敵の声に、自動書記というシステムが緊急事態である事

を知らせた。回避もしくは迎撃せよ、という命令文が飛んでくるが、インデックスは振り向けない。『光の柱』は彼女の眼と連動しているため、動かしてしまつたら『最優先』迎撃目標に自由を与えてしまう。

それはいけない。あくまで『第二』目標のためにそこまでのリスクは侵せない。

その隙を突くように神槍は手に持つていた鉄パイプで、彼女の両足を右から左へ払つた。武術で言う『足払い』。突然に体の支えを失つたインデックスは後ろへ倒れ込む。彼女の眼球と連動していた魔法陣が動き、上条を押さえ付けていた『光の柱』が大きく狙いを外す。まるで巨大な剣を振り回すように、アパートの壁から天井までが一気に引き裂かれた。『光の柱』が夜空に漂う雲を貫く。

引き裂かれた壁や天井は、木片すら残さない。代わりに、破壊された部分が光の柱と同じく純白の羽となつた。はらはら、と。どんな効果があるかも分からぬ光の羽が何十枚と、夏の夜に冬の雪のように舞い散る。

『——断罪の剣』 インペルフェク・エンシス

魔法使いの少年が口の中で唱えるとその右手に『剣』が生じた。『剣』と言つても柄はなく、光り輝く刀身が手首から掌を包むようにして直接生えていた。

『あらゆる個体と液体を強制的に気体へ変換する剣』《だんざいのけん》を真上から真下へ、勢いよく振り落とす。狙うのはインデックス自身ではなく、顔の辺りにある真つ赤な魔法陣。アレさえ破壊してしまえば『光の柱』は消せる。

剣の切つ先が魔法陣に届き、その紅いボディを真つ二つにした。魔法陣は再生する事も叶わず、紅い霧となつて消えて行つた。

瞬間、天空を貫いていた『光の柱』が呆気なく消失した。

光の羽が舞い落ちる中、神槍は倒れている少女に手を伸ばす。まだ『自動書記』モードを解除した訳ではないが、一番の難関だつた光の柱は既に消した。あとは適当に気絶させてしまえば終わりだ。

そう思い、少年の手が小さな少女に届く『一瞬前に』、

『がつ……ッ!!』

自動書記が目覚めた時と同じように、突然に凄まじい衝撃が走り神槍の体が吹き飛ばされた。

“ここまでが限界だつた”。

自動書記というシステムの不意を突く事でエラーを引き起こさせ、その隙に動いていた神槍だつたが……間に合わなかつた。

「……」

エラーを克服した自動書記はスツ、と吊り人形のような動きで起き上がる。その眼には相変わらず感情は灯っていなかつた。

——“いや”、この時に限り『驚愕』という感情を表していたのかもしれない。

何故ならば、

上条当麻の右手が、視界を埋め尽くしていたからだ。

光の柱が上空に向かつた瞬間から上条当麻はインデックスへ向けて足を動かしていた。神槍が足を払つた瞬間も、断罪の剣を振り下ろした瞬間も。彼が吹き飛ばされたその時も。

ただ、それだけの話だ。

それだけの事に気づけないまで追い込まれていた事にやつと気づいた自動書記は、

「——警、こく。最終……章。第、零……。『首輪』致命的な、破壊……再生、不可……消」

ブツン、と。インデックスの口から全ての声が消えた。

両眼の真つ赤な輝きも消え、部屋中に走つた亀裂が消しゴムで消すように消えていく。

また後ろに倒れてしまつたインデックスを上条は抱き起こす。少女の穏やかな寝顔を見て彼の表情も緩み、

その時、上条当麻の頭の上に、一枚の光の羽が舞い降りた。

『当麻!!』

金槌で頭を殴られたように、全身の、指先一本に至るまで、たつた一撃で全ての力を失つた。

上条は未だ床の上に倒れているインデックスに覆いかぶさるよう

に倒れこんだ。まるで、降り注ぐ光の羽から彼女の体を庇うように。
この夜。

上条当麻は——死んだ。

とある代償の過去放棄（タイムオーバー）

「ふむ。怪我の回復速度がいさざか早すぎるね。一体どんなトリックを使つたんだい？」

大学病院の診察室で、小太りで顔立ちがカエルに似ている医者はそう言つた。

診察室は壁・床・机全てが真っ白だつた。清潔感をアピールしたいのは分かるが、ここまで白尽くしだと距離感までおかしくなりそうだ。

そんな純白部屋に拒絶されるような赤髪の少年、しんやり神槍トシキは真正面に座つているカエル顔の医者のそっぽを向きながら、

『魔力で細胞組織に働きかけて回復を促す……つて言つても分かんないだろ？ 聞くだけ無駄だつて』

例の事件でそれなりにダメージを負つた神槍だが、驚異的な回復力でほぼ全快していた。何も魔力の使用用途は攻撃だけではない。そもそも魔力は生命力を具現化したモノであつて、傷の回復などに使うのが本来の使い方である。『何もないところから炎を出す』などはその意味を湾曲させ、意図的に歪ませてゐるに過ぎない。

しかしこんな事を科学まみれの医者に一から一〇まで説明しても理解して貰えないだろう。知識うんぬんの前に分野が違ひすぎる。

と、さつさとこんな純白部屋から出て行きたい神槍は本題に入る。

『で、『アイツ』はどうなつた？』

「……うーん」

問いかに、カエル顔の医者は黙り込む。言うかどうか迷つてゐる様子だつた。

「あの患者のケースは僕も初めてでねえ。しかもかなり纖細なモノだからあまり他言したくな——」

『いいから話せ』神槍は遮るように言つた。そして医者の目を見据えて、

『“アイツ”は……どうなつた？』

神槍トシキは病院の廊下を歩いていた。

カツカツと小気味いい足音を立ててこれまた真っ白な通路の曲がり角を右に曲がる。そうしながら、先ほどカエル顔の医者から聞き出した（あくまで合法的に）事について考える。

——変に取り繕うのもおかしいから、率直に言うよ？ 彼は脳に重大なダメージを負った。

一定の間隔を開けて配置されている窓から四角く区切られた日差しが入つてくる。それは白い床を反射して通路全体を照らしていく。——でも頭蓋骨が碎けていたり中身がグチャグチャになつた訳じやないんだね？ 不思議な事にある一か所を除けば何の異常も見られなかつた。だから命に関しては安心していいね？ 日常生活を送る分には大丈夫だろう。

通路を抜けて木々が植えてある中庭に出る。今はなんとなく自然がある場所にいたかつた。

——でも、そのある一か所というのが問題なんだね。そこはいわゆる『記憶』を司る場所でね、脳細胞が徹底的に破壊されていたよ。アレじやあ記憶喪失とも呼べないね。そうだね、あえて言うなら……『記憶破壊』かな？

患者の心のケアのためだらうか、ちょうど木陰になる場所に木製のベンチが置かれていた。神槍はゆっくりとそこへ腰を下ろす。

——記憶喪失と違つて、アレじやあ思い出す事は絶対にないね。僕でも治せなかつた。アレはもう記憶が『死んで』しまつていてるね。僕でも一度死んだモノを生き返させる事はできない。認めたくなけど……お手上げさ。

背もたれに完全に体重を預けて、ふうーと息を吐く。上を見上げると葉と葉の隙間から木漏れ日が差し込んでいた。

——もう分かつてると思うけど、一応言つておくよ？ 今彼は真っ白……いや、白とも呼べないほど空っぽの状態なんだね。からうじて一般常識は残されているようだけど、それだけだよ。自分の名前も分からぬ。……今の彼は、透明だ。

眩しさに思わず目を細める。それだけでは足りずに右手を顔の前

に持つてきて日光を防ぐ。

——これから彼に会いに行くんだろう？君が彼とどういう関係かは知らないけど、本人の前でショックを受ける事は許さないよ？今のが彼に会うのなら、今すぐここでいつも通りに接すると誓え。そうじやなければ身を引け。これが僕の仕事だからね。さあ、話す事は全部話した。あの少女は前に進む事を選んだ……君はどうする？

(どうする、だと？あの両生類め、そんなの決まつてんだろ)

一度両足を空中に上げて、戻す勢いで立ち上がる。それから通路に戻るために歩き出す。

そもそも彼とはよく分からぬ関係だつた。偶然出会つて、なし崩し的に行動を共にして、最後には共闘のような事もした。

異世界に落とされて出会つた、二人目の知人。

相手がどう思つていたかは別として——その答えはもう聞けないけど——『友達』だつたんだと思う。そうなりたかつたんだと思う。

『……行くか』

自然に包まれた中庭から、病院内の白尽くしの硬い通路へと移動してさらに歩を進めていく。

向かう先には、透明な少年がいる。

と思つていたけれど、先に暴食暴飲少女ことインデックスに遭遇してしまつた。

「まつたく！・どうまと来たら凄くとうまなんだからっ！」

十四か十五歳ほどの銀髪に緑色の瞳の目の前の少女はただでさえ『外国の匂い』を振りまく容姿をしているのに、修道服という何だかよく分からぬアイテムのせいについて『外国文化の擬人化』レベルまで到達してしまつていた。

既に上条当麻と会つてきたりしい少女は腰ほどまである銀髪を振り乱しながら腰に手を当てて、いかにも怒つています空気を演出しながら、

「どうまつたら酷いんだよ!?こつちは涙が出るくらい心配したつて言うのに、『引っかかるたあーあつはつはのはーつ!』つて笑い飛ばされ

るし!!全然元気そうだつたしつつ!ねえこれ酷いと思わない思うよね
!?

そんな事言われても神槍には『……あー、うん。それは良かつたね
インデックスサマ…』とぎこちなく返すしかない。

言っている事は全然分からぬが、とにかく今は彼女の衣服に数本
くつ付いているツンツン毛質の髪の毛の存在がデカ過ぎた。アレは
間違いなくK A · M I · T U · K I ☆をやつた証拠だ。

アナタは病人にナニやつてるの?という疑問が浮かんでくるが保
身のためにここは黙つておこ、と心に誓うビビリ魔法使いだつた。
『そ、それでさインデックス。俺も当麻に会つてくるから売店かどつ
かで待つてくれるか?』

「?? それなら私も一緒に会いに行けばいいかも」

『いやいやいやいや!いいよ俺一人で会つてくるからつ!ほつほら男
同士で積もる話もあつたりなかつたするからさ!!』

(こ、これ以上噛みつかせたらアイツマジで死にかねねえぞ——ツ!)
じやあそういう事で!、と言い残し逃げるようになその場を後にする
神槍。

どんどん遠ざかっていく彼の後ろ姿に、インデックスはキヨトンと
首を傾げるばかりだつた。

(な、なんとか誤魔化せたか。病院の立ち話で人命救助とか……俺ナ
ニやつてんだろう)

げんなりとした様子で重い足を動かし、あの少年の病室へと向か
う。

と、休憩室を横切つた時に気付いた。

なんか物凄く日本文化に喧嘩を売つてているような神父が座つてい
る事に。

というか、スタイル=マグヌスだつた。

「やあやあ奇遇だねえコノヤロー。死んでやがつてなくて何よりだよ
マホーツカイ」

『……たつた一回の挨拶でそこまで憎まれ口叩けるつて、もはや才能

だろ』

呆れ顔で咳きながら、放つておく訳にもいかず休憩室に入る。

手近なイスに腰を下ろしつつ、神槍は意外そうな顔で、

『まだ帰つてなかつたのか。帰つてないにしてもこうやつて直に会つたりするのは神裂の方だと思つてた』

「僕も最初はそのつもりだつたさ」ステイルは火をつけてもない煙草をゆらゆら揺らし、

「あれでも神裂は忙しいんだ、世界に二十人といない聖人の一人だからね。あの子の監視役だつて相当無理を言つて請け負つてたんだ。教会が判断を下した今、もうこんな島国にいる暇なんてないよ』

『でもお前は暇でこうやつて病院の休憩室の片隅でスネていると』
「スネてない！きちんととした用事があつてここにいるんだ勘違いしないでくれ！」

珍しく慌てた様子で言い返すステイルに、神槍はしれつとした調子で言う。

『用事？何、インデックスに会いに来たのか？それならたぶん売店にいるぜ』

「いや、会いに来たのはあの子にじゃない。今僕と話している人間、つまり君にさ」

は？俺に？と返した神槍は何かを察したような顔をして、ややスタイルと距離をとりつつ、

『……うわ、お前そつちの人だつたのか。ごめん俺そういう趣味ないからさ…』

「体ナニと勘違いしているんだ君は！ああもう本当にムカツクな君つて奴は!!」

ステイルは煙草を吸えない原因である病院の内装を睨み付けながら、

「君に聞きたいたがあるんだよ。言つとくけど、これの返答次第では君とあの子を引き離す事になるからな？」

『……』

なんか急にシリアスになつたなど、とりあえず座り直す神槍。

魔術師ステイル＝マグヌスは言つた。

「お前は何者だ」

彼らしい会話の順序をすつ飛ばした聞き方だつた。それ故に、その言葉は神槍の核とも言える部分に突き刺さつた。

気のせいか、休憩室内の温度が二、三度下がつたように感じる。

彼は憎らしい笑みを伴つて続けた。

「教会はあの子を学園都市に留まらせる方針を決定した。まあ確かに、常に魔術師に狙われているあの子を隠すには学園都市は絶交の場所だ。あの子の安全を考えればここにいた方がいいのかも知れない。そこは認めてやるよ」

でもね、とステイルは一度言葉を区切つて、

「何故あの子の隣に、正体不明身元不明の危険人物であるお前を置いていかなくちゃいけない？ 幸いあの子の保護者役になりうる人間は二人いるんだ。一人ぐらい欠けても問題ないだろう？」

『……』

「黙るなよ魔法使い。どこの教会の所属だ、それとも流れの魔術師なのか。どこで生まれどこで育ちどこで魔術を学んだ。神槍トシキなんてふざけた名前ではなく本当の名前を言え。これだけの情報提供をしてやつとあの子の隣にいる事を許してやる」

ステイルの掌で炎が吹いた。蠟燭などのチンケな炎とは違う。人を殺すのに特化した、それを目的として振るわれる炎だ。

答えれば良し、そうでなければ殺す。

きつとステイルは、その理念を一秒と迷わずに実行するだろう。

『……俺は』

魔法使いの少年は考える。

これを断るとなればあの少女との平穏な生活を棒に振る事になる。守るどころか、逆に争い事に巻き込んでしまうかもしけない。

正直に答えた方がいいに決まつていてる。

『でも』。

“アノ事”だけは、絶対に知られてはならない。“アレ”はもう見たくない。

神槍トシキ個人の問題ではなく、『訊き出す方に関わる問題』だ。
神槍トシキが。神槍トシキという一個人が。この世界の人間ではない……、つまり。

『転生者』だと言う事実だけは絶対に知られてはならない。

神槍トシキは答える。この世界で神槍トシキと名乗る事にした少年は、答える。

『……えない』

「……なに?」

『教えてやらない。何も喋つてやらない。俺は俺だ、魔法使いだ。これ以上は何も教えない』

考える余地はなかつた。

スタイルは一瞬で立ち上がり、何時どうやって出したのかも分からぬ炎剣を真横に振るう。

ちょうど、自分と同じ赤色の髪を持つ少年の首を跳ねる形で。

「……オーケー。さっさと死ねよ薄情者が——ツ!!」

『“けど”』

ガキイイン!!という音があつた。振り抜いた筈の腕に衝撃が走つた。

見れば、少年の首より数センチ手前で炎剣が停止していた。少年の体に動きはない。本当に座つたままだ。

魔法障壁。

彼を守る最後の砦にして全幅の信頼を寄せる防壁。それがスタイルの攻撃を完全に防いでいた。

「くつ…!!」

(な、に!?爆破もできないだと!?)

スタイルの炎剣は本来、『切断』ではなく『爆発』によつて人を殺す武器だ。受け止められても、紙一重で避けられても関係ない。当たつたかどうかも関係ない。爆発の射程距離まで潜り込めればそれで勝ち。そういう武器だ。

しかしどういう訳か、爆発せよという命令文を送つても炎剣は爆発

してくれなかつた。目の前の少年に何かされたとしか思えない。

（コイツっ、一体どれだけの力を隠し持つて——ツ!!）

驚愕に目を見開くスタイルを他所に、指一本動かさずに炎剣の無力化を実現してみせた少年は言葉を選ぶようにゆっくりと口を動かす。『けど。あの子には——インデックスには絶対に危害を加えない。加えさせない。これだけは約束する、俺の命に代えても』

座つたまま、見上げるようになにスタイルに視線を向ける神槍は言い切つた。

何の躊躇もなく。

何の戸惑いもなく。

「ふざつ——」

スタイルにとつてその姿は眩しきる。

その姿は、スタイルが死ぬほど望んで手を伸ばしても、届かなかつた姿だつたから。

そしてもう二度と、なれない姿だつたから。

だから——だからこそ、彼は完全に無力化されてしまつた炎剣を握る手にさらに力を込める。

「——けるなよ!!ならば何故正体を隠す!?本当にあの子の事を想つているなら話せる筈だろう!!」

炎剣を持っている右手に左手を重ね、全身全霊の力を持つて振り抜き、目の前の男の首を切断しようとする。

「あれだけあの子が望んでいたモノを与えておいてツ、僕達が果たせなかつた事を簡単に成し遂げておいてツ！ „僕達のチャンスを勝手に奪つておいて“ !!」

轟ツ!!と炎剣に力が戻る。術者から受け取つた魔力を熱エネルギーに変換し、熱量を増大させていく。見た目にも変化があつた。赤から白に近い青へと、炎の色も変わつていく。

炎は温度が大きく変化すると色を変える。確實にレベルアップした己の武器を手に炎の魔術師は吠える。

「お前がいなくなつたらあの子が泣いてしまうだろ!!それだけの力を持つていながら、あの子の顔を曇らせるような事をほざくなよ!!」

スタイルは悔しい。

インデックスを助けられなかつた事も、そのポジションを他人に奪われた事も。

自分がどれだけ手を伸ばしても届かなかつたポジションにいる人間が、インデックスを傷付けるような事を言つてゐるのが。

『――』

そんな事は神槍はとつくに知つていた。思い返せば誰でも分かる。彼らの行動は一見インデックスを苦しめるだけに見えていたが、実際は誰よりも彼女の事を想つて、優しく抱き締めたい心を殺して。自分を殺す覚悟で取つていた行動だつた。

そんな事は分かつてゐる。その上で、彼は言う。

『それでも俺は何も話さない。もしそれが原因でインデックスが傷つくなら、俺は身を引く。それでいいか？』

しばしの沈黙があつた。

それからゆつくりと……『炎剣が下ろされた』。

「……そうかい。その言葉、死んでも忘れてくれるなよクソヤロー」

そう言い残し、魔術師は立ち去つた。

カツカツという彼の足音が完全に聞こえなくなるまでその場に残つていた神槍は椅子から立ち上がる。

ああ、結局俺はこうなるのか——最後にポツリと呟いて、休憩室から出て行つた。

無人となつた休憩室には、空気が焼けたような虚しい匂いだけが残つた。

ガラララーッ！と豪快な音を立てて病室のドアを開けて中に入る。やつと上条当麻の病室にたどり着いた。道中に色々あつた、白い悪魔に遭遇するわ赤い彗星に脅されるわ病院内で走るなどナイスバディ看護婦さんにキレられるはその後何故かメルアド聞かれるわで……本当に色々あつた。

そんなこんなで疲労困憊な神槍は膝に手をついて乱れた息をどうにか整えようとする。

一方その頃、突然病室に入つてこられた上条当麻は混乱していた。インデックスほどではないが、神槍も十分『外国の匂い』を纏う見えた目をしている。赤髪にやけにボロボロなローブ。そんな人物が唐突に現れたらフツーの高校生である上条も当然ながら萎縮してしまう。しかし根がお人好しの彼は自然と口を開いていた。

それに。

彼も知り合い“らしい”から黙つている訳にもいかないだろう。

「……だ、大丈夫か？」

『だい、じょうぶだ。悪は去つた』神槍はよく分からぬ事を言つて、『へえー。思つたより元気そうだな。……特に頭とか』

「え？なんか言つたか？」

い一や何にも、と答えた彼の顔には笑みがあつた。何かを嬉しがつていて、何かに落胆したような——そんな笑みだつた。

『ところでだ当麻。お前……記憶がないんだつて？』

「つ……」

核心的な質問だった。それこそ、あの少女との会話で手に入れた、薄っぺらい上条当麻という存在そのものを揺らがすような。

だが止まる訳にはいかない。見破られる訳にはいかない。

「インデックスにも言つたけどさ、それは間違いだよ。そりや、あんな不気味な羽をモロに喰らつちまつたらそうなるんだろうけど」

上条は己の右手をもう片方の手で指さして、

「俺にはコイツがある。ダメージが届く前にコイツを自分の頭にぶち込めば万事解決だ。つたく、あの医者大袈裟なんだよ入院なんて」

『そつか。それは良かつた』神槍はやけに落ち着いた様子で、

『じゃあ、お前、インデックスとどこでどうやって出会つたか言つてみろよ』

言つてて、自分でも突き刺すような言葉だと神槍は思つた。

「ツ！そ、それは……」

しかし神槍は続ける。

分かつてしまつたから。彼は嘘をついているだけだと。
優しい優しい嘘を。

『“覚えてない”んだろ？全部忘れちまつたんだろ？俺やインデックスの事だけじゃなくて、今までの人生全部を』

「ち、違う！さつきも言つたろ？羽のダメージは俺の右手で打ち消し

——

『いーや違わないな。お前の右手はそんなに便利なモノじやねえ。羽そのものを消す事はできても、そこから派生したダメージを打ち消す事なんて、絶対にできない』

神槍の言葉の一つ一つが、上条当麻になりきる事を誓つた少年をズタズタに切り裂いていく。

『いい加減に仮面の被り合いはやめようぜ』

言いながら、神槍は透明な少年に近づいていく。

「は、はあ？さつきからおかしいぞお前。ナニ言つてんだ、冗談もほどほどにし

『いい加減にしろつつってんだよ!!』

な……、と上条の吐息が停止した。

黒どころか白にもなれない透明な少年の胸倉を掴み、神槍は怒号をまき散らす。

『お前はもう上条当麻じやねえだろ？病人なら病人らしく弱音の一つも吐いたらどうだ!!一人で何もかも抱え込みやがって!!』

「……あ。な……」

されるがまま上条は何かを言おうと口をパクパク動かすが、言葉が出てこない。もうどうすればいいか、完全に見失っている様子だった。

神槍は腹立たしい。

彼がそんな顔をする事が。

記憶を失つてもなお、他人を泣かせまいとする彼の在り方が。

あの時あの瞬間、彼を助けられなかつた自分自身が。

『何で怒らねえんだよ、俺は！俺はあの時ツ！見ている事しかできなかつたのに！なんで!?』

なんで、

なんで、

なんで!!

『なんで “俺にも背負わしてくれないんだ” !!あの子を泣かせたくないのは俺も一緒なんだよ!!』

「……?」

スツ、と。静かに胸倉を掴んでいた手が離された。ボフンとただひたすら困惑している少年の体がベッドに沈む。

そして。

手が、伸ばされた。

まるで握手を求めるかのような動きで伸ばされたその手の持ち主は言つた。

『——ちつとは俺にも背負わせやがれ、親友』

「……

混乱している上条は、差し伸べられた手と持ち主の顔を交互に見やる。彼は今空っぽな状態だ。とても人を心の底から信じられる状態ではない。あの少女に嘘をつけたのも、本当になんとなくの直感に従つただけだ。

ただ。

その手は優しかつた。

その手は力強かつた。

だから上条は、その手を掴む事ができた。

「……トシキ、だつたよな?」

『ああ。神槍トシキ、ファミリネームは東洋系だけどハーフじゃない。純血の英国人だ』

そして、と彼は続けて、

『“魔法使い”だ。これからもよろしくな、当麻』

閑話休題（一）

とある平日の右往左往（アイキヤツチ）

『当麻……』

何の変哲もない学生寮、その一室。まだ太陽も半分ほど隠れている時間帯のせいか薄暗いその部屋に、神妙な声が響いた。声の主の名は神槍トシキ、とある事情によりこの部屋に少女と二人で居候している赤い髪の少年だ。その顔つきはまるで魔王討伐に向かう勇者のように、険しい。

「……どうした……」

先ほどとは違う声。

ベッドに腰掛けている神槍を見上げるようすに床にあぐらを欠いているツンツン頭のもう一人の少年、上条当麻だ。一応この部屋の家主だが、自由奔放な居候によつてその僅かばかりの尊厳は崩壊を歸していた。

だがしかし、今この時だけは神槍の後ろで安らかな顔で眠りについているシスター少女の事を、彼は心の底から羨ましく思つた。

『……何か方法はないのか？』

「スマン。あれこれ試してはみたんだけど……限界だ」

『そうか。じゃあ、絶望——だな』

くそッ!!、という意図せずして出た呟きがやけに大きく感じる。声こそ出さないものの、神槍も相当沈痛な表情を浮かべているのが分かつた。

無意識に溜息をつく自分に嫌になりつつ、上条は目の前に鎮座している紙の束におそるおそる目を通す。そこにはおびただしい量の数字が並んでいた。そしてその数字たちの最後には必ず『円』マークがくつついていた。そしてその数字たちの最後には必ず『円』マークがくつついていた。極め付けに一番上の紙にはお世辞でも綺麗とは言えない字で『上条家・家計簿』と表記されている。

まあ、つもり、そういう事だった。

「まさか退院してたつた数日で金欠。パラダイスとは……不幸だ……」

『ぶつちやけ入院費が効いた結果だろうけどな』

言うなよ、それ……、と天を仰ぐ上条だが、それで目前の問題が解決する訳がない。奇跡も魔法もねえじやん、と愚痴つてみるが部屋を支配するドヨーンとした空気は健在だ。

（いやね、でもね、上条さんも頑張ったんですよ？ 考えた事もなかつた家計簿戦略をやつてみたりね？ でもダメだつたんだなあコレが）

そもそもオトコ一人分しか送られてこない仕送りで三人養えつてのが無理な話だろ、と上条は正直な気持ちを吐露する。特に食費、想

像以上にインデックスさんはカロリー消費大魔王らしかつた。

• • • • •

「……はんば……ぐ……z z——」

そこには幸せそうに眠る銀髪緑眼の女の子がいて、規則正しい寝息にときおり願望を交えつつ微笑ましい光景を演出していた。あんだけ食ったのにまだ食い足りないんかい、という一人の少年の気持ちなどお構いなしである。

「知つてゐるか当麻……」

「何をだよ……」

『腎臓つて一つあるらしいぜ?』

「売らないからねッ!? ナニ恐ろしいこと考えてんだ!!」

バシンッ！反射的に右手で神槍の頭を叩く。なんか

ら幻想殺しがあるからって俺の魔法障壁をこうも軽々と…ッ』とか痛
む頭を抱えて咳いてるがそんなものは知らん。

様アは!?」

『自宅警備なら喜んで』

という上条当麻魂の叫びは今日も虚空に散っていく。今日も今日
とて幸運ではない上条さんだつた。

しかし、実のところ、神槍も少しは考えたのだ。一応居候の身だし

少しくらい家賃払つてもいいかなあと。
だがそこで問題が発生した。

まず第一に神槍は正真正銘、嘘冗談なしに無一文な事。第二に学園都市の身分証明書であるＩＤを持つていない事だ。これでは履歴書も書けやしない。ていうか下手したら不法侵入で捕まる。新生活スタート早々に監獄コースは勘弁願いたい。

それに、せつかくインデックスとの生活を勝ち取ったのだ。それをみすみす手放すのは流石に癪だ。

そんな事を思いながら少女の寝顔を眺めていると、なんとなく幸せな気分になるのは気のせいかな、と神槍は優しい手つきでインデックスの頭を撫でる。すると彼女は『んんっ、おむ…らいすう…』とまた寝言（もしくは願望）を漏らした。お前はブレないのな、とここまでくると逆に感心してしまう魔法使いだつた。

「……」

そしてそんな少年少女の青春物語を冷めた目で見つめる高校生が一人。今の彼にとつて金欠問題以外は比較的『後回してオーケーなこと』に分類されてしまうらしい。我ながら男子高校生やめてるな、と上条も思うが仕方がない。生きるか死ぬかの問題なのだ。

そう、仕方が——ないのだ。世界は残酷ナンダカラ。

「食費、減らすか……」

『ばつ、当麻!? それは最終手だ——ツ!?』

「ツツツ!!」

と、唐突に眠っていた筈のインデックスの瞳が大きく開かれる。キュピーンと両眼が光つたのは果たして氣のせいか。

『食費』『減らす』というワードに反応したインデックスは、その小さな体ではとても想像できない俊敏な動きで上半身を起こし、『おつ、おお落ち着けインデックス! は、話せば分かる、だから歯をカチカチ鳴らすのはやめてエ!』『たつ頼むお願ひだインデックスっ、どうか当麻だけで勘弁してくれ!』『テメエ即行で親友売つてんじやねえ! 上条さんの事も少しは考えて!!——はつ!』などと、何故か冷や汗を流して怯えている少年二人を眼で捉える。

刹那、

朝つぱらから学生寮に少年二人の割と必死な叫び声が響き渡つた。

『あーくそつ、暑エ……』

時刻はちょうどお昼頃、季節が夏という事もあって太陽さんは必要以上に頑張つているようだ。せめて陽射しだけでも、と公園の木陰に逃げ込んでみたがあまり成果はなかつた。木陰のベンチから恨めしげに太陽を睨みつける。

そもそも神槍が何故こんなところで油を売つてゐる（比喩だよ、念のため）かというと、上条は例のごとく学校の補習へ、インデックスも最近すっかり日課となつたテレビ視聴に夢中。暇を持て余した神槍は散歩に出かけてみた訳だが……この暑さは計算外だつた。

『……多少の我慢はして貰うとしても、パンの耳生活は流石に可哀想だよなあ』

ボロボロローブの胸元をパタパタしながら、今朝の金欠作戦会議を思い返す。やはりいつまでも上条のスネをかじつてゐる（比喩だよ、念のため）訳にはいかない。かと言つてこの街のIDを持たない自分はアルバイトも出来やしない。詰んでるいや詰まれてゐる。

どつかに一億円ぐらい落ちてないかしら、と思考が危ない方向へ飛びかけたその時、こんな『声』が聞こえてきた。

「ちえいさーつ！」

……何だろうか、この意味不明としか表現できない叫び声は。声の高さが女子のソレという事実が余計に薄気味悪さを演出してゐる。

何だろう、という感じで声の出どころへ視線を向けてみる。

そこには特に言うほどの特徴もない自販機と、一人の女の子がいた。

中学生ぐらいの女の子だ。肩ほどまである茶色い髪に灰色のプリーツスカート、半袖のブラウスにサマーセーターに身を包んでいる。おそらく学校の制服なのだろうが、遠目に見てもかなり良い材質である事が分かる。ブランド物の制服と夏休みなのに制服を着用している事から、お嬢様学校の生徒であると神槍は推測した。

茶髪の少女は自販機の前で腕組みをしてブツブツと何かを呟いているようだつた。

「あれー？ おかしいわねえ、進入角度ミスつたかしら。——よし、もういつちよ！」

ちえいさーっ！ というふざけた叫び声と共に、あろう事か少女はスカートのまま自販機の側面に上段蹴りを叩きこむ（スカートの下は体操服の短パンだつた……ちつ）。

ズドン!! という轟音。次いで、自販機の中でガタゴトと何かが落下する音が響いて、取り出し口に缶ジュースが出現した。少女はそれを何やら手慣れた手つきで取り出し、グビツとこちらにまで聞こえてきそうなほど豪快に飲み始めた。……間違いない、常習犯だ。

どんな軽犯罪でも犯罪は犯罪なのだ。

一般常識に従い公安の皆様を呼ぼうとするが、携帯電話を持つていい事に気づき諦める。これで自分も傍観者として犯罪者の仲間入りか、と半眼で少女が美味しそうにヤシの実サイダーなるものを飲んでいるのをなんとなく注視してしまう。

「？」

と、少女が視線に気づいたのかこちらを見やつた。やべつ、と神槍は身を強張らせるが、少女はこちらから目を外してもう一度「ちえいさーっ！」と自販機を虐待して（やつぱり短パンだつた：ちつ）缶ジュース（無料）を手に入れてから、神槍が座っているベンチにズ力ズ力近づいてきた。

うわあなんか来た、と嫌そうな表情を隠そともしない神槍に、少女は二回目の自販機虐待で手に入れた新品の缶ジュースを突き出しつつ、

「飲みなさい」

『は？ いやこれお前のじや——』

「飲みなさい」

『だからいらな』

「飲・め♪」

……はい、と神槍は嫌々渋々缶ジュースを受け取り一口だけ飲む。

仕方ないんだ、三回目の♪の時に少女の前髪で瞬いた電流の凶悪さに比べればこんな軽犯罪ごとき、と彼はさつきと真逆の意見を吐いた。一瞬だつたので断言はできないがあの電流、軽く五億ボルトはあつたと思う。脅迫材料には事足りる。

ゴクツ、と神槍が缶ジユースの中身を呑み込んだのを見て、脅迫少女はニヤツと口元を歪めた。そして得意げな声色で、「これでアンタも共犯者よん♪」

『堂々と口封じ宣言しやがつたぞコイツ』

「うつさいわね。結局アンタも飲んじゃつたんだから今更ナニ言つても無駄よ』

そう言つて、少女はドカツつと神槍の隣に腰を下ろした。神槍も特に何も言わず、グビツと缶ジユースの中身を飲み干す。一度も二度もおんなじだい、という犯罪者ルール発動である。

『でさー短パン少女』

「ゴハツ!?」

一体ドウシタト言ウノダロウカ。少女が突然飲んでいた物を吹き出し、ごほつごほつと咳き込み始めた。器官に入つたのか涙目になつてゐる。

まだ涙目で咳が止まつていないので構わず、少女は赤みがかつている頬のまま聞いてきた。

「あ、アンタねえ……まさ、か見た……の……?」

『お色気ゼロの男の子級短パンならな』

「やつぱ見たんじやない！こつ、の変態ヤローがあああ!!」

『ふふふ。脅迫少女がナニ言つて——ぬああつ!!』

ビリビリイ!!紫電一閃、少女の額から放たれた電撃が一直線に神槍へと襲い掛かる。危機一髪、顔目掛けて飛んできた雷撃は魔法障壁に阻まれ虚空へと拡散して行つた。今度は魔法障壁で直に触れたので断言できる、今の当たつてたら氣絶じや済まない。

『て——めえ……パンツならまだしも、短パン見られたらくらいで人殺す氣か!?』

「んなあ!? ふ、防がれた?——うつさいわね乙女の下着を軽視する奴

なんて死ねばいいのよつ！』

『下着じやないし、短パンだし！短パンなんてお色気ゼログッズ穿く
くらいならスパツツ穿けこの脅迫少女！』

「黒子みたいな事言うな！それと私には御坂美琴みさかみことつていうちやんとした名前があんのよ！」

『はいじゃあその御坂さんに質問！短パンとパンツ見られるのどつち
が恥ずかしい!?』

『そ、そりやあパンツの方が恥ずかしいに決まってるじやないつ』

『認めたね！短パンに色気がないつて今認めたね！』

『うつさい!!』

ビリビリイ!!先ほどより数倍強力な電撃の矢が放たれるが、やはり
神槍より数センチ手前で何かにぶつかったように動きを止められ、虚
しく大気へ散つていく。level5である己の能力を軽々と（美琴
にはそう見えた）あしらう赤髪の少年に『あのバカ』が重なり、美琴
は思わず叫んでいた。

「一体何なのよアンタ！何その無駄な防御力！ああもう、学園都市に
はムカツク奴ほど強いつて法則でもある訳え！』

『ナニ意味分かんねえ事言つてんだ、それより今のはマジでヤバかつ
たぞ。もう少しで障壁貫通されると思つたわ！』

こちら辺が引き際と見定めた神槍は瞬時に立ち上がり、割と本気な
走りで逃亡を図る。『逃がすかあ！』という野獣じみた叫び声と共に
雷撃の矢が複数飛んでくるが、回避か障壁で防御してやり過ごす。よ
しこのまま逃げちゃおう、とさらに足に力を入れようとして、

『あ、そうだそうだ忘れてた』

『?』

突然足を止めた神槍に、逆に警戒して能力の手を止めてしまう美
琴。彼はずつと持っていたジユースの空き缶を手首のスナップを使
い、ポーラーと軽めに投げた。ちなみに彼はもう公園の出口付近にい
るため、近くにゴミ箱はない。この公園には唯一自販機近くにゴミ箱
があるが、あんな弱い投げ方では到底届かないだろう。

あんにやろー今度はポイ捨てかつ！と数分前とは打つて変わり正

義に目覚めた美琴は、お得意の電撃を放とうとして——見た。

すぐに落ちる筈の空き缶は摩訶不思議な事に地面に落ちる事なく、自販機近くのゴミ箱に吸い込まれるようにして空中を移動していく。そう、まるで浮遊しているようだ。

「えー……」

超能力に日々触れている美琴だが、あまりの馬鹿々々しさにポカンと硬直してしまう。わざわざゴミを捨てるために能力を使うのもおかしな話だし、何故にこのタイミングで？

固まる美琴の前で空き缶は見事にゴミ箱へ到達、真上に来た途端落下し、ガタゴトと音を立てて他のゴミに揉まれて見えなくなつた。

「まあそうなるわよね……はっ！」

空き缶に気を取られていた美琴は慌てて名前も知らない少年へと視線を戻すが……いない。どこにもいない。状況的に美琴が空き缶に気を取られている内に逃げたと考えるべきだ。

「あ、あの野郎……っ！」

怒りに打ち震える美琴だつたが、ふと空き缶を投げるその時まで少年が立っていた場所に一枚の紙切れが落ちている事に気がついた。文字が書いてあるみたいなので、拾つて中身を読んでみる。

そこには、

やっぱ短パンはないとと思う（笑）

「ほつとけっ!!」

バシンッ！と紙切れを思い切り地面に叩き捨てる。それだけでは足りず、高級そうな革靴で踏みつぶしながら、美琴は心に決めた。

「ふふ、こうなつたら戦争よ戦争。まさかこの世に『あのバカ』を超えるバカがいるとはね、うふふ。今度会つたらカエルみたいにヒクヒクさせてあげるわ、ふふふ……」

かくして、第一次魔法使い対超電磁砲戦争は幕を閉じたのだつた……。

ちなみにこの数時間後、補習から帰ってきた上条当麻にこの事を話したらこんな言葉を頂いて激しく後悔したのは余談である。

「あー、それってビリビリ中学生の事だろ？学園都市に七人しかいな

い level5 の一人の

『……OH』

学園都市には窓のないビルがある。

ドアも窓も廊下も階段もない、建物として機能しないビル。level 14 の一つである空間移動テレポートを使わない限りは出入りもできない密室の中心に、巨大なガラスの円筒器は鎮座していた。

直径四メートル、全長一〇メートルを超す強化ガラスの円筒の中は赤い液体で満たされている。広大な部屋の四方の壁は全て機械類で埋め尽くされ、そこから伸びる数千万ものコードやチューブが床を這い、中央の円筒に接続されていた。

窓のないその部屋はいつも暗闇に満たされている。ただし、円筒を遠巻きに取り囲む機械類のランプやモニタの光が、まるで夜空の星々のように瞬いていた。

赤い液体に満たされた円筒の中には、緑色の手術衣を着た人間が逆さで浮かんでいた。

学園都市統括理事長、『人間』アレイスター。

男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見えるその『人間』は自分の生命活動を全て機械に預ける事で、計算上ではおよそ一七〇〇もの寿命を手に入れていた。体だけでなく、思考の大半も機械によつて補助されている。

(……さて、そろそろか)

アレイスターがそう思つた瞬間、タイミングを合わせたように円筒の正面に、唐突に二つの人影が現れた。一人は小柄な空間移動能力者の少女、そしてもう一人は彼女にエスコートされるように手を繋いだ大男だ。

空間移動能力者は一言も言葉を発さないまま会釈すると、再び虚空へと消える。

闇の中には大男だけが取り残された。

その長身な男は短い金髪をツンツンに尖らせ、青いサングラスで目線を隠した少年だった。アロハシャツにハーフパンツという、こんな

場所にはそぐわない恰好をしている。

土御門^{つちみかどもとはる}元春^{（ゆんしん）}。イギリス政教の情報をリーグする学園都市の手駒……に見せかけ、実はその都度科学サイドと魔術サイドを行つたり来たりして機密情報を盗み出す多角スパイだ。

「どういうつもりだ、アレイスター」

土御門は雇い主であるアレイスターに向かつて苛立つた口調で言つた。彼はアレイスターの従属的な部下ではないのだ。

土御門の口調には突き放すような響きがあり、普段の彼を知る者なら驚きに身をすくめていただろ。これが彼の『仕事の顔』だつた。感情を隠そうともしない土御門に、アレイスターは淡く淡く笑つて、「何の事かな？」

「とぼけるな。貴様ともあろう者が『この由々しき事態』を把握していない訳がないだろう」

「分からぬ。もつと具体的に言つてくれないか」

態度を変えないアレイスターに土御門はチッと吐き捨てるように舌打ちして、話し始めた。

『神槍トシキ』。七月二十日未明にこの街に侵入した魔術師の名だ。本名どころか所属・出身地全てが不明、情報工作にも程がある人物だ』土御門は数日前から彼のことを徹底的に調べた。イギリス政教から直属の依頼が出たのだ。

彼は多角スパイとして世界のあらゆる方面にパイプを持つている。情報屋としても一流と言える。そんな彼は自慢のパイプをフル活用して『神槍トシキ』の情報を搜した。世界広しと言えどこれほどまでのパイプを有しているのは彼含め10人といないだろ。

『そんな彼が、全力で情報を探つたと言うのに』、

『一つの情報も出てこなかつたというのは、もう――』

『異常』だ、平常を逸脱している。いいかアレイスター、自慢じやないが俺は情報関係に関しては相当な腕を持っていると自负している。そんな俺が方に一つの情報も掴めない人物など……ッ！』

何かを耐えきれなくなつた土御門は、円筒のガラスに書類をバンツ！と叩きつけた。逆さに浮かぶアレイスターに書類の内容がガラス

越しに露わになる。赤髪に白い肌、中性的な容姿の少年の顔写真がクリップで止めてあつた。妙な角度から撮られている事から盗撮である事が分かる。

「答えろアレイスター、こんな危険人物をなぜ野放しにしている？貴様ならいつでも奴を始末できた筈なのに」

「……ふむ」

しばし沈黙が続き、不意にアレイスターが閑念したように視線を土御門から暗闇が広がる虚空に移した。途端、アレイスターが見つめる虚空へモニタが複数現れ、映像を再生し始める。

「これは……」

映像を見て、土御門は眉をひそめた。全ての映像が角度こそ違うものの、同じ場所を映しているからだ。しかもそこは土御門にとつてもとても見覚えがある光景だった。

彼自身も暮らしている学生寮の前、隣接している学生寮との間を固定カメラで捉えた映像だ。普段ならこの場所には何の変哲もない、マンションのような学生寮に挟まれているだけのありふれた道だった。

土御門は素直に自分の疑問を吐露する。

「これがどうした」

「まあ見ておきたまえ。君にとつても『これ』は面白いと思うがね」
なに？と土御門が聞き返す前に、映像に変化が起きた。突然、全てのカメラ……映像にノイズが走り、遂には完全に真っ暗になり機能停止に陥ってしまった。しかしそれは一瞬の事で、一秒とかからず元の鮮明な映像が流れ始める。

「……おいアレイスター、悪ふざけなら付き合わんぞ。確かに全てのカメラが同時に故障したのは気になるが、それだけだろう。珍しいが、ない事じやない」

「私は同じ事を言うのが嫌いだ。……よく見てみたまえ」

言われ、土御門はもう一度故障した後の映像を凝視してみる。

そして……気づく。

ノイズが走り一瞬だけ暗闇に包まれた、前と後の映像。その二つの『違ひ』に。

「なんだ、これは……」

驚愕に目を見開く。青いサングラスに守られた土御門の瞳に、映像が映り込む。『いた』のだ、彼が。映像が途切れた一瞬にも満たない時間に現れたごとく。

特徴的な赤い髪に男とは思えないほど白い肌。一見では性別を判別しにくい顔立ち。茶色いローブに包まれた細見な体。

神槍トシキ、そう名乗る人物が。

「先に言つておくが、『この現象』はいま映しているカメラだけではない。衛星、掃除ロボット、人の目……私が有する『特殊な情報網』、彼が現れたであろうその瞬間だけ『全ての目が遮断された』

なつ……！」と冗談なしに土御門の吐息が停止した。今も映像は再生され続けていて、画面の中の話題の人物は、キヨロキヨロとまるで知らない場所に来てしまったかのように辺りを見渡し、真上から落ちてきた禁書目録に気づくと、ジャンプして抱え込み土御門の部屋の隣……上条当麻宅のベランダに着地し、フレームから出て行つた。

「分かつていいのなら丁度いい。私からも依頼しよう、彼が何者か調べて欲しい。期待はしないがね」

そんなアレイスターの戯言も今の土御門には届かなかつた。科学サイドの長たるアレイスターを出し抜く人物、そんな存在が実在することは夢にも思わなかつたからだ。彼の頭の中では様々な思考が渦巻く。どう利用する、いやその前に危険性の確認を、そんな事をしている間に他者に取られてしまつたらどうする……。

いや、そんな事より……。

これほどまでの危険人物を野放しにしている目の前の人間は、一体何を考えている……？

「ふつ。決まつているだろう？」まるで土御門の思考を読んでいるようだ。『人間』は言つた。

「プランの短縮、それ以外に私が望むものはない」

そう、目の前の人間はいつもそればかりだつた、と幾分落ち着きを取り戻した土御門は冷静に分析する。アレイスターは『プラン』と呼ぶ計画を最重要視していて、その達成を果たすためならどんな犠牲も

いとわない。それが例え、自らの家族であつても……。

「……さて、どうしたものかな」

言葉を隠そくともせぬ咳く『人間』アレイスター。そもそも彼の言う『プラン』には神槍トシキなる人物は一切登場しない。完全にイレギュラーな事態だった。本来なら急ぎ始末して、少しだけ誤差を抑えようとするだろう。

しかし、アレイスターはさらにその先を見る。

イレギュラーならイレギュラーなりの役割がある。プランに一切関わらない筈の人物をあえて関わらせる事で、大幅な短縮を望める場合もある。それを見極めるためには、まずはあまりにも欠如している彼のデータを集める必要があるので。

データ。

過去のデータが一切手に入らないと言うならば、今の、最新のモノで補えばいい。

だがデータと言うのはやはり量が不可欠だ。それには測定するだけの時間がいる。今すぐ手に入るデータというのは限られてしまう。なら、その今すぐ取得できるデータの中で最も有益なモノと言えば……。

『戦闘力』。それ以外はない。

「始めはお遊びだ。なに、聖人に傷をつけた君ならば余裕だろう?」

モニタに映つてゐる赤い髪の少年に語り掛けるように咳く『人間』。男にも女にも、大人にも子供にも、聖人にも囚人にも見えるその顔が僅かに笑みらしいものを見せた。それを見て、何か生理的な嫌悪を感じた土御門は僅かに眉間にシワを寄せる。

学園都市統括理事長『人間』アレイスター、彼の気まぐれ一つで地球すら破壊されかねない。彼は円筒の水槽の中で僅かに、震えとも取れるほど小さく右手の小指を動かす。

たつたそれだけの動作で、神槍トシキへ科学にまみれた刺客が解き放たれた。

とある虚偽の迷子案内（スクランブル）

工事中のためこの道はご利用できません。

夕暮れに包まれた散歩からの帰り道。なんの気もなしに踏み入れた公園で遭遇した短パン少女からステキに逃げ切った神槍トシキは、目の前で鎮座している看板の注意書きに足を止めた。

『工事中つて……さつき通つた時は何もなかつた筈だけどなあ…』

彼はポツリと呟いて、小さく息を吐いた。黄色を基調とした看板の先の道路に目をやると、確かに工事中のようだつた。作業服を着た数人の男性と重機がきびきびとした動きでアスファルトを碎いたり固めたりしている。アスファルトを重機で豪快に砕いているというのに機械音が一切しないのは、学園都市の科学力ゆえだろうか。

しかし困つた。これでは『行き』と同じルートで帰れない。

——いや、一度迂回すればいいだけなのは分かる。それは分かつている。しかし学園都市新参者の神槍はまだまだ土地勘がないため、できれば知つている道から外れたくないのだ。この歳で迷子とか恥ずかしくて死ねると半分以上本気で神槍は思う。それに最終的に公安の皆様の厄介になつたら最悪だ、とある事情でこつそり不法侵入者の彼にとつて警察関係の出来事には敏感だつた。

いつそ飛び越えてやろうかという考えが脳裏をよぎつたが、すぐに脳内会議で却下される。飛んだりしたらそれこそ悪目立ちしてスピード逮捕という展開が見え見えだ。

『……仕方ないか。消去法だ、一番穩便そうなやり方で行こう』

神槍はクルリと右に九〇度体を反転させた。そこは大通りからそれる道すじのようだ、一気に道幅が狭くなつている。

看板の隅つこに書いてある迂回ルートの矢印に従い、彼は再び歩き出した。

ヘ……目標、予定通りに移動開始。地点Bへ向け移動中、準備されだし。繰り返す…』

工事員の男が、不審な言葉を襟元に潜ませておいた通信機へ向けて

送っているのにも気づかぬまま……。

この数分後、工事員も看板も重機も工事跡も最初から何もなかつたように姿を消していた。もちろん通行も可能で、夏休みという事もあつて外に出ていた学生たちが賑やかに通り過ぎて行く。その光景の変わりようは、もしその異常さを正しく認識できた人間がいたとしたら寒気を覚えるレベルだつた。

友人と何かの話題で盛り上がつている学生の足が、ついさつきまで工事現場だつた筈のアスファルトを踏んでいく。その時に蹴飛ばされた小石がカツン、カツンと音を立てて転がり、不自然に残される小さな窪みにはまつた。さらにその上を学生たちの足が踏み越していく。

ピキッ、という断末魔のような小さな音を残して、度重なる衝撃に耐えきれなくなつた小石は無残に碎け散つた。その砂のようになつた残骸も風に持ち上げられ、どこかへ消えてゆく。

まるで罠に嵌りそのまま無残に死に絶えたエサのように。まるで、

とある少年の未来を暗示しているかのようだ。

『……？』

突然頬に走つたサラサラとした感触に、神槍は思わず足を止めた。どうやら風に巻き上げられた砂か何かが当たつたらしい。なんとなくその不快感を許せない彼は、あろう事か魔法障壁を全身に展開した。術式に『異物』と判断された砂は一つ残らず頬から綺麗に弾かれ、また風に乗つて視界から消えていく。

美琴嬢の気を逸らすために簡単な浮遊術を使つたり頬の汚れを取りるために障壁を開いたりした所を見ると、どうやら彼には魔法を容易に使う悪癖があるらしい。

(……それについても、おかしいだろ。ちゃんと矢印通りに進んできたのに何でこんなトコに出ちまうんだ…?)

首を回して改めて辺りを確認すると、ここは人気のない空き地のようだつた。四方をほとんど廃墟と化したビルに囲まれていて、出入り

口は神槍自身が入ってきた細い路地裏しかない。

つまりは行き止まり。つまりは……絶賛迷子だつた。

（いや待て、待つて。その活字説明はおかしいだろ。俺は矢印通りに進んだんだ、それでこんな所に辿り着いたつて事は看板の方が間違えてたつて事だ。うん、だから俺は悪くない）

悪くないんだつてばッ!!と誰に言う訳でもなく飛び出した言葉は虚しく辺りに響いた。

だーもう無駄足喰わされた、とばかりに怒り心頭な神槍は名前も知らない工事会社に思い切り殺意をぶつける。そんなんだからブラック企業なんて言葉が生まれたんだ。

『く、くそ、こんな事になるなら最初から飛び越えてれば良かつた…』

はあ、と声にもならない溜息をついて元来た道を戻ろうと、風で暴れるロープを従えて踵を返す。

瞬間、

神槍の側頭部にトンカチで殴られたような衝撃が直撃し、その華奢な体を空中へ吹き飛ばした。

『——がっ!?』

あまりの突然の事態に脳の理解が追い付かない。だが体の芯まで染みついている『経験』が四肢を動かす。

目前まで迫っていた汚い地面に両手をついて、側転の要領で一気に逆になつていた頭と足の位置を元に戻す。地面に両足がついてやつと重力という感覚を彼は思い出した。そして一瞬の間もおかず右斜め上……一見何も見当たらない方向へ右手をかざす。

ブウン、という虚空を突き破るような音を伴つて一つの魔法陣が現れた。直後、その『壁』にさつきの衝撃が激突する、それも複数かつ連續でだ。

『くつそがっ、狙撃か!?

空いた左手で調子を確かめるように己の頭を小突く神槍。魔法障壁がなければ完全に頭を吹き飛ばされていた。銃弾そのものは防げたが、日常レベルに設定していた障壁ではインパクトまでは殺せな

かつたらしい。

そうしている間も銃撃は止まず、右手の魔法陣は絶えず火を噴いているようだつた。神槍の足元にただの鉛となつた銃弾が次々と溜まつていく。

『!!』

魔法障壁は何も『壁』としての能力だけではない。その身に触れた攻撃を正確に分析解析し、術者に伝える。今回の場合は銃弾の進入角度、速度などだ。その情報から敵（ナイパー）の位置を割り出した神槍は、魔法陣と銃撃の閃光越しにその姿を認めた。彼の黒い瞳に小さく敵の姿が映り込む。

敵は遠く離れた高層ビルのベランダからこちらを狙っていた。距離にしておよそ七〇〇メートル。ベランダの手すりにスナイパーライフルを固定して今も撃つている様子が見て取れた。全身黒ずくめと言つた服装をしており、顔は銃身に隠れて見えないが体のラインからして男だろう。

（くつ、遠すぎて応戦できねえ……ッ！）

そもそも七〇〇メートル先から撃つてこれほどまでの威力を発揮できるスナイパーライフルというのが信じられない。どうやら学園都市の科学力は化学兵器にまで及ぶらしい。それに加え敵の技量も上乗せされているだろう。自然と何者だという疑問がチラつくが今は無視する。今の状況で何を考えても仮説の域を出ない。

『……？』

と、初撃と同じように突然銃撃が止んだ。弾切れか?と思いついた地点に目をやるが、その期待は裏切られた。——いない、逃げられた。銃口から煙を上げるライフルだけがベランダに放置されていた。足がつくぐらいなら愛用の武器など持たない。

追跡する側としてはこの上なくやりにくい種類の相手だった。

『解除……』

神槍の言葉に反応した魔法陣は一瞬とかからずその身を消す。銃撃を止めた理由は分からぬが、これから先ずっといつ胸を撃ち抜かれるか心配するリスクを考えると違うしかない。それに今回は自分

だつたが、次も同じとは限らない。周りの人物。そう、守り切ると誓つたあの少女に銃口が向けられる可能性だつてある。

（誰だか知らねえけど……あの子にとつて危険だと思われるような行為をしたんだ。その分の責任は払つてもらわないとなッ！）

赤い少年の両目にギラツとした物騒な何かが灯る。その光を秘めたまま走り出そうとする神槍だが、それもまた先ほどと同じように妨害されてしまう。

狙撃ではない。体のどこにも変化は起きていない。そもそも攻撃ですらなかつた。

それは音。正真正銘、ただの音だ。空気の揺らぎでしかない。

ただし、それが爆発音という分類に入るモノだつたというだけ——

『……』

肌で熱風を感じ取つた神槍は走るために前に出しかけていた体重を引き戻し、熱風の発生源へと向き直る。

この空き地の四方を取り囲む廃ビルの内の一つ、その外壁が爆発によつて大きく抉れ、中を確認できるようになつていて。まだ黙々と上がり続ける黒煙の中を横断してくる歪なシルエット、それは碎けた外壁に空いた穴から飛び降りて、空き地に着地した。ズシンっ、という傍から聞いても鈍重そうな音が伝わつてきた。

『なんだ、アレ……』

呆然と呟く神槍だつたが、彼が置かれている状況は悪化する一方だつた。爆発によつて作られた粉塵の灰色のカーテン、その向こうから次々と歪なシルエットを有するそれらが這い出てくる。彼らは最初のそれと同じように外壁の穴から身を投げ出し、空き地という舞台に躍り出る。

それを認めて、神槍はもう一度呟いた。

『何なんだよ、『アレ』は……』

頬を伝つて顎まで来た一粒の冷や汗が落ちて、地面を薄く濡らした。

パワードスープ
駆動鎧、という言葉を知らない神槍はそれを『西洋の鎧っぽい何か』

と表現するのが精いっぱいだった。

駆動鎧とは西洋の金属鎧のように全身を特殊な装甲で覆い、なおかつ関節を電力駆動で動かす事によつて生身の人間の数倍もの運動能力を叩き出す学園都市産の兵器だ。用途・規格によつてサイズや戦力は様々だが、神槍の前に現れたのは全長二メートルほどの大きさの金属の塊だった。

灰色と白の特殊な迷彩を施された機体は、それぞれ一本の手足を持つつていて指も五本ついている。しかしその駆動鎧を初めて見て『中に入っている』とはまず思わないだろう。その原因は頭に当たる部分が巨大で、まるでドラム缶型の警備ロボットを被つているように見えるからだ。しかも首はなく、胸部に直接固定された『頭部』が回転している。

ギシギシギシ!!という音が一斉に溢れた。都合一〇機もの駆動鎧がその機械的な足を動かし、目の前で呆然とこちらを見ている少年へと迫る音だ。明らかに何百キロという物体が激しく動いているのに、金属同士がこすれ合う甲高い音しかしないというのは感心を通り越してものはや不気味そのものだつた。

↑ 攻撃開始 ↓

それだけだつた。たつた数文字の機械音声がどこからか流れた途端、駆動鎧たちが一斉に神槍へ向け手に持つていたショットガンらしきモノを向けた。そして何の躊躇いもなく、機械らしく、プログラム通りに、その「引き金」を引く。

『ツ――風花・風障壁!!
フランス・エリーアーリス

少年の口から独特の抑揚がある言語が放たれる。すると少年の体を球状の何かが包み込んだ。そこへ軽く二〇〇は超える銃弾が殺到する。

ドドドドドド!!という間隔なしの激突音が空き地全体にまき散らされた。致死量を遥かに超えている量の銃弾は神槍を包む球状の何かにぶつかり四散する。破片となつた銃弾が少年の周りの地面に突き刺さり土を抉つた。粉塵のカーテンが巻き起こるが、少年を守つていた球状の壁が崩壊すると同時に起きた突風によつてすぐさま払

われる。

↑——ターゲット生存確認、二次攻撃を展開——

駆動鎧たちはショットガンを腰にあるアタッチメントに固定する代わりに、背面にあつた斧のような形状の武器を手に取った。そしてやはり常人とはかけ離れている速度で移動し、あつという間に神槍の周りを取り囲んだ。……どうやらショットガンを収めたのは親切ではなく同士討ちを防ぐためだつたようだ。

『チイツ！こつちは忙しいつてのにワラワラと……手加減は期待するなよ』

↑——連携Cを選択、アタック——

『ハツ、上等だ』

二機が弾丸のように飛び出した。刃の部分だけでも一・五メートルはある巨大な斧を頭上へ振り上げ、二体同時にそのまま振り下ろす。単純だが、重力の力を借りられるために強力な一撃を放てるやり方だ。しかも駆動鎧は電力駆動によつて人間の筋力の数倍の力を扱える。

人肉など紙のよう両断できるその一撃を、神槍はあえて駆動鎧に密着するほど近づく事で回避する。すぐ背後でザグンっ!!という斧が大地を抉つた音が耳を撫でた。

『来たれ虚空の雷、難ぎ払え……』

燃えるような赤い髪を揺らしながら、少年は二機の駆動鎧の間に体を滑り込ませ背後を取る。ドラム缶のような頭部が回転し、少年の姿を再び捉えようとするが……遅い。

『——雷の斧！』

神槍は胸の前で虚空を切るように右手を真横に力強く振つた。刹那、右手が描いた軌跡を辿るよにして鋭い雷撃が生じる。ジジジジッ！と大気を焦がす雷撃は斧を模した形を成すと、雷特有の速さで二つの駆動鎧の装甲をあつさり引き裂いた。そのあと神槍はすぐさまその場を離れる。

新たな二つの爆発音が大気を揺らした。

(やつぱりな……無人機つて奴か)

その通りだつた。本来、人が乗る事によつて機能する筈の駆動鎧には誰も乗つていなかつた。だからこそ神槍はここまで接近を許してしまつたのだ。機械には気配も魔力もない。

↑ 機体B、機体F反応消失、ロスト――

↑ 爆散確認。ターゲットへの接近危険大、アタックプランの変更要請……承認確認――

↑ アタック――

残つている駆動鎧が一斉に動き出した。武器についても斧を持っている機体もいれば、ショットガンを持つている機体もある。全機が相当の速さで動き回つているにも関わらず、少しも衝突の心配はいらなかつた。

当たり前だ、全てがプログラムによつて制御された動きなのだから。緊張による失敗もなければ、感情に流される事もない。

だつて、相手は鉄の脳に金属の皮膚を持つロボットなのだから。そう、相手は機械。

ならば、

わざわざ敵の命を案ずる必要も――ない。

『……誰がこんなオモチャを送り込んできたかは知らない』

ふいに一機の駆動鎧が高速機動の包囲網から抜け出して、不敵に口元を歪めている少年へ襲い掛かる。

『あの狙撃がお前らに関係してるのはどうかも、俺は知らない』

少年は特に何もしなかつた。ただただ突撃してくる駆動鎧を待ち構える。そして、あと一瞬で二つの影が重なる時の中での

『たださ――責任は取れよな?』

ベキベキベキッ!!という音が連續した。魔法使いの少年がカウンター氣味に突き出した右拳が胸部装甲を貫き、続いての回し蹴りで駆動鎧を吹つ飛ばした音だつた。二回、三回と地面をバウンドしたその金属の塊はそれ以降動く事はなかつた。

↑ 理解、不能――

↑ 強化装甲最深部までの貫通確認。復帰、絶望――

↑ 情報、の更新要請……失、敗――

残りの駆動鎧から聞こえてくる機械音声に、彼は言つた。

『不可能を可能に、可能を不可能に……魔法使い^{オレ}の前じや、常識なんてのは秒単位で変わる』

ショットガンが火を噴いた。しかし、まき散らされた銃弾が届く頃には少年の姿は消えている。どころか、右手から生やした光刃で別の駆動鎧を両断している始末だ。どうにか攻撃を当ても彼を覆う膜のような何かに阻まれ、無力化される。

それは、科学的な視点から見て有り得ない現象だった。不可能な、現象だった。

一体どこでミスをしてしまったのだろうか。鉄の脳を持つ駆動鎧は目の前で次々に爆散していく仲間達を前に、いつまでもそんな思考をループさせていた。

そして、気がつけば仲間達はただのスクラップに成り下がつていた。

大胆にも真正面から赤い少年が迫る。最後の駆動鎧はそれでもプログラムに従つて斧を振つた。

勝敗など、もはや歴然だつた。

ガゴンっ！という甲高い音を立てて、最後の駆動鎧が崩れ落ちる。何回かボディの各部でスパークを起こしたが、それが最後だつた。何かが焦げたような臭いが漂う空き地に静寂が舞い降りた。

『しつかし、一体何なんだつたんだ？これ』

そんな無音だつた空間に、ジャリ、と大地を踏んだような無遠慮な音が割り込んだ。神槍の片足が金属片を踏んでしまつた音だ、彼はそちら中に散らばつている鉄くずを見て、小さく溜息をついた。最近なんだかもの凄いスピードで厄介ごとに巻き込まれてゐる気がする。短パン少女とか狙撃野郎とかロボット軍団とか短パン少女とか。

ともあれ、危機は去つた。そして狙撃した敵も取り逃した。

時間がかかり過ぎた。今頃狙撃手は遙か遠く、ただの一般人に扮して優雅なティータイムに入っているかもしれない。

（つつか、この空き地で待ち伏せしてたつて事は……）

神槍はそもそもその始まりであるあの看板と工事現場を思い出す。おそらく奴らかその親玉がこの空き地に誘導して狙撃手とのロボットを送り込んだのだ。それは間違いない。

だがしかし、今はそんな事はどうでもよかつた。

真に問題なのは、

これだけの爆発騒ぎを起こしておいて、何の治安組織も出張つて来ないことだった。

自分が起こしておいてなんだが、先ほどまでの連續爆発は相当のモノだったと思う。それこそこの街を守る治安組織の一つアンチスキルが全身武装して飛んで来ても驚かないぐらいには。

なのに何故、何もやつてこないのだろうか。

『……』

神槍は答えを求めて、薄い赤色に染まる空を見上げた。もつと正しく言えば、その先、宇宙にある監視衛星。学園都市は常に空から街の様子を見張っている筈、当然今の戦闘行為も『見えて』いた筈だ。しかし何の音沙汰もないというのは——もう、

(学園都市そのものからの襲撃、つて事だらうな、多分)

思考の闇に沈んでいた神槍だが、それはどこからか聞こえてきた、ピピピという電子音で一気に引き上げられた。「ん？」と辺りを見渡す彼を嘲笑うかのように、『声』は喋り出した。

「もしもし？ もしもしーし？ 聞こえてる？ ねえこれ聞こえてんのかしらあ？」

まるでレストランでウェイターを呼ぶような口調の、女性らしき『声』だった。

慌てて声の発信源へ視線を向ける神槍の眼に飛び込んできたのは、地面に転がっている一機の駆動鎧だった。どうやら『声』は無事だった駆動鎧の通信機能を利用して喋っているらしい。

とりあえず神槍は返事をしてみた。

『……よく聞こえるぜ。で、お前は……いや。お前らは一体何者なんだよ』

「こいつときたら！ 私はアンタと会話する気はないんだつづーのつ！」

一方的に連絡する事はあつてもね！」

連絡？と神槍は首を傾げる。それと同時にもうちよつとこの大音量を落してくれまいかとも思った。

「ちくしょう、何でこの私がこんな下つ端がするような雑務を……。言つておくけど、一回しか言わないから耳の穴かつぽじつて聞きなさい！」

『前半で本音出ちゃつてんじやん』

「うるせー口答えすんなこいつときたらーつ！つたく、本当に何で私がこんな事……、だーもういいわさつさと言つてさつさと終わらせてやる！おいごら神槍トシキ！」

相手に己の名を呼ばれて神槍の眉が一瞬、ピクリと動いた。名前程度の情報は入手済みという事だ。

「今から三分三二一秒前……つまりそこで転がつてるスクラップどもを全滅させた瞬間に、アンタの名前が「書庫」バンクに登録されたわ！ハイ以上終わり！私撤収！」

『?? いや、いやいやいやー待て待つて待ちやがれ！それつてつまり……どうなるんだ？』

まず書庫という単語の意味が分からぬ神槍にはさっぱりだ。うーん？と首を傾げる彼に気づいたのか、今にも通話を切る勢いだった『声』の主は感情のままに素直に叫び出した。

「はあ？何で理解できないのよ不法侵入者ならそ�らしく敵地の情報ぐらい探つときなさいよ、困るじやない！主に私が！」

『そんな事言われてもなー』

「そんな事じやないわよーいつときたらーつ！この私の頭を悩ませるもののは全て地球から消えてしまえば良いのだーつ!!」

がははははーっ!!という巨大武将みたいな笑い声が終わるまで、神槍は頭を抱え続けた。ダメだコイツ、早くなんとかしないと……。

『あーその、ええと、簡単でいいから説明してくれよ、頼むから』

こういうタイプの人間には嘘でもいいから下手に出よう、大変不本意ながら神槍は変人の扱いには慣れていた。

案の定、『声』の主は説明を始めた。それでもかなり機嫌は悪そう

だつたが。

「書庫」つてのは学園都市に関するデータの集合体のことよ。そこにはあらゆるデータがあるけど、全てを見られる訳じやない。まあとにかく、学園都市のデータベースつて考えればそれでいいわ〉

『ふむふむ』

〈んで。その「書庫」の中には当然、学生どもの戸籍・能力・所属なんかの情報もあつてね。つまりこの学園都市における身分証明書……IDのリストもある訳よ〉

『うんうん』

〈それで私が言いたいのは、そこにアンタの名前をぶち込んだつてこと。「上」の命令でね。これでアンタも晴れて学園都市の人間つて訳、めでたしめでたし。どう分かつた?〉

『分からねえぞ!』つてかお前の説明は圧倒的に目的格が足りてないよ!!何でそうなつたのかを言えつつの!』

思わず『声』の発信元である駆動鎧を蹴飛ばしたい衝動に駆られる神槍だが、なんとか思いとどまる。このままマルツと終わつて一番困るのは自分自身だ。

〈いやそんな事言われても私知らないし〉

『知らないのかよ!』

〈私はIDリストの細工とアンタへの通達しか言われてないし。あ、ちよい待ち。今思えば他にもなんか言つてた気が……忘れちつた☆〉『そこじゃね?なんか超適当に言われたけどそこなんじゃね問題は!?

ぬ、ぬおおおおーつ、と本気で頭を抱えて唸りだす神槍に、『声』は言つた。

〈まつたくこいつときたら!目的なんて大層なモノ考える暇があつたら、さつさと学園都市の住人成りの身の振り方でも覚えなさいつての〉

『……どういう意味だよ?』

〈だからさ、いい加減に気づかない訳?本来、向こう側の世界の住人……魔術師であるアンタをこの街に取り込んだ無茶さと重大さに。』

「上」の老害どもはそうまでしてアンタを手元に置いておきたいのよ。
理由なんて知らないし興味もないけど〉

まあガンバ★、と『声』の主は付け足した。

そうだ、この世界の定義に置き換えれば、神槍トシキという存在は『魔術師』に分類される。科学サイドと魔術サイド、世界を二分する境界線。今回の一連の出来事で神槍は『魔術師』でありながら学園都市の『住人』という奇怪なポジションに放り込まれた事になる。

それは、とても危うい。

互いに干渉しない事で成り立っている二つのサイドに、片足ずつ突っ込んでいるようなモノだ。地獄と地獄の境界線をまたぐような立ち位置。

『……おい、それって俺個人の範疇で終わる問題じゃないだろ。下手したら両サイドで「戦争」が起きるような、そんなスケールの話なんじゃねえのか……？』

〈だから頑張れって言つた。しくじるなよ下つ端。じゃ、私は今度こそこれで、ね！〉

ブツツ、という音を最後に通話は途切れた。再び空き地に静寂が戻る。

『……』

神槍は実感が湧かない顔で己の手に視線を落とした。何回か握つたり開いたりして、物思いにふけるみたいな表情をする。そのまま立ち去ろうとする彼だったが、またもやピピピという電子音に足を止められる。

なんだか凄く言いづらそうな声色で、再び回線をつなげた『声』の主は、

〈……ええと、追加でいい？さつき思い出せなかつた事思い出しちゃつて……〉

『はいはい、もう何が来ても驚きませんよーだ。早く言えよ』

〈なんかね、アンタつて風紀委員ジャッジメントになるらしいよ？渡されたIDカードチラつと見た時にそう書いてあつたもん〉

』
は?
』

とある科学の必然再会（カードセレクト）

——あー、その、当麻。ちょっと話があるんだけどいいか？

——あん？なんだよ改まつて気持ち悪いなあ。なんかあつたのか？

——なんかね、俺ね、風紀委員になつちつたみたい。しかもＩＤもバツチリ発行済み。

——ホントにナニがあつたツツツ！？

……と声を荒げながら仰天している上条の顔を思い出して、神槍は路上という公共の場である事も忘れて普ツとこらえきれずに小さく吹き出した。続いて目元に出てくる涙を指で拭いながら彼は今朝、寮部屋で告白した事について考えてみる。

隠しても仕方ないしどうせバレると判断したので、彼は同居人二人に正直に学園都市のＩＤを手に入れた事とその条件として風紀委員になつた事を伝えた。

もちろんあの襲撃と『通話』に関してはひた隠しにして、上手く追及を逃れたが。

（ま、わざわざアイツらまで「あつち」に首を突っ込ませる必要はないよな。俺だつて出来ればこれ以上は関わりたくないもん）

学園都市。科学サイドの本陣であり、世界で唯一の超能力開発機関。それに加えて馬鹿げたオーバーテクノロジーを日々生み出している巨大研究機関の側面も兼ねている。

そんな無茶な大規模施設をどうやつて競争社会の中で維持しているのかとずっと疑問に感じていたのだが……なるほど。ああやつて不利益な存在及び情報の漏えいを防ぐ事で成り立たせている訳だ。それか、神槍の場合のように取り込んでしまうかして……。

『まあ、今の俺なんかを匿つても大した意味はないと思うけどなー』

ポツリと無意識の内に出た神槍の呟きに、すぐ近くを通っていた顔も知らぬ学生たちが不振の目を向けてくるが、お生憎。神槍トシキはその程度で怯む心は持ち合わせてはいないので。

そう、今現在神槍は外出中だった。今日はカナミンのさいほーそー

がないから暇なんだよヒマヒマーッ、と駄々をこねるシスターに留守番を任せて。上条に至つては今日も今日とて補習で口りつ子教師に絞られている事だろう。アーメン。

不幸だー、と口癖を放つ親友の姿を予感して心の中で合掌しながら、神槍はコートのポケットから一枚の紙切れを取り出した。何度も折られているらしきそれを広げていくと、書いてある内容からして地図のようだった。流石は学園都市の地図、工場マークの数が半端ではない。

（うわあ、こうやつて見てみると本当に迷路みたいだなこの街は……）
かろうじて寮の周辺と大通りの何本かは分かつたが、細い横道などになるともはやちんぶんかんぶんだつた。しかも地図に書いてあるだけでコレだ。実際には裏路地などの裏道もあるのだろう、もう想像もしたくない大迷宮だつた。たしか京都のどつかもこんな感じだつた気がする。

うだー、とよく分からぬ擬音を発しながらに地図を広げていくと、目立つように赤い丸で囲まれた箇所があつた。丸の中心にある建物を示す四角形にはこう記してあつた。

風紀委員第177支部。

神槍はまさしく今、そこへ向かおうとしていた。

書類上ではもう研修も終えて9枚の契約書にサインした事になつてゐるが（詐欺だ…）神槍はペーぺーの新米なのだ。

どうやら最初は最寄りの支部で経験を積めという事らしい。変な所で気を使うんデスね上層部エ…。

『……行くか』

兎にも角にも、彼は目的地を目指して歩き出す。

科学の街『学園都市』。更に視野を広げればこの世界そのもの。

そこへ紛れ込み順応する事が、魔法使いである自分にとつてどれだけ難しいことかを理解しながらも

彼は止まらずに、

神槍トシキは立ち止まらずに、

前へ一步踏み出す。

どこか寂しげな彼の背中は、すぐに入混みに揉まれ見えなくなつた。

はああああああああああああああー、という溜息は、低く、ただ低くその場に広がつてゆく。

声の主である少女は往来の激しい道を歩いているにも関わらず、九〇度首を下げてどんどんスクロールのように移動していく地面を見つめていた。彼女の名前は初春ういはる飾利かぎり。

中学一年なのだが低い背と丸っこい肩のラインのせいか、夏服のセーラーがなければ小学生に見えてしまいそうな小柄な少女だ。黒の髪は短めで、バラやハイビスカスなどの花飾りをたくさんつけていた。遠目に見ると派手な花瓶を頭に乗つけているみたいだ。

「まあまあ、元気出しなつて初春！くよくよしたつてしようがないじゃん！」

「私が落ち込んでいる理由を作つた人のセリフじないですよ、佐天さん……」

佐天さてんと呼ばれた初春の隣を歩いていた少女は『いやー、ごめんごめん』と謝罪するが、声の明るさと彼女の性格からして絶対に反省しているという結論を、初春は冷酷に導き出した。

セミロングの黒髪を白梅の髪飾りで分けている佐天は、夏休みにも関わらず制服を着ている初春とは対照的に完全な私服だった。全てが動きやすそうな服をチョイスしている事から、彼女の活発さが見て取れる。

しかしその活発さがクラスメイトであり親友の初春にしばしば災害をもたらす原因でもあった。

「もう、いつも口を酸っぱくするぐらい言つてるじゃないですか。その、私のスカートをめくるのやめてくださいって」

「だからごめんつて。そんな事より、珍しいじやん、初春の方から私を誘うなんてさ。どこに行く気なの？」

「む。またそうやつて話をうやむやにする気ですね。今度ばかりは許しませんよつ」

頬をぷくつーと膨らませて睨む初春だが、佐天にしてみれば小動物が健気に頑張っているような、そんな和やかな光景にしか見えない。でもそれを素直に言つてしまふとまた怒らせるのは目に見えているので、佐天はいつものように強引な話題転換で話の流れを逸らそうとする。

「そういうえば昨日の誘いの電話の時、初春言つてなかつたつけ？常盤台のエースがなんとかつて」

「はつ、そうでした！今日は念願の御坂さんと合わせてもらえるんでした！」

うわー単純だなあといきなり目をキラキラさせてテンションMAX状態の初春を見てなんだか罪悪感がわいてくる佐天だが、そんな事お構いなしに興奮した親友はおしゃべりを展開していく。

「学園都市に七人しかいないlevel5・常盤台のエースの御坂美琴さんに会えるんですよ？凄いじゃないですか！残業で白井さんが弱つているのを狙つてしまつてしつこく頼み続けた甲斐がありました！」

「初春、アンタって地味に腹黒いよね……。つてか、ホントにそんな人に合つて大丈夫なの？どうせまた能力を笠に着た、いけ好かない奴なんじやないのお？」

「そんな事……」

「だつてああいう人達つて、自分より下の人バカにするじやん？ムカツクんだよねえ、しかも常盤台のお嬢様だなんて——」

「いいじやないですかお嬢様ツツ！いえ、むしろお嬢様だからいいんじゃないですか！」

突然、佐天の言葉を遮るように初春が叫んだ。

声の音量が今までとは桁違いで、頬は興奮のあまり赤く染まつている。……造花のはずの花達まで元気になつたのは氣のせいだと信じたい。

今まで見たことがないぐらいテンションが高い親友に、佐天は若干引きながら、

「つてアンタ……単にセレブな人種に憧れてるだけなんじや……」

「そ、そんな事ないですよ？」ビックウ!!と肩を大きく震わせた初春

は、

「ちなみに、私の出身が西葛西だつて事も関係ないですよ？ああつ、そろそろ時間がヤバイです！急ぎましよう佐天さん！」

「ええつ？ちよ、初春ー！？」

一応、歩きながらの会話だつたが必要以上に白熱したせいで時間が危ないらしい。初春に手を取られた佐天は引っ張られるように駆け出した。

「……つて、待ち合わせ場所つてこー？」

「そうみたいですね。うん、端末で調べましたけどやつぱりここで合つてます」

持ち運び用の端末片手にあの初春が言うのだからここで合つていのだろう。佐天は意外そうな表情で、

「ふーん。待ち合わせ場所のチヨイスは普通なんだね。ちょっと意外かな」

「ですねー。私的にはもつと、こう、豪華な感じを想像してたんですけど」

平たく言うと、待ち合わせ場所はただのファミレスだつた。常盤台のお嬢様と言うぐらいだからもつとオシャレな場所を想像していた二人は、拍子抜けしたようにファミレスを見つめ続けた。

と、突然初春が『あつ！』という声を上げて道に面しているガラス張りの一つの席を指さす。

「いました！きつとあの人ですよ！白井さんもいるから間違ひありませんって……あー」

急に勢いがなくなつた初春の様子に疑問を感じた佐天は、自然と吸い込まれるように初春が指さしている席に目をやる。

そこには、

長髪のツインテールを振り乱しながら鬼のような表情で抱き着く女子と、それを必死に振り払おうとしてスカートなのに片足を思いつきし上げてゲシゲシしている茶髪の女子がいた。

「…………

私帰る

「ええーーー!?ま、待つてくださいよ佐天さん！気持ちは分かりますけど！すぐ分かりますけど！せつかく来たんですからちよつとはお話ししてみましょーよ！」

「えー……私変態の人はちよつと……」

「それは片方だけです！きつともう一人の方はマトモですつて！ほらほら、よく見れば短パンでばつちりガードしてますし！」

どこか冷めた目でなおも帰ろうとする佐天を、初春は腕を掴んで強引にその場に留まらせる。

必死なせいか気づいてないようだが、今の言葉の中ではさりげなく同僚の事を変態と認めた辺り、隠れた黒さを見せる初春だつた。

その後もぎやあぎやあと口論する二人だつたが、ふいに佐天が動きを止めた。不思議に思った初春もキヨトンとした表情で動きを止めると、佐天は視線で何かを指しながら、

「ねえ初春、あそこに立つてる人つて……」

「はい？」

と初春もつられてファミレスとは逆側に位置する車道をまたいだ歩道を見ると、そこになんというか……不思議な人がいた。

まず目につくのは真紅と言つて差し支えないほど真っ赤な髪、しかも『さつきまでケンカしてました』と自白しているぐらいボロボロな……ローブ？を着ている。次に目が行くのは顔立ちだろう。日本人のそれではなく、ヨーロッパとかそつちの人である事が窺える。そして初春たちが外国人に見慣れていない事を除いても、男か女か判別しにくい容姿。もし女性だとしたら相当の美人と言えるだろう。

さらに注意深く見てみれば、地図のようなモノを広げては辺りを見渡すという行動を繰り返しているのが分かつた。どうやら道に迷っているらしい。

初春がいつもの癖で注意深く観察していると、佐天がひそひそ声で話しかけてきた。

「（……あれってコスプレなのかな？つていうか男？女？）

「（……どうでしょう。とにかく話を聞いてきますね。ただ道に迷つ

ているだけならそれでいいんですけど……』

未だに地図と睨めっこしている話題の人物からはあくまで目を離さずに、初春はポケットから取り出した風紀委員の腕章を腕につけた。

実はこの少女、見た目のかよわさに反して現役の風紀委員なのだ。彼女のようなまだ幼く、強力な能力者でもない学生が風紀委員になるには、様々な試験・書類記入をする以外に『治安維持に貢献する程度の特技』が必要になる。その点、彼女はパソコン関係の技術が優れていたため今こうして風紀委員として活動している訳だ。

そんなちよつとどころか凄すぎるクラスメイトに、佐天は生暖かい目+ホクホク笑顔を装備しながら相手をからかうような口調で、

「……おつ、積極的だねえ初春。いやー、初春が面食いだつたなんてお姉さん知らなかつたなー」

「(……ブツ!?ちつ、違いますよ何の話をしてるんですか!?私は純粹に職務をまつとうしようと……!)」

「(……うんうん分かつてるつて初春。で?具体的にどこに魅かれたの?)」

「(……微塵も分かつてないですよね佐天さん!!)——つて、別にインタビューみたいにマイク出さなくていいですか!っていうかどつから出したんですかそれエエエエエーっ!」

またもやぎやあぎやあ口論タイムに突入する二人。まあ口論と言つても初春が一方的に抗議してそれを佐天が軽く受け流すというモノなのだが……。

と、そんなこんなでお決まりのスカートめぐりに発展していた二人組の少女たちに、突然横合いから声がかかった。

『あの、すみません道教えて——うん聞こえてないね。おーいスカートバサバサしてないで反応してくれないか?あと言う前に謝つとくけど色々見えちゃってるぜそこの女子』

え?とキヨトンとした声を上げて、同時に二人は声がした方向に首を動かす。

そこには、いつの間にやら傍に來ていた例の赤い髪の人気が地図を片

手に立つていて、どことなく呆れた顔で二人を眺めていた。それに気づいた二人はちょっと不安になつて自分たちの体勢を再確認してみる。

「あつ…」

佐天は親友のスカートの端を慌てて離し、どうにかこの変な空気を緩和しようと愛想笑いを浮かべているし、初春に至つては下着を隠すための布をおおいに持ち上げられたショックと見知らぬ人に見られたダブルショックで思考が完全に停止している。

え……、と顔の筋肉が固まつていた初春だが徐々に現実に気づき始めたせいか、火事場の馬鹿力的超パワーが发声器官に自然と集まつて……

「きや、キヤアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアーっ!!」

存分に心の叫びを吐き出した。

ファミレスの外から聞こえてくる悲鳴に、取つ組み合いをしていた御坂美琴みさかみことと白井黒子はその動きを止めて何だろう?と窓に目をやる。

窓越しに広がる見慣れた光景、しかしここからそう遠くない歩道だけはいつもの雰囲気から完全に浮いていた。

具体的に言えば人だかりが出来ていて、ちょっととした騒ぎになつているようだつた。

どことその不良が昼間から熱いハートを肉体言語で語つちやつたのだろうか、と適当に予想をつけていた美琴を尻目に、白井は焦つた調子で席から立ち上がつた。

「今のは……初春ですか!?」

「ういはるつて今日会う予定だつた人よね?え、まさか今の悲鳴つてその子のなの?」

「はつきりとは断言できませんが……。とにかくわたくしは様子を見てきますわ。お姉様はここから動かないで待っていてくださいな」「動くも何も、別に私にそんな気はないわよ。アンタが行くなら心配なさそうだし」

「……そう言つて何度首を突っ込みましたの、お姉様？」

うつ……と渋々引き下がつた美琴を置いて、白井はさつさとヒュン！という独特な音を残して姿を消してしまう。彼女はLevel4の空間移動能力者、自分一人程度の重量ならなんなく跳べる。

一瞬で外に現れて例の人だかりに入つていく白井を横目で見ながら、つまらなそうに美琴はストローに口をつけオレンジジュースを口に含む。

白井の予想通り、本音を言つてしまふと彼女は一緒に行きたかった。常盤台のエースなどと呼ばれている彼女だが、その本質には戦闘を好む面があるのをいなめない性格をしていた。

（くそ、最近はあのバカも捕まらないし公園でそれを超えるバカに会つちやつたせいか不完全燃焼気味だわ……）

ズズズ、と音を立ててオレンジ色の液体を喉に收めながら騒ぎの様子をなんとなく眺めていると、ふと人の壁が動いてファミレスにいる美琴からも騒ぎの中心が見えるようになつた。

まず最初に目についたのは、やはり野次馬たちを散らそうと声を荒げる腕章装備をつけた白井の姿だ。続いて目に留まったのが、花飾りの小柄な少女がスカートを押さえながら同じ年らしきセミロングの少女に文句を言つている様子と、苦笑いを浮かべるそのセミロングの少女。

そして――、

そして、赤。一度見ればそうは忘れられないであろう、鮮烈な赤い髪。その存在は野次馬たちの黒髪・茶髪の中であつても薄れる事を知らなかつた。

あ？と美琴の表情が一変する。どうしてか知らないが、あの赤を見ているととてもムカムカする。なんだか、つい先日散々コケにしてくれた記憶が蘇えつてくるような……。

と、現場に動きがあつた。ここからでは人の壁のせいで赤髪しか見えない人物に白井が詰め寄つたようだ。

『は？痴漢？俺が？いやいや冗談だろ犯人はそこでふくみ笑いしている女の子であつて俺は何もしてな――おつ、おお！聞く耳持たずいきな

り手錠かけられたーっ!?男女差別反対っ!!ほらそんなに疑るなら本人に話を訊いてみる訊いてみる!』

「わわっ、違いますよ白井さん!その人は痴漢じゃないです!私の下着をたまたま見ちゃつただけです!!」

『言い方!お前わざとやつてんのか!?フォローワーどころか冤罪への手助けしてんじゃねエエエエ!!!それとツインテールのお前はもう少し周りに目を向けてみよういるじやんすぐ傍に胡散臭いふくみ笑いしてる子がさ!』

白井の注意が効き始めたのか、野次馬が段々と散っていく。おかげでファミレスにいる美琴からも完全に赤い髪の人物が見えるようになる。

途端、美琴の前髪から攻撃的な電撃が瞬いた。

(ツヽ!アイツは……!!)

間違いない、『アイツ』だ。先日公園で出会つて好き勝手言うだけ言つて颶爽と逃げやがつたアイツだ。この数日、あの会話を思い出しては美琴の気分を害してくれちやつたあの男だ。

あの時の怒りが蘇えつた美琴の全身から、今度は相当強力な電撃が火花を起こす。彼女はバン!と乱暴にテーブルを叩いて立ち上がり、(ア・ン・タは!そこまで下着なのかあああああああああああああああああああああああああああああああああ!)

異変に気付いた店員が「おつお客様ーっ!?」と叫び声を上げるが、すっかりフルスロットルな美琴には届かない。

と、なにか肌寒いモノを感じ取つたのか外の赤髪の方もこちらに気づいたようで、美琴を見た途端『げつ・』と隠そうもせず嫌な顔をした。
超電磁砲『御坂美琴』。魔法使い『神槍トシキ』。
この二人が出会う時、学園都市を舞台としたもう一つの物語が加速する。

レールガン

とある初仕事の後半奮闘（ビーパート）

「ええーっ!?し、神槍さんが新人の風紀委員ジャッジメント!?しかもウチの支部に!？」
『あ、やっぱり同僚さんだつたのか。いやー突然悲鳴を上げられた時は焦つた焦つた』

「それならそうともつと早くおっしゃつてくださいな。あやうく誤認逮捕しそうでしたの」

『いや俺何よりも早くそう言つた筈なんすけど!?!』

今日も今日とて科学の街は騒がしい。

目を見開く初春の前でひらひらと手に持つた風紀委員の腕章を揺らす神槍。その傍では安易に騒ぎになるような事をするなど白井から注意を受ける真犯人…もとい佐天の姿も見える。

あの後、痴漢に間違われた神槍は自分が風紀委員でありただ道を訊きたかつただけだと説明をして、証拠品として腕章まで取り出してやつと誤解だと分かつてもらえた。今ではもう、すっかり互いの自己紹介を終えて親しげに話せる仲だ。

つい数分前まで「捕まる捕まえる」の関係だつたとはとても思えない。

なんかもう、そこら辺の経験値はカンストしてる魔法使いだつた。知らずの知らずの内に常識の線引きが破城している事に気づいていない神槍の前で、初春は口元に指を持つてきて不思議そうに呟く。「でもこの時期に新人さんが来るなんて珍しいですねー。普通は春か秋の研修期間が終わつたと同時、つていうのがセオリーなんですけど」

「まあ何にせよ良かつたですの。前から人手不足は感じていましたから。——はあ、ホントに助かりましたのこれで固法先輩の小言の的が増えたわたくしの負担も……」

『ん?なんか言つたか?』

『いいえ何も?ほ、ホホホ……どぎこちなく返事を返す白井に首をかしげる。なんだろうこの売られた感は、とさらに小首を傾げる神槍に突然横合いから声が飛んできた。

「——つて、私を差し置いてナ二人脈広げてんのよこの変態が!!」

訂正。声じやなくて電撃が飛んできた。

ジリイいいいい!!と危ない音を発するそれを右手に展開した魔法障壁で軽く流した神槍は、出どころの少女の方へ振り向きながら心底迷惑そうな声音で、

『お前なあ、電撃飛ばす以外にコミュニケーション方法がないのかよ？』

「うつさい！いいから私と勝負しなさい！コテンパンにしてやるから!!」

何故だか顔を真っ赤にして怒れる美琴嬢に、逆説的に神槍はより一層テンションを落とした。これで美琴と会うのは二回目の筈だが、どうしていつも怒つてらつしやるんだろうと割と本気で考えてみると答えは見つからない（※短パンです）。

とりあえずオトナな神槍はステキな対応をしてみる。

『待てつて御坂。勝負とか以前にお前はこんなトコで戦う氣か？少しは周りの迷惑も考えろつての』

「うつ……。つ、大体私をムカつかせるアンタが悪いんでしようが！」

真っ直ぐな正論に捻じ曲がった自論を返した美琴は、様子を見る限り引き下がる気はないようだ。神槍は肩を落としやや呆れた口調で嘆息する。

そんな不毛な争いを察してくれたのか、白井が仲裁に入った。

「まあまあお姉様。先日からずつと楽しそうにお話に出ていた殿方と会つて嬉しいのは分かりますが、ここは一つ抑えてくださいまし」「ゴフッ!?がつ、は——なつ、なな何言つてんのよ黒子つ、私は別に嬉しいなんかないつづーの！」

「あ～ら～？そんなに必死に否定なさつて、ますます怪しいですわね——はっ!?まさか既にそういう関係つて事ですかの!?この黒子がいながら……あんまりですのよお姉様!!」

「ア・ン・タ・はこんな女々しい奴が私の彼氏に見えんのかコオラ!!」ヒステリックに取り乱す白井に噛み付く勢いで叫び返し、あろう事か電撃を浴びせる美琴。しかし白井は痛がるどころか嬌声を上げる

始末だ。

そんな二人を見て神槍と初春、そして佐天はごく普通に同じ事を考えていた。

ああやつぱり、ガールズなラブそつちの人たちなのかな——と。

ひと通り怒りは収まつたのか白井への電撃飛ばしを終えた美琴が顔を上げると、どうしてかさつきより遠い位置に三人がいる事に気づいた。

「まつたくアンタはいつもいつも——？ちょっと、ナニ微妙に距離取つてんのよそこの三人」

声をかけられた三人の肩が同時にビックウ!!と大きくはねる。三人はどこかよそよそしい態度で話し出した。

『い、いや？別に？なあ初春？』

「え、ええ。そうですよ、み、御坂さん、何でもありませんよ？」

「う、うん。何でもない何でもない、ホントに何でもないですつてば！」

「何でもない訳ないでしようが。目は泳ぎっぱなしだし、顔色も変じやない」

『いや……そういう趣味持つてる人はちょっと……なあ？』

言葉の意味が理解できずしばらくキヨトンとした表情をしていた美琴だったが、自分と白井の状態を何度も見比べる内にその意味がようやく分かった。

(もしかしなくても私……百合だと思われてる!?)

途端、美琴は顔を真っ赤にして弁解に舌を走らせる。

「なつ!? ちつ違うわよバカ! いや黒子はそうかもしけないけど! 私は違うつて!——だから距離を取るなア!!」

『あー、うん。分かつた分かつたつて。だから、な? 無理すんなよ』

「分かつたならこつち来いや! ほらほら、もつとこつち! こつち来る!!」

そうは言われても、一度起きたすれば違いはそう簡単には戻れないのだ。美琴が手で『こつちこつち!』とジエスチャードを送る度に、逆に三人はササッと離れていく。

結局、誤解を解くのにもう何十分か要した美琴だった。

「うわあ～、すつい人」

道すがらに通りかかった広場にいる大勢の人影を見て、佐天は目を丸くして言つた。

誤解を解いた後の美琴の提案によりゲームセンターに向かつていた神槍たちだが、その珍しい光景にふと足を止めた。別に人が大勢いる事など日常茶飯事だが、今回は少し事情が違う。

「なんでこんなに小っちゃい子が……」

思わずと言つた調子で初春の口から洩れた言葉に、皆も頷く。彼女の言う通り目の前に広がる人々の内、約半数以上がまだ小学校の低学年といつた背丈をしていた。

学生の街などと呼ばれている学園都市だが、年齢などによつて学区ごとに住み分けが図られている。大学生なら第六学区、美琴たちのような中学生・高校生などはここ第七学区。そして目の前で無邪気に走り回っている子たちのような小学生は第十三学区と、丁寧に分けられているのだ。

なので、治安的な問題により第十三学区から基本的に出ない小学生（教員比率の社会見学などは別。しかしそれも高学年からの話であり今のようなケースはやはり稀）がこれほど大人数、しかも同時に第七学区に来ているのは珍しかつた。少なくとも学園都市新参者の神槍が小学生を見るのは初めてなくらいには。

しかしその疑問も広場の中心辺りから聞こえてきたバスガイド風な容貌の女性の声で解決した。

「休憩は一時間ですー！あまり遠くには行かないでくださいねー！」

「何よ、ただの『勧誘』じゃない。さつ、早くゲーセン行きましょ」
勧誘——それは簡単に言つてしまえば学園都市に入学して下さい、という宣伝である。

定期的にこうして『外』から幼い少年少女を招き入れ、子供が好きなようなロボットなどを目に焼き付けさせて学園都市の学生になつてもらおうという魂胆丸出しの手法である。けれどこれが効果抜群と

言うのだから、世の中意外と単純だ。

なるほど、それなら第七学区に大勢の子供たちがいても不思議じやないと自己完結した神槍たちは先に歩き出した美琴を追うように歩を進めようとして……また足を止める。

足を中途半端に出しかけた格好で立ち止まっている美琴に気づいたからだ。その視線は広場に止まっている車を改造したクレープ屋台に硬く固定されていた。ふと気になり、他の四人もクレープ屋台に目を向ける。

子供たちのおかげで大繁盛なのか、広場を横断するような形で長い列が出来上がっている。しかしそれだけで、別段立ち止まるほどの事は確認できない。

不思議に思つた神槍は素直に尋ねる。

『御坂？ 何見てんだ？』

「へ？——な、なんでもないわよ。早く行くわよ」

「あつ。あのクレープ屋さん、オマケにゲコ太ストラップっていうのを配つてるらしいですよ？」

初春の言葉に、美琴の肩がビックウ!!と震える。

その様子に気づいた神槍は試しに訊いてみた。

『ひよつとしてあのストラップが欲しいのか？』

「な、何言つてんのよ。私は別にゲコ太なんか……だ、だつてカエルよ？ 両生類よ？ どこの世界にこんなのが貰つて喜ぶ中学生が居——」

なんだか妙に言い訳がましい美琴のセリフは、初春と佐天の「あつ」という声に遮られる。見れば、二人の視線が美琴の学生カバンら辺で固定されていた。つられて神槍もそちらを見ると、ちやつかりカバンの端からゲコ太ストラップなるものがこんにちはしていた。

あ…あ…と羞恥に震える美琴を見て、全てを察した神槍は苦笑しながら言つた。

『居たな、すげえ身近に』

「う、うううつさいわね！ アンタには関係ないでしようが！」

『そんな怒るなよ。ほら、早く並ばないと売り切れになっちゃうぜ？』

『え…？』

キヨトンとした表情で聞き返す美琴にじれったくなつたのか、神槍は彼女の手を取つて強引にでも列の方へ連れていく。

「え、え、はあ!? ちよ、いきなり何すんのよ!?

『いいからいいから。さつさと並んでゲコ……ゲコ丸? まああのストラップゲットしてゲーセン行くんだろ?』

「ゲコ太だつつの!」

そこだけは譲れないのかきちんと訂正する美琴だが、結局手を振りほどこうとはせずそのまま大人しく列に加わる。周りの自分よりずっと小さい子に注目されて恥ずかしいのかぶいつと顔を逸らしつつ「ま、まあアンタがそこまで言うなら付き合つてあげるわよ…」というツンデレ奥義を炸裂された。

はいはい御坂さんは付き添いですねそうですねー、と素直になれない妹を世話する兄のような心境で笑う神槍を、遠目に見ていた他の女子三人はやや呆然とその様子に見入つている。

「お、おつねえさまの手を握つて…握つて! やはりお二方はそういうご関係なのですわねッ!」

ヒステリックなこの人は置いておくとして。思春期全開のお年頃な初春と佐天は目を輝かせながら、

「あ、あれが英國紳士つて言うんでしようか佐天さん!?

「いやー。あれはどつちかつて言うと天然ジゴロつて言うんじゃ…: うわ笑顔が眩しつ!」

本気なのか冗談なのか—おそらく両方だ—一人の女子トークは白井が「先にベンチを確保しますわよ」と声をかけるまで続いたらしい。

「お待たせしましたー。はいどうぞ、最後の一箇ですよ?」

『どうも——つて最後?』

やつとこさ列が進み注文も終えた神槍はクレープを受け取る。そして目的であるストラップも貰つたまでは良かつたのだが、店員さんの営業スマイルから放たれた一言により固まる。

(最後の一個つて事は……)

ドサッ。背後から何かが崩れ落ちるような音が聞こえた。

わざわざ確認するまでもなく想像できてしまつた自分に嫌気を覚えつつ、意を決して渋々振り返る。

やはりそこには頭を垂れて地面に座り込みドヨーンとしたオーラを纏つた美琴嬢の姿があつた。

いやそこまで欲しかったんかい、という出かかつた言葉を飲み下しながら神槍はゲコ太を乗せた手を彼女に差し出す。

『ほらよ、元々お前が欲しくて並んだんだろうが』

え？とゆっくり頭を上げて差し出されたゲコ太と神槍の顔を何度も見往復する美琴を見て、ふと悪戯心が働いた神槍はゲコ太を乗せている己の手を右、左と動かしてみた。すると美琴の顔も面白いほど同じように右、左へと追いかけるように動く。まるで猫じゃらしを追いかける子猫のような仕草だつた。

『（何この子可愛い……）』

ややあつて、

「……だーもうくれるのかくれないのかはつきりしなさいよ！」

『え？——ああ、やるやる。こんなのは持つても仕方ないし』

思わずそのまま数分間からかい続けてしまつた神槍は、すっかり回復した美琴にゲコ太とクレープを渡して白井たちが確保していたらしきベンチに向かう。と、その途中で何が引き金だったのか美琴の口からマシンガントークが発射されてしまう。

「こんなのがて言うな！いい！そもそもゲコ太はケロヨンの隣に住んでいるおじさんで乗り物に弱くてゲコゲコしちゃうからゲコ太って（r y）

あーハイさいですか…と適当に右から左に聞き流しつつ、待ち組の女子三人にクレープを手渡して自分もベンチに腰を下ろす。ちょうど木陰なせいか列に並んでいた時より数段涼しい気がした。

パクツと一口ほうばつた所で、さつきまで白井とクレープ片手に攻防を繰り返していた美琴がズイッと自分のクレープ（バナナチョコ味）を差し出してきた。

無言でそっぽを向いている所がやけにデンジャラス。

『えつと……御坂、さん？』

「つ……あーもう察しなさいよ！お礼よお・れ・い！ゲコ太のね！」

『いやお礼されるほど大した事やつてないし。自分で食えよ』

「それじゃ私の気が取まらないでしようが！いいから食べなさいよ

！』

『だからいらな』

「食・べ・ろ♪」

……はい、と神槍は渋々顔を前に出してパクッと一口だけ貰う。なんだろうこのやり取り、激しいデジヤヴを感じる……。

しばしそのまま「おつ、おおおおお姉様との間接キツス h s h s !」とか叫んでいる白井を眺めながらクレープの殲滅にかかる一行だったが、その平穏は一瞬にして破られる事になる。

きつかけは初春の何気ない言葉からだつた。

「んー？」

「どうしたの初春？」

「いえ。大した事じやないんですけど……あのショベルカー、なんで輸送車の荷台にも乗らないでそのまま道路を猛スピードで走つてるんでしょうが？」

「「『は？』」」とマヌケにも五人同時にキヨトンとした声を出してしまう。

どうにも追いかけてこない脳に反比例して首と目は的確に初春が指さすそこへ向けられる。

そこには、確かに、建設重機の一つであるショベルカーがアスファルトの道路を爆走していた。思考が妙なベクトルに働いてキヤタピラでの速度を出すのは不可能だと思ったが、そこは学園都市だから、という一言で決着だろう。この街で科学だと機械関係でいちいち疑問に囚われていたらキリがない。

兎にも角にも、呆然とその光景に見入る一同を置き去りにしてショベルカーはそのまま爆走を続け……続けて、

コンビニのガラス張りの壁に頭から突っ込み、中にあるATMをズガガガガガッ!!と無駄に豪快な音を立てながら丸ごとかつさらつた。静まり返る広場に構わず、ATMに備え付けてある耐震補強具十盗

難防止用固定具などを力技で突破したショベルカーは、そのショベルでATMを引つ掴んだまま道を曲がりその姿を消す。

えー……という声がどこからか聞こえた。普通なら子供がたくさんいる見ていてる中で行われた危険な犯罪行為の筈なのだが、あまりの強引かつバカっぽいやり方に風紀委員である白井と初春の思考は完全停止を帰していた。

しばらくして、やはり静まり返っている空気の中、ちゃっかりクレープを食べ終わった神槍はポツリと問いかける。

『……なあ、学園都市の犯罪って全部あんな感じなの？俺的にはもつとこう、高度な電子戦みたいのを期待してたんですけど…』

「いえ……あんな類人猿でも出来そうな犯罪を見たのは初めてですの…。そういうスキルアウトの話は聞いていましたがまさか実在するとは…ええー」

我ながら信じられないのか、口の端をひくひくさせる白井。しかしその手は体に馴染みこませた動き……腕章を腕につける。

それからの仕事つぶりは流石だつた。

「初春！アンチスキル警備員への連絡と怪我人の有無の確認を！急いでくださいなっ！」

「はっ、はい！」と初春も腕章を身につけ、いつも持ち歩いている端末をセットして連絡などを図る。

と、ここで美琴が口を挟んだ。

「黒子！私も——」

「いけませんわお姉様、学園都市の治安維持はわたくし達風紀委員のお仕事。今度こそお行儀よくしていてくださいな？」

それだけ言うと、白井はベンチを飛び越えて車道に出る。おそらく空間移動でショベルカーを追跡するつもりだろう。一秒間に約288キロメートルもの距離をショートカットできる彼女ならばそれでも可能だ。そんな後輩を見て諦めがついたのか、美琴も「分かったわ」と渋々頷いた。

自分が姉と慕うその人物が頷くのをきつちり見届けた白井は、すぐに空間移動しようとして——ふと思い出した。

「そうでしたの。神槍さん？貴方は新人なのですから今回は待機して
——あら？」

そこまで言つておいて、白井は首を傾げる。

いない。ついさっきまでベンチでクレープをパクついていた筈の
神槍の姿が、どこにもない。

「う、初春？」

「わ、私も知りませんよ！そんな……ついさっきまでそこに居たのに

⋮

本気で知らないらしい初春の次に佐天、美琴と訊いてみたが、誰も
見ていないと言つた。

どこ行きやがつたあの泥棒猫、とすぐに犯人を追わなければならな
い白井にイライラが募っていく。

と、不意にさつきのクレープ屋の店員の一人が風紀委員の腕章を見
てこちらへ声をかけてきた。

「あ、あの……」

はい？と聞き返すと、店員は困ったような表情を浮かべて続けた。
「さつき赤い髪の風紀委員の人に頼まれて、掃除用の
箒を貸したんですけど……。いつ、返して貰えるんですかね？」

箒？と一斉に首をかしげる女子四人。されど答えは振つてこない。
ベチャつと、いつの間にか溶けてしまつた誰かのクレープのク
リームが、地面に零れ落ちた。

東京西部を切り開いて作られた学園都市を、一台のステーションワ
ゴンが走り抜ける。乗っているのは三人の少年。駒場利徳こまばりとく、半蔵はんぞう、そ
して浜面仕上はまづらしあげ。

彼らはスキルアウトと呼ばれる、一種の不良集団に所属している。
ハンドルを握っている浜面は、どう見ても運転免許を採れる年齢と
は思えない。しかしそんな事など気にも留まらないほどのルール違
反が後部座席に収まっていた。重機で拾つたATMが丸ごと車内に
転がっているのだ、もう運転手の年齢など霞んで気にもならない。
ショベルカーを盗難しそれを使つてさらにATMを盗難して極め

付けに今乗っているステーションワゴンも盗難した張本人、浜面が運転するワゴンは風力発電のプロペラが並ぶ道路を勢いよく走り抜け、青空を漂う飛行船の下を潜り抜けて行く。

相も変わらず、車内はお祭りモードだつた。

「これで当面ウハウハだな！」という浜面と半蔵の二人のバカ笑いが車内に響きわたる。

何しろ後部座席にあるボロボロ ATMの中には二千万という大金が入つてゐるのだ。もう笑いが止まらない。

「ガハハ！ わざわざあの巨乳警備員が非番の日を狙つた甲斐があつたなあ！ 楽勝じやん！！」

「……浜面、GPS発信機はどうした……？」

「モチのロン、さつきのショベルカーにプレゼントしといた。あとは金庫の蛍光塗料のトラップを始末すれば終わりって訳」

やつぱ最高だわお前一つ！ と浜面の背中をバンバン叩く半蔵。満更ではない浜面の顔もより一層得意げな表情になつていく。

彼らは半年ほど前にも同じような手段で ATM強奪を試みたがどある女性の警備員により未遂に終わらされていた。その屈辱を忘れずに、彼らは無駄な情熱と世間に迷惑な決意を懸けて今ここにリベンジを果たしたのだった。

——気づいてないのだろうかこの少年たちは。例の警備員が非番の日を狙つた時点で一番大事な何かが負けている事に。

そんな事考えもしない三人はこのままウキウキ気分で隠れ家に帰ろうと、ステーションワゴンをさらに走らせる。

しかし、
けれど、
正義の味方はやつぱり強かつた。

——コンコン、と運転席側の窓から音がした。まるでノックされているような響き方。おかしい、今現在この車は時速八〇キロで移動中の筈なのに。

なにかゴミでも当たつたのか？ と前を向いていた浜面は何気なくそちらを見やる。

そこに、

こちらに向けて花も恥じらう美笑を送つてくる赤髪外人美少女の顔があつた。

はあ!?と浜面の顔面が一気に青ざめた。残りの二人も言語を忘れてしまつたかのように固まつてしまふ。

繰り返すようだが、今浜面たちは高速を走る車並みの猛スピードで移動している。なのに窓越しの外人少女は今こうしている間も車外に張り付いているようにそこにいるのだ、不気味にもほどがある。

(くつそ——ツ！発電系の能力でくつづいてやがんのか!?)

アクセルを底まで踏みながら、浜面は視線を少女の顔からやや下へ下げる。磁力か何かで車体に貼りついていると思つたのだ。

しかし、違つた。

——飛んでいる。

、その少女は爆走するワゴンのすぐ隣を滑空していた。

なつ……!?と今度こそ浜面の喉が干上がる。後部座席にいる駒場からは、ローブまで着てている少女が簫にまたがつてているのをダイレクトに見る事が出来たが、やはり信じられない表情で硬くなるばかりだ。「おい駒場さんよ!こういう時つてどうすりやいいんだ!?

「……さ、さあ……?」

さあじやねーっ!と浜面は思い切り叫んだ。その間も外の不思議少女はコンコンとまた窓をノックし、その口元をゆつくりと動かす。柔らかそうな桜色の唇の動きから、浜面は確かに少女がこう言つていると確信した。

と め ろ。 ジ ゃ な い と ゴ う い ん に で も
と め る ぞ?

マズイ!なんだか分からぬけどとてつもなくマズイ気がする!と狼狽える浜面は、最後の希望を託して隣に座つている頼れる相棒。半蔵へと視線を移す。

自称忍者という怪しそうな彼だが、戦闘面に関しては無能力者の中でもトップクラスの実力者で意外と頼りになる事を浜面は知つてい

た。

そんな最後の希望を託され期待を一手に背負う本人は、どこか驚愕の事実に気づいてしまつたみたいな表情で、

「浜面。やべえ、俺……」

「あきらめるな！まだ方法はある！たとえ無くとも俺が見つけ出してやる！」

「恋しちゃつたかも」

ええーっ!?と浜面は思わずハンドル操作も忘れて、隣にいる窓越しの少女をぼーっと見つめる半蔵を凝視してしまう。吊り橋効果にも程があるわ！とツッコみたいが、目の前の男の目がマジなのを見て自重する。

（だめだこいつ、早くなんとかしねえと……！）

「な、なあ浜面。あの子年下かな？やっぱそうかな？あっちやー、俺年上が好みなんだけど……まいつか。うん、この際なんでもいいやえへへ」

「あっちやーはお前だよ！おい半蔵っ、頼むからニヤニヤしてねえで正気に戻れ！今は美少女と言えど構つている暇は——ん？」

そこまで言つて、浜面は右半身が妙に肌寒い事に気がついた。
……なんていうか、とてもなく嫌な予感をひしひしと感じつつ、ギチギチと。浜面は右側、箒少女がいる方へゆっくりと振り返る。するとあら不思議、いつ触ったのか窓のスライドボタンがONになつており、唯一の防御壁だった強化ガラスは隙間へ収まつていて速度の関係による強風が車内に流れ込んでいた。これが浜面の寒さの原因だつた。

詰まる所、今の会話は全部筒抜けだつたのだ。浜面の叫び声も。半蔵のニヤニヤ台詞も。

そして、浜面の『美少女』という言葉もすべて。女顔がコンプレックスでそれに触れられると激昂する魔法使いの『少年』の耳に届いていた。

「えーと、その」

ニツコリ♪という効果音が合いそうな美しい笑顔——しかし目はまつたく笑つていなむしろ据わつていて——で固まつていてる神槍に、何かを察した浜面はもうなんか泣きそうな顔で必死に助けをこ

『わつ、わわ分かつた止める今すぐ止めるから助け——
サギタ・マギカル・キス
魔法の射手・光の400矢ツツツ!!!』

二転、三転と横転した浜面たちを乗せたステーションワゴンはドンガラガツシャーンッ!!と面白い音を立ててガードレールと熱いキスを交わした。

虚空爆破編

とある事件の前兆活劇（ビフォーオーブル）

学園都市。

東京都西部に位置する科学の街の一角、そこにある何の変哲もないコンビニに押し入つてくるなり、一人の女子高校生らしき学生は緊迫した声を上げた。

「風紀委員です！この場から早急に避難してください！」

店内にいた客が一斉に固まるのも構わず、声を上げた女子学生の後ろから緑色の腕章を腕につけた風紀委員たちがゾロゾロ店の中へ入つてくる。彼らはすぐさま避難誘導のために声を飛ばし始めた。混乱のせいか互いに混乱した顔を見合わせる客たち。

性別も年齢もバラバラな風紀委員達だがその表情が一様に真剣でとびきり硬いのを見て、固まっていた客も何かを感じたのか我先にと外に続くドアへ走り寄せる。数分も経たぬ内に人気のなくなる店内に、慌ただしい風紀委員らの声だけが響く。

そこまで来てやつと、店主らしき中年の男性は未知への恐怖で震える喉を叱咤して声を出す事ができた。

「あ、あの……ウチの店で何か……？」

最初に声を出した女子学生が凜とした声で応じる。

「この付近でグラビトンの爆発的な加速が観測されました。その為、私達は風紀委員の権限を用いて一時的な避難処置を取つて居る最中です、どうかご協力ください」

「グラビトン？」

「重力子……」風紀委員の女子学生は片手に提げた透明軽盾を焦つているように揺らしながら、

「簡単に言うと爆弾が爆発する前兆があつたという事です。この店に爆弾が仕掛けられたと思われます。捜索を急いでいますが爆発する可能性もありますので、さああなたも避難を」
爆だ：つ!?と店主の喉が一瞬で干上がる。指示を飛ばす目の前の

女子学生の声がやけに遠い氣がする。

ここは危険だと言われているのは分かるが、どうにも足が動かない。まるで恐怖に邪魔されて脳が上手く機能しないような感覚が全身を支配していた。

一方その頃、引きつった表情で立ちすくむ店主の姿により一層焦りを募らせながらも、他に残っている人がいなか店内を走り回つてゐる風紀委員の少年がいた。

障害物となる陳列されている商品をうつとおしく感じながらまだ確認していなかつた通路に顔を出す。

と、販売棚のせいで死角になる所で床に座り込んでいる女子が視界に飛び込んできた。

「どうした!? すぐに避難を」

「すみません、でも足が……」

注意して見てみれば、女子は座り込みながら片足の足首ら辺を弱弱しく擦つていた。どうやら逃げる途中で捻つてしまつたらしい。

風紀委員の少年は思うように進まぬ避難誘導に心臓を驚撃みにされているような焦りを覚えつつ、少女に肩を貸して急いで避難させようとする。

その――瞬間、

不意に、

ブン、という羽虫が耳のすぐ傍を横切つた時のような不快な音が彼の耳を撫でる。

風紀委員の少年は音の発生元と思われる販売棚……の下に目をやる。

人目が届きにくい死角にポンと置かれたウサギを模したぬいぐるみ。綿と布でしかない筈のその体が、不自然にグニャグニヤにひしゃげ、メキ…メキ…という金属が押しつぶされているような音を發している事に気づく。

その様は悪寒がするほど、事前に目を通していた資料にあつた爆発まじかの爆弾の動きに酷似していた。

「な、に!? これが……爆弾!!」

目を見開く風紀委員の少年。それでも驚愕と恐怖に縛られた体にムチ打つて、咄嗟に少女を庇う恰好で爆弾に背を向けれたのは日頃の訓練の賜物だろう。

刹那、

轟おおオオオオオオオオオツ!!という爆発音が何もかもを呑み込み、爆炎が風紀委員の少年の背中を容赦なく覆い隠した。

「——くつ！間に合わなかつたか……」

店主に避難を進めていた風紀委員の女子学生は吐き捨てるように咳いた。

強引に伏せさせた店主と自分の前に突き出した透明軽盾に、爆風とそれによつて巻き上げられた商品だつたモノがガツガツぶつかる。粉塵が店内に舞い上がり、彼女の視界を霧のように白く染め上げた。爆風がある程度収まつたのを皮切りに、彼女は不要となつた盾を放り投げ怪我人がいないか確認に走る。爆発の直前、爆心地近くで同僚と一般人の少女の姿を見ていたのだ。

「つ——大丈夫ですか？怪我は？」

予想は憎らしいほど的中した。汚い床にペタンと力なく座り込んでいる少女へ急ぎ駆け寄る。

粉塵と軽い火傷で汚れているその少女は、呆然とした、それでいて今にも泣き出しそうな表情で震えた声で答える。その視線を、床に転がつている人間くらいの大きさの物体に向けたまま。

「……わ、私は。この人が庇ってくれた、から……で、も——」

「ツ！」

その物体を目で捉えた風紀委員の女子学生の顔が苦しそうに歪む。力なく床に投げだされた手足に、ボロボロで爆風を直接浴びたせいか黒くなつた腕章。見るのもつらい、赤く紅く腫れ上がつた背中、対するように見え隠れするピンク色のプニプニしたそれ……重度の火傷だ。

「あ……ぐつ……ツ」

その口から低く、しかし確かにうめき声が漏れた。その声を搔き消すように、風紀委員の女子学生が救急車を呼ぶ声が続く。

これが、連続虚空爆破事件^{グラビトン}。最新にして最大の被害となつた爆破事件の一連であつた。

「——とまあ、以上が昨日の夕方に起こつた事件ですの」

数週間前から発生し続け、しかも回数を重ねるごとにその威力・規模を増大させている連続虚空爆破事件。その事件の粗方の説明をし終えた白井黒子は、疲れ切つた喉を休ませながら自分と同僚のいる支部をふと見渡してみる。

風紀委員第177支部。

それが白井が所属する支部の名だ。柵川中学の末端に位置し、第七学区の治安維持（と言つても本来の風紀委員は校内活動が主である）を担当する。支部などと銘打つても、四つのデスクと決して大きいとは言えないソファードで窮屈だと感じてしまうぐらいの空間と小さな仮眠室しかないこの部屋だ、文字通り首を一周させれば完全に見渡す事ができた。

「ひえー。風紀委員から9人も怪我人が出てるじゃないですか。うわあこの人なんか全治二週間……溜まつた宿題大変そう……」

などとパソコンの画面に映し出された被害者情報を見て明後日の咳きをしている少女の名は、初春飾利。頭に大量の花飾りを付けている事から、風紀委員仲間から密かに『歩く花瓶』と呼ばれている彼女のその反応に、白井は呆れた調子で、

「9人も怪我人が出ているからこうしてこちらの支部にも警戒が出たのでしょうか？それに、そのおかげで民間人からは今話した女子学生しか被害者は出てないんです。幸い、怪我も命には別状はないようですし」

『ん、風紀委員から9人も被害者が出てるのに民間人は一人だけ？なんかおかしくね、それ？』

と横合いから口を突っ込んできた女子にしてはやや低めの声——いや男子にしては高めの声に、白井と初春はキツチンの方を向く。我ながら狭いこの支部だが、申し訳程度に調理スペースが備え付けられている。

そんな小っこいキッ chin に、ピンク色の簡素なエプロンと水玉模様のバンダナを何の抵抗も示さずに装備した少年が立っていた。肩口まで伸ばした真っ赤な髪をひと塊に結っている髪型に、病的なまでに白い肌、そして東洋のそれとはかけ離れた線の細い顔立ち。神槍トシキその人だ。

その細い手にはフライパン・包丁などの調理用具が握られており、絶えず動き続いている。誰がどう見ても料理している格好だった。

ピンクのエプロンを着ても何の違和感もないって……と、はんぱ呆れた呟きを女子二人は心の中でこつそり零す。神槍に少しでも『女っぽい』的な感想を抱いたのを知られたら大変な事になる、その事を二人はこの数日でたっぷり理解した否させられた主に肉体言語で。

さつきの呟きがバレてないか、内心ビクビクしながら白井は彼の問い合わせに答える。

「そ、それは、それだけ大勢の風紀委員が体を張つて一般人を守つたという事です。誇らしい事ではありませんか」

『そうか？ふーん……』と歯切れの悪い返事をした彼だが、手元の食材の様子を見て『おっ、できたできた』と顔を明るくし、盛り付け用の皿を取り出していく。

途端、初春は物凄い速度でパソコンや広げていた資料を片付け、デスクの上に皿が置ける程度のスペースを確保した。どこから出したのか両手にナイフとスプーンも持っている。

「えへへ～」と涎をすすっている辺り、ごちそうになる気満々であるこの女。

「……初春？あなたといい加減に胃袋を掌握されている事に気づきなさいな」

「そう言いながら机の上片づけてる白井さんには言われたくないですよー。……これを見越してお昼を控えめにしてたみたいだし。はあ／＼やっぱりお嬢様は体重維持に気を使うんですねー？」

「なつー、これはたまたま……そうたまたま片付ける気になつただけですよー！それと体重に関しては口にするなア！」

ムキになつて言い返している白井を尻目に、ホクホクと湯気を上げ

る料理片手にデスクに近づく神槍。次々と白井と初春、自分のデスクに皿を乗せていく。

キツチンとデスクを何往復かした後、神槍も自分のデスクの席についた。その頃には三人の前には淑女の敵、もとい美味しそうな色とりどりな料理の数々が並べられていた。

神槍は頭に巻いたバンダナを取りながら言う。

『えつと、右からヨークシャー・パディングのブレッドソース包み、フィッシュ・アンドチップス、生サラダ・サラダソースかけ。デザートはカスタードパディング、まあプリンだな。はいじゃあいただき！』

』

「ぬおおおおおおこの魚フライうまあっ！なんて魚ですかこれむぐもぐむしやむしや！」

「こつ、これは…！乙女の敵ですわね！」

『……うん、お前らはまず作り手に感謝する事から覚えようかコノヤロー』

ます、と言い終える前に勝手に食べ始めている女子二人に冷たい一言をきつちり放つてから、嘆息していた神槍も食べ始める。

フィッシュ・アンドチップス（初春いわく魚フライ）を神槍が呑み下した所で、ふと初春が疑問を口にした。

「あのー、何で神槍さんってたまに支部でご飯吃るんですか？わざわざ材料買ってきて料理してまで」

『い、いや、それは、……だつて家にはつまみ食い大魔王が…』
「はい？ だいまおう？』

聞き返してくる初春に『な、何でもない』と返して、これ以上追及されないように慌てて魚フライ…フィッシュ・アンドチップスを口に投入する。しかし計算以上にサイズが暴れん坊だつたため、喉に詰まり『ゴつ、ゴフッ？！い、息できなつ、み、水…』と涙目で助けをこう始末だ。

とても世界を二分する両サイドにまたがる超不思議魔法ツ子少年には見えない。というか中学一年生の初春と白井からすれば年上にも見えない。

んー!!と本気で苦しがつてている神槍に水入りのコップを手渡した白井は、不意に思い出したことと初春に訊いた。

「そりいえば、明日どこかに出かけるとか言つてましたわね」

「はいっ! 佐天と、それに御坂さんも一緒にセブンスミストにお買い物に行くんですよ。あ、良かつたら白井さんもどうです?」

「残念ながらノーですの。風紀委員の仕事を放つておく訳にもいきませんし。お姉様にも誘われたのですけれど……お姉様にも! 誘われたのですけれど」

「わー。お姉様を強調した辺り絶対未練たらたらですよこの人ー」

うるさい、と一刀両断してプロ顔負けの技術で盛り付けられた料理にフォークという名の侵略を再開させる白井。

ザクツ、という三つの突起がポテトを貫通する音がやけに生々しく耳に残った。

学園都市第七学区某所にある学生寮の一室にて。

支部からここ、上条当麻宅に帰還した神槍トシキは『うだー』と床に寝転びながら、かじりつくようにテレビを見ている少女の後ろ姿をぼんやり眺めていた。

少女の名前はインデックス。明らかに偽名だが、本名は本人も知らないと言うのだから仕方ない。

少女は白い肌、銀の長髪、緑の瞳という外国人ボディを誇っている。風呂上りなため今こそは水玉模様の簡素なパジャマを着ていて、普段は修道服なんていう超外国グッズを身につけているせいで外国の匂いをまき散らしているアイデンティティ重視のシスターさんだ。

そんなシスターさんはテレビにかじりついてフンフン頷いていた。

ちなみに、画面に映っているのは架空の魔法少女の大活躍だった。「なるほど、この超機動少女カナミンは普段は学生になります事でローマ政教が誇る魔女狩り十字軍の目をごまかしているんだね。しかしあの虹色に光るステッキは一体——ハツ! 五大要素における第五呪具『蓮の杖』をプラスチックで再現しているという事だね! むむ、流石は神秘の国ジャパン。素晴らしいかなジャパンニーズスタイルな

んだよ」

うーんおそらく全部間違つてるけど楽しそうだからいつか、とツツコみを全放棄したりアル魔法使いの少年は、ゆっくりと脱力した様子で上体を起こす。

すると今までインデックスの体に重なつて見えなかつたテレビの画面が直視できるようになつた。箱の中のカナミンさんは相変わらず大袈裟な効果音とキラキラエフェクトを振りまきながらニッコリ笑顔で敵を爆散させていた。

（笑顔で極大呪文級の魔法ぶつ放すとか……やるなあカナミン）

ふあーと思わず出てきたあくびを噛み殺して、神槍はコトンと銀色の髪に包まれているインデックスの頭に顎を乗せた。それだけではなく、膝の上にある彼女の体をズリ落ちないように自分の方へグイッと引き寄せる。

——お気づきだろうか。（幽霊写真ボイス）

そう。今もテレビに夢中なインデックスは当たり前のようく神槍の膝の上に居座つており、その小柄な体はすっぽりと後ろの方から彼に包まれていた。そんな状況でもカナミンさんへの集中力が途切れていらない事から、もう随分と慣れているように見て取れる。

これは別に、彼らが恋人になつたとかお兄ちゃんプレイを楽しんでいるとかそういう爛れた事ではない。普通に、テレビの前を陣取る癖があるインデックスと自分もテレビを見たい神槍が編み出した独自のテレビ視聴フォームという事だけである。

他意はない。たぶん。

と、インデックスの頭の上でウトウトしていた神槍の睡眠を害するようく、寮部屋のドアがガタンと安っぽい音を立てて開いた。

入ってきたのはこの部屋の主、上条当麻だ。

「またそんな一人羽織みたいな恰好でテレビ見てたのかよ……ホント仲良いなお前ら」

呆れたようく咳きながらも、スーパーで買い足した食材を冷蔵庫に適当に入れていく上条。普通なら思春期真っ盛りの上条も神槍に対して羨ましいとか思うべきなんだろうが、少し想像してみて欲しい。

客観的に見てみると外国人少女二人がじやれ合っているようにしか見えないのだ、これで羨め、と言われても実感が湧いてこない。

しかし超がつくほど鈍感な彼の意見などアテにならない。

自分の頭の上で、神槍がスウスウと穏やかな寝息をつきながら、完全に眠りこけている事に気づいた時のインデックスの満山でもなさそうな笑顔を見れば、誰でも分かりそうなモノだが……。

この気持ちを本人が自覚し、また相手がその事に気づくのは、もつと

ずっと

未来のことになりそうである。

とあるデパートの少女演説（レディスピーチ）

八月三日。

今年の最高気温を記録したその日、外の強烈な熱氣から逃れるため駅前にあるデパート『セブンスマスト』はいつも以上の賑わいを見せていた。

「こつちこつち～！」

そんな中、比較的空いている階……女性向けフロアに佐天涙子の友人を呼ぶテンション高めな声が響く。その声に続くように、エスカレーターから御坂美琴と初春飾利もそのフロアへ足を踏み入れた。

元々この買い物は、最近連続虚空爆破事件の件で遊ぶ機会がない白井達を心配した美琴と佐天が企画したモノだったのだが、結局白井は仕事で来れない中途半端な結果になってしまった。

残念がる初春を宥めるように美琴は言つた。

「まあ黒子は残念だつたけど、適当にお土産買つて行けばいいでしょ。初春さんは見たいトコある？」

「うーん。特に決めてないんですけど――」

「うーいーはーるー！ ちよつとちよつとこれ見てー！」

「な、なんですかー？」

突然大声で名前を呼ばれた初春は、若干人目を気にしながらも佐天へ駆け寄る。すると佐天は『じゃーん！』とばかりに一つの下着を突き出してきた。それはとてもじゃないが中学生が使えるようなデザインではなかつた。活字に変換するのもはばかられるくらいに。

その事に気づいた初春は顔を真っ赤にして胸の前で両手をバタバタさせながら、

「むつ、むむムリムリ無理ですッ！ そんなの穿ける訳ないじゃないですか！ ていうか布よりレースの方が多いつてどういう事ですか！？」

「え？ そう？ これなら私にスカートめくられても堂々と周りに見せつけられるんじゃない？」

「無理です！ こんなのは穿いてる所見られたら死ねますからね私！ 悶死ですよ悶死！」

ありや残念、と微塵も残念さを感じられない調子で下着を売り場に戻す佐天。と、次に彼女の目に留まつたのは初春の後ろから来た美琴だつた。

「あ、御坂さん！なにか探し物とかありますか？」

「そうねえ、私は……パジャマとか？」

「あ、だつたらこつちですよ。さつき見かけましたから」

場所を知つてゐるらしき初春に先導される形で、様々な売り場を眺めながら移動する三人。女性フロアという事もあって、色とりどりの洋服などが並べられている通路を進む道すがら、美琴は右・左と目移りしながら、

「色々周つてるんだけどあんまりいいの置いてないのよねえ——おつ？」

突然、美琴の足が何かに縫いとめられたように止まる。その視線はディスプレイされてゐるパジャマに固定されていた。そのパジャマははつきり言つて、美琴の好みビストライクだつたのだが、

「ねえねえ！」このパジャマ凄く――

「うわあ見てよ初春このパジャマ、こんな子供っぽいの今時着る人いないよねえ」

「そうですね、小学生の時まではこういうの着てましたけど。流石に今は……」

グサツ。

二人の心無い言葉が美琴のハートに突き刺さつた。なんていうか、核心的な部分に。

しかし今黙つたら怪しまれてしまう。美琴は声音を不自然に高くして無理やり話を合わせようとする。

「そ、そうよねえ！中学生にもなつてコレは無いわよねえ!!うんつ、無い無い！」

グサツグサツ！

さらにハートに矢が突き刺さる、己で発射したせいかダメージがさつきの比ではない。もしこの場に美琴の心を投影できる機械があつたら、間違いなくそこにはハリセンボンみたくなつた彼女の姿が

映るだろう。

うつ…、と心理的ダメージによろめく美琴に気づかない二人は、佐天の提案により水着売り場の方へ行ってしまう。そのファンシーなデザインのパジャマの前には運命の悪戯か、美琴だけが残された。（ちや、チャンス！——フン、いーんだもん。どうせパジャマなんだから、他人に見せる訳じやないし……一瞬合わせてみるだけ！）

ここからかなり離れた水着店でまた騒いでいる二人を横目で確認した美琴は、チータービッグの俊敏さを用いてそのパジャマを引っ掴んで姿鏡の前に躍り出る。その鏡には自分的にバツチリな美琴の姿と、その少し後ろに立っている赤髪＆外国人＆ボロローブという奇怪な人がいて――

「ぎゃあ!?」

『いやそこは「きゃあ」と可愛らしく言おう御坂！つつか反応が失礼過ぎるツ！』

思わずそう背後から口に出してしまったのは神槍トシキ。ここ最近知り合い、いちいち美琴のカンに触るような言動をする少年だ。女性フロアにて何の違和感もないというのが既にムカツク。

『活字説明に悪意を感じるのって俺だけ……？——よつ、御坂。鏡の前なんかで何してんだ？』

「う、うつさい！少し洋服見てただけよ、アンタこそ女物しかないこんなトコで何してんのよ？」

言いながら、美琴はこつそり例のパジャマを背中に隠して映つているであろう鏡の前に立つ。これ以上己の趣味に口出ししされるのは勘弁願いたかった。

対する少年は美琴の問いに一瞬、ほんの一瞬『え、』と微妙な顔をしたが、すぐに元に戻し、

『えつと……ああそうだそうだ、ちょっと一緒に来た奴を探しててさ……そうそう、うん』

（いつ、言えない！同居してる女の子の買い物の付き添いなんて、絶対に言えない!!）

「へ、へえ、奇遇ね。私も今、佐天さん達のところへ行く途中よー

(う、後ろのパジャマ……ま、まさか見えてないわよね?くつ、今の位
置じや鏡に映っちゃつてるかどうか確認できないじゃない!!)

ははは、と乾いた笑いをぶつけ合う二人。互いに己のシークレット
情報を懸けた、必死な攻防戦だった。

と、そんな無駄に白熱している戦いに、水着を見終えて帰ってきた
佐天と初春が水を差す。

「あれ? 神槍さんじやないですか、すごい偶然! 神槍さんも買い物で
すか?」

『あ、ああ。まあそんなトコだ、いやー偶然だな偶然、はは……』

「ん? そういえば御坂さんはこんな所で何してるんですかー? ——
あ、ここつてさつきのパジャマのお店じや』

「う、うん! 他にちょっと気になつたモノがあつたから見てたんだけ
ど、やつぱりダメね。こ、子供っぽくて」

グサああアアツツツ!

ついに美琴のハートを矢が貫通した。彼女の脳内に出現したミニ
ミコトがダメージの許容量を超えるダメージを喰らい、死に絶える。
その衝撃に僅かに美琴の体が身じろいだ。その瞬間、彼女の誤魔化
すような笑顔と後ろ手で隠しているパジャマが神槍の目に映り込む。

『……?』

「あ、そうだ。私と初春はこれから洋服見に行こうと思うんですけど、
御坂さんはどうします?」

「そ、そうねえ。私はもうちょっとこら辺見て周ろうかしらねー」

「じゃあ見終わつたら適当に合流しましよう。私たちもそこら辺ウロ
ウロしてると思いますから。——行くよ初春!」

「あ、待つてくださいよ佐天さん!」

またドタドタと去つていく二人の後ろ姿に、思わず溜息をつく美
琴。そんな彼女の姿に神槍はふと訊いてみた。

『買わないのか? そのパジャマ』

「なつ!』

美琴の顔が驚愕と羞恥の色に染まる。なんだか顔面がやけに熱い
気がする。

一瞬躊躇したが、バレたものは仕方がないと割り切つた彼女はパジャマを前に持つてきて、慄然とした態度を取つた。

「な、なによ？なんか文句ある訳？」

『いや？別に。あのカエルのストラップが好みみたいだつたから、ファンシー系の奴が好みなのかなーって思つただけだ』

「ふあ、ファンシー言うな！別にいいじゃない、パジャマぐらい自分が好きなモノ選んでも！」

『そりやそうだ。ゴメンな変な口出しして——じゃあ俺もう行くから。買うなら早くしとけよ、また佐天たちが戻つてきちまうぜ』

そう言つて、踵を返しさつさと立ち去ろうとする彼の背中に、何故だか猛烈に負けた気分になつた美琴は思わず言い返していた。

「うつさい！ボロボロローブのアンタに言われたくない一つの！」

それでも、最後に首だけで振り返つた彼が放つたこの一言には、流石の美琴も何も言い返す事が出来そうになかつた。

『——俺は嫌いじゃないけどな、そういう可愛い趣味の女の子もさ』

相手が背中を向けて離れていくのを良い事に、パジャマ片手に色んな意味で震える美琴だつた。

美琴がいるパジャマ店から離れた神槍は、忙しく目を移らせながら足早にデパート内を歩いていた。

『……だー。つたく、どこ行つたんだよあのエセシスター』

思わず、思考が咳きとなつて口から漏れ出す。その間もキヨロキヨロと辺りを見渡すが、やはり純白修道服を着た見慣れた少女の姿は見当たらない。

確かに途中で知り合いを見つけてその場を離れてしまつたのは自分の失態だが、そこから相手も移動してしまえばハグれるのは分かるだろうに、と神槍は嘆息しながらさらに足に力を込める。周りに目立つ人材が多くて見過ごされがちだが、彼女は彼女で中々のトラブルメーカーだつたりするのだ。

うわあ一秒で魔道書を狙う魔術師とかのビジョンが浮かべられた自分がコワイ……と神槍は息を吐きながら、通路を曲がる。

と、突然壁に阻まれたような衝撃に足を止められる。

『うおっ』

「……っ」

どうやら人とぶつかってしまったようだ。咄嗟に後ろ足を出せた自分と違い、床に尻餅をついている高校生ほどのメガネの男子学生に神槍は手を差し出して、

『悪い。大丈夫か?』

「…………」

しかしメガネの男子は差し出された手を無視してスッと立ち上がり、そのまま黙つて立ち去ってしまう。

神槍は空中に取り残された手を引っ込めながら小首を傾げるも、すぐに入探しをしていた事を思い出し自分もその場から離れた。

「……」

赤髪を揺らしながら段々と小さくなるその後ろ姿を、ジツと睨むメガネ越しの視線に気づかぬまま。

「——やつぱり場所も時間も関連性が認められませんわね……」

もうウンザリするほど見直した事件資料を前に、白井黒子は脱力したようにイスの背もたれに頸垂れた。

愛しのお姉様こと美琴からの誘いを断つてまで177支部に残り、頭を捻つていたはいいがまつたく進まない捜査に、正直お手上げだった。

上下逆さになつた視界には電源付けっぱなしのテレビがあり、今も画面のキヤスターが『最近物騒な連續爆破事件が頻発しています。捜査も難攻しているようで、未だ犯人は特定できておりません』とか何とか真面目切つた表情で喋つている。

と、唐突に人影が視界に現れそのテレビ画面が見えなくなつた。

「ご苦労様。頑張るのはいいけど、体を壊したら意味ないわよ」

落ち着いた雰囲気の声と共に、お世辞にも行儀良いとは言えない恰好の白井に差し出される一つのカップ。それを持つて腕、体と目で追つていくとセミロングヘアに眼鏡をかけた女子高校生、白井と初

春の先輩である個法美偉このりみいの顔が映り込んだ。

一見物腰の柔らかそうなクールービューティーだが、その実態はlevel3の『透視能力クリアボイアンス』を持つ不良鎮圧などの現場職務もバリバリこなすべテラン風紀委員だ。

白井が湯気を立てるカツупを受け取ると、彼女は自分のデスクに腰掛け自らもコーヒーに口をつけながら、

「普通なら使用された能力が分かつた時点で書庫検索パンクで一気に絞れる筈なのに、今回は一体どうしたのかしらね」

「さあ…？ 書庫の不備、とも思えませんし…」

今回の事件捜査が一向に進まないのは、まさにそこが原因だった。実は一回目の爆破事件の段階で本来の学園都市における捜査の肝、使用された能力は特定できていた。

『量子変速シンクロトロン』。

アルミを基点に重力子を加速させ、一気に周囲に放出することで爆弾と同じような現象を引き起こせる能力。簡潔に言つてしまえば『アルミを爆弾に変える能力』だ。無数に存在する学園都市の能力の中では少数派の部類に入り、しかもただのアルミを爆弾にまで変速できるのはlevel4相当の力が必要で、該当者はただ一人。

書庫検索でここまで情報が入手可能な学園都市では、治安維持の主な仕事は犯人特定ではなく、どうやって居場所特定・拘束するかが主題とされている。

しかし今回の事件ではその勝手が一切通用しなかった。

ただ一人の該当者であつた学生は八日前から原因不明の昏倒状態に陥つており、犯行は不可能。従つて容疑者の候補はゼロ。八方塞がりとはこの事だ、と白井は半分以上本気でそう思う。

「levelの謎もそうですけど、あまりにも関連性が見えないのも気になりますの。犯人が人間である限り、どんなに無差別を装つても犯行時間・現場のチョイスに一定性が生じる筈なのですけど……」「うーん、もしかして……手口は一緒だけど同一犯じゃない、とか？」

まさか、と白井は個法の思い付きで言つてみましたレベルの仮定を切り捨てる。

犯人が複数だろうが、同時に量子变速を同じアルミに発動しようが、やはり1 e v e 1の壁は超えられない。二人一緒にマラソンに出てもタイムは二倍にならないのと同じだ。

「言つてみただけ。あまりに関連性が見えないから」

「急ぎませんと、また次の犠牲者が出るかもしませんわ」

「せめて手がかりを見つけないとね。同僚が九人も負傷しているし」個法の口から何気なく出た言葉に、白井の表情が『んっ!?』と一変する。もう少しで頭の上に電球マークが現れてもおかしくない様子だった。

彼女はポツリと、訝しげに呟く。

「九人? いくら何でも多すぎません?」

白井は思い出す。確かに神槍もフライパン片手に昨日、そんな事を言つていた気がする。

「言われてみれば……今まで何度も攻撃系の能力を使った連続事件は起きてるけど、風紀委員が9人も負傷したって話は聞いた事ないわね。多くて四人がやつとぐらいかしら、同時に大きな爆発に巻き込まれたとかで」

「しかも今回は別々に九人が負傷してますの。九回の爆破事件で、一回に一人ずつ——つ！」

はつ、という大きく息を吸う音が二つ重なった。

「まさかっ！ 犯人の目的、ターゲットって……！」

驚愕に目を丸くする二人に、突然鼓膜をつんざくような甲高い音が耳を揺らした。発生源はパソコン、その画面には危険を示すギラギラとした赤で『A_エLER_アT!!』と表示されている。

我に返った個法はすぐにキーボードへ指を走らせ、現状を確認する。それに呼応するように画面も次々と切り替わり、最終的には学園都市の地図のような絵を映し出した。

「な、なんですか!?」

「衛星が重力子の爆発的加速を確認つ、爆発の予兆よ！」

えつ……と白井の呼吸が停止する。

今まで連續虚空爆破事件で死傷者が出ていなければ、この監視衛星

による予兆の感知が出来た部分が大きい。量子变速にもタイムラグが存在し、大きな爆発を起こそうとするほど準備時間がかかるのだ。その間に避難させる事が出来れば――

「で、ですがつーこの観測地点は…!!」

冷たい機械が叩き出した爆発予想地点。その場所の名を示す文字を読み取った白井は、あやうく眼前のパソコンを殴り飛ばす所だった。

夏休み。避暑地。移動手段である駅前という立地。

これら全ての、大勢の人を呼び込む要因を兼ね備えたその場所の名は――

スカートのポケットの中で携帯が振動している事に気づいた初春 飾利は、すぐに耳に当てた。

「はいもしも――」

「初春ッ！今どこにいるんですの!?」

「ひやあ!?うう……し、白井さん…?」

突然耳元で上げられた大音量に耳をやられる初春だが、電話の向こうの白井は構わず続けた。

「例の虚空爆破事件の続報ですよ！衛星が重力子の爆発的加速をキャッチしましたの！」

え!?と硬直する初春だが、風紀委員として鍛えられてきた精神で無理やり体をほぐし、震える喉を叱咤して聞き返す。

「か、観測地点は？」

初春のただ事ではなさそうなその様子に近くにいた美琴と佐天も 疑問の目を向けるが、通話に全神経を注ぎ込んでいる彼女は気づかない。

「今近くの風紀委員と警備員を急行させています。神槍さんにも今 個法先輩が連絡しましたので、あなたも速やかに現場に向かいなさい。ただし犯人の目的は――」

「ですから観測地点はつ!?」

「つ…ああもう!」

一番伝えたい情報の伝達が上手くいかない事に焦燥感を煽られつつ、白井はなかばヤケで叫んだ。

「第七学区の洋服店『セブンスミスト』ですの！もそのまま爆発が起きたら、最低でも二〇〇人ほどの怪我人が想定される最悪の場所ですわよ！」

「え……」

周囲の気温が一気に下がったような感覚を覚えながら、初春はゆつくりと、デパートの壁に掘られた店名の文字へと目を走らせる。

そして思い出す、自分が、今、どこにいて――

腕にある盾のマークが刻まれた腕章は、一体何を守るための象徴なのかを。

自分は、何を変えたくて、何を守りたくて、この盾を背負っているのかを。

犯人の真の標的が風紀委員などと、夢にも思っていないその頭で。「つ――ラツキーです白井さん！私今ちょうどそこにいますっ！あっ、あと神槍さんも近くに！」

「何ですって!?初春っ!!犯人の狙いはあな――」

プツン……ツー……ツー……。

早くも客の避難について思案する初春の手で、通話は切られる。己の安全など少しも考えていないその小さな手で、通話は途切れる。

何よりも重要な情報を伝達する唯一の手段は、ここで切断されてしまった。

携帯をポケットに押し込んだ初春は、頬に伝う冷たい汗の感触を感じながら言う。

「御坂さん!!佐天さん!!」

「な、なに？一体どうしたつて言うのよ」

「だ、大丈夫初春？顔色悪いよ？」

何の事情も知らない美琴と佐天は、ただただ疑問でいっぱいの視線を初春にぶつけるばかりだ。彼女はそれを見つめ返す事で真っ向から受け止めて、口早に説明する。

焦りと緊張と、心の奥底に沈めた恐怖のせいかとてもマトモな状況

説明が出来たとは思えない。文法もめちゃくちゃだった筈だ。

だが彼女なりの全力を尽くす様子に、何かを感じ取つた二人は黙つてその言葉に聞き入つた。

そして、ゼエゼエと乱れた息が整うのを待つ時間すら惜しむ彼女の最後の言葉。

「そ、その……風紀委員でもない御坂さんと佐天さんにこんな事お願ひするのは筋違いで、間違つてるのも分かつてます。本当の私の立場なら一人もすぐに避難してもらうのが正解です——でもつ、今は時間がないんです！私にはそれだけの力もない!!お願いです御坂さん佐天さんつ、避難誘導に協力してください!!」

目元に涙を浮かせながらの初春の叫びが、フロアの壁や天井に反響して低い尾を引いた。

その音が止んだ後も、拒否されるのを覚悟しているように硬く目を閉じて小刻みに体を震わせている彼女に向けて、二人は短くこう言った。

「——当たり前でしょ!!」

学園都市第三位の強大な力を持つ少女と塵ひとつ動かす力も持たない無能力者の少女。

そんな些細な事など関係なく、二人は同じ位置に立つていた。

とある事件の攻防転身（チエンジャースナップ）

ローン。

木魚を叩いたような独特の響きを持つ電子音と共に、突然セブンスミスト店内全域に女性らしき声のアナウンスが流れた。

〈店内にいらっしゃる全ての従業員・お客様にお知らせです。只今、店内にて電気トラブルが確認されました。大変ご迷惑をおかけしますが店内にいらっしゃる皆様は、早急に風紀委員・警備員の誘導に従い店外への移動をお願い致します。店内にて電気トラブルが……〉

唐突なアナウンスの内容に一斉に不平不満をこぼし始める客たち。この涼しい空間から外の熱い空気に放り出されるのが許せないのでろう。近くの従業員にクレームをつける者までいるようだ。

そんな重苦しい空気の中、手を口に添えて精一杯声を張り上げる小柄な少女が一人。

「皆さーん！すぐによちらへ避難してくださいー！！正面入り口からお願いしますっ！」

「こつちでつすこつちこつちー！！」

「こつちの出口から外に、——つてつってんでしようが動けつてのア

ンタラには耳がないんかッ！！」

小柄な彼女の傍にいる二人の黒髪と茶髪の少女も大きく張った声を続けた。若干一名キレイているのが気になる客たちだったが、小柄な少女の腕にある風紀委員の腕章を見て渋々出口へと足を向ける。その動きがやけに迅速なのは茶髪の少女の前髪で瞬く危険度百パーセントの火花のおかげに違いない。暴力つて偉大。

その光景に苦笑いを禁じ得ない小柄な少女、初春飾利も短い手を精一杯振つて客たちの避難を誘導していく。次々に陽炎が揺らめく店外へと消えていく客たちの姿を見ながら、同じく避難誘導している佐天涙子は初春に耳打ちして、

「(……ねえこのアナウンスつて)」

「(……たぶん神槍さんがお店の人にお願いしたんだと思います。急に爆発するかもしれないなんて言われたらパニックが起きちゃいま

すから)」

「(……ふーん。あの馬鹿もたまにはマトモな事するじゃない….)」

「え?何か言いました御坂さん?」

にや、にやんでもないツ!と返した美琴は照れ隠しなのかさらに声を張り上げて、急げ的な内容の指示を飛ばしていく。その声(十ビリビリイ!というスペーク音)にさらに足を速める客たちの姿は、もはやどこぞの軍隊のようだつた。

予想以上の誘導効果のせいか、軽く二〇〇人はいた客たちはあつという間に店内から消えて残つてているのは初春たち三人だけとなつた。ガラーンとした店内に嫌な沈黙が舞い降りる。

寂しげな店内のどこからか今にも爆弾のカウントダウンが聞こえてきそうな錯覚をひしひしと感じる初春は、それでも一人に『先に避難しててください!私は逃げ遅てる人がいないか確認してきます!』と言い残して店の奥深くへと走つていく。

いつ人など簡単に吹き飛ばす爆炎と爆風が襲つてくるかも分からぬ、人工のジャングルへと。

「ちつ……」

店内に無数にある柱の陰に隠れるように立つてゐるメガネの少年は、苛立つた様子で舌を鳴らした。乱暴に耳につけていたヘッドホンを首にズラす。

客たちの避難が早過ぎる、と少年は吐き捨てた。

これでは、あくまで風紀委員の負傷は一般人を庇つたためという大義名分が使えない。今まで捜査の目を欺いていた手法が阻止されてしまった。

(出直す、か…?)

一瞬温厚な選択肢が浮かんだ少年だったが、その思考は彼の視界に飛び込んできた物体によつて吹き飛んだ。

少年が柱の陰から伺つていた通路、そこへ頭につけた花飾りが特徴的な少女が現れたのだ。少女は一軒一軒店の中へ入り、逃げ遅れた客がいなか確認している様子だつた。

少年は、それを見ていない。

彼の視線は少女の腕にある緑色の布、風紀委員である事を表す腕章に固定されていた。途端、少年の顔面が汚いモノを見たかのように歪む。

(何が風紀委員だ……アイツを助けなかつたくせに…!!)

ギリツと音が出るほど奥歯を噛み締める少年の手が、スッと制服の胸ポケットへと伸ばされる。

いや正しくは、

そこに隠してあるアルミ製のスプーンに。

(お前らが無能だから！だからアイツがあんな目に…ツ!!)

一瞬、ほんの一瞬。

少年の脳裏に、『アイツ』の顔が浮かび——消える。いつもの笑顔など面影もなく、病院のベットで泣きはらした瞳を下に向けてこの世の全てに絶望しているような、あの顔が。

助けをこう事も、慰めてと言う事もせずアイツは。ただ呆然と立つ事しかない少年に向けて、今にも消え去りそうな儚い声でアイツは言つたのだ。

——ごめん、ね……。

「つ!!あ……あああア!!」

怒りで震える指先を無視して、少年は足元に置いておいたカエルを模したぬいぐるみを乱暴に拾い上げる。その安っぽい背中にあるチャックを開いて綿だらけの中へスプーンを押し込み、閉じる。

たつたこれだけの動作で爆弾と化したぬいぐるみ。小さな布と綿で出来たその体を、少年は未だに逃げ遅れてた人を捜している風紀委員目掛けて……、

投擲する。

空中に弧を描きながら飛んでいくぬいぐるみは滑稽にも見えたし、戦場の空を闊歩する手榴弾のような悪寒を誘つた。

そして、

ポスン、と。間の抜けた音を発して『それ』は床に着地する。

黒いビーズで出来た簡素な瞳に、必死に声を飛ばして他人の事ばか

り気にかけている健気な風紀委員の少女の姿が反射した。

「……え？」

初春飾利は背後からの軽い落下音みたいな音に振り返った。

彼女は今、十字路のような通路の真ん中に立っている。合計四本の道の一つ、その中心に緑色の小さな物体が鎮座している事に気づく。何だろう、という感じで彼女は不覚にも近づき確認しようとする。少し近づくと、初春の視力でも『それ』の輪郭がはつきりと見えるようになった。

力エルを模したぬいぐるみ。

無機質な瞳をこちらへ向けて、まるで睨み付けて来るようになだれの通路にポツリと存在するぬいぐるみ。

セブンスミストは洋服店なためどこの売り場にもぬいぐるみなんてモノは置いていない筈だ。綺麗に掃除された通路にポツンとあるその姿は、誰がどう見てもその場の雰囲気から浮いていた。
（？）ぬいぐるみなんかがどうしてこんな所に……ッ！？

初春の顔面が一瞬にして青ざめる。

そうだった。連続虚空爆破事件の爆弾は、警戒を削ぐためかアルミニウムを入れたぬいぐるみが使われているんだつた。

あ、と。

どうしようもない声が遅れて漏れた。その声も静寂の大気に揉まれて消えて行く。

（う、そ。何で私、忘れて……！？）

今ごろになつて激しく襲つてくる後悔と早く逃げなければという感情がごちゃ混ぜになり、足への命令が上手くいかない。

そんな彼女を嘲笑うかの如く、ぬいぐるみからブン……という空間を震わすような音がして。間髪入れずにメキメキメキッ!!と金属が潰されていく光景をフラツシュバツクさせる壮絶な音が続く。

「ひつ」

初春の喉から自分が出したとは思えない本能的な声が飛び出した。頭が真っ白になる。歯の噛み合わせが上手くいかない。

それでも、唯一まだ自由に動く目で周りを見渡す。七メートルほど距離があるが、店の一角にあるあの壁。あそこに逃げ込む事が出来れば、まだ助かるかもしない。この足さえ動けば――

(あ)

けれど。

なのに。

動きかかっていた初春の足は止まってしまう。直前で思いついてしまった一つの可能性によつて、その場に立ち止まってしまう。

——もし、近くに逃げ遅れた人がいたらどうしよう。助けを求めて待つてはいるとしたら、どうしよう。

その葛藤が、僅かに残つていた生存の可能性をゼロにした。

虚空爆弾が、爆発する。

一秒後に確実に襲いかかる破滅を前に、初春は思わず目を閉じようとして、

『ういは——大氣の精よ、息づく風よ!! 疾く来たりて。
アーリア・スピランテス
エレメンタ・ウエンティ
アブ・イニキス・デーフェンダント
我が敵より我を守れ!!』

聞き慣れた、少年の声が耳に届いた。

その声は彼女の後方から。意味不明な英語でもない声と共に聞こえるのは全力疾走の足音。初春はこの状況で振り返るほどの余裕もないが、分かる。見えなくとも、分かる。その彼がどんな表情をしているか。どれほど急いでここまで駆けつけてくれたのか。容易に思い浮かべる事が、初春にはできた。

彼は。

どうせ普段の飄飄とした態度からは想像もできない、バカみたいに真剣な表情をしているに決まっている。二人で見回りしていたあの時、小学生ほどの少女が車にひかれそうになつて、いた所を助けた時のような、あの真面目切つた顔を。

呆然とする彼女のすぐ横を、その黒い影は一瞬で投げ槍のように追い抜き、そして止まる。まるで彼女と爆弾の間に仁王立ちするような立ち位置で。

同時に、爆弾が爆発し辺りに人肉を焼き尽くす爆炎とそれらによつて

生み出された灼熱の熱風がまき散らされた。

同時、少年の口からもやはり聞き取れない特殊な言語が発射される。

『——風陣結界ツ!!
リーメス・エリアーリス』

ギュオッ!!と密室である店内に巻き起こつた不自然な風の動きが初春の頬を撫でたその、瞬間。

轟おおオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!という爆音と共に襲い掛かってきた爆炎が、眼前に立つ少年の姿と初春の視界を埋め尽くした。

床に伏せるとか肺を焼かないように息を止めるとか、そんな理性的な行動はすべて頭から吹き飛んだ。初春にはただ体を縮みこませて甲高い悲鳴を上げる事しかできなかつた。

彼女は両目をぎゅっと閉じる。

これから襲い来るであろう、地獄のような激痛に身を固めていたが、

衝撃は、来ない。

いつまで経つても、何の痛みもやつては来ない。

「……？」

初春飾利は、おそるおそるまぶたを開ける。

すぐ近くに見知った少年の背中がある気がする。だが、涙が視界を遮り、ぼんやりとした像でしか捉える事ができない。その人影は爆弾があつた方へ右手をかざしているようであつた。こうしている今も爆炎が吹き荒れるその方向へ。

「ひ、あ……？」

少年の肩越しに見えるリアルな爆炎に身をすくませる初春だが、気づく。

爆炎が、何かに阻まれているように強引に受け流されていた。

まるで突き出された少年の手から不可視のフィールドが発生しているみたいに、少年と初春が立っている箇所だけは爆炎も爆風も避けさせられているようだつた。ただ横を通り過ぎていくだけの爆炎が、初春と、強風で暴れるロープを従えて片手を突き出している少年をあ

かあかと照らし出す。

終わりもまた、突然だった。

爆弾からまき散らされていた爆炎と爆風が唐突に消え去った。仕込まれていた重力子を吐き終えたのだろう。

そして少年と初春を守っていた不可思議なフイールドも爆発が終わつたのを見計らつたようなタイミングで、少年が手を横に振ると同時に消失する。爆風ではない、自然の摂理から外れた風が初春の髪をブワッと刹那的に上へ跳ね上げた。

ここまで来てやつと、初春はちゃんとした声を出す事ができた。

「神槍、さん……？」

『おう。怪我、してないか？初春』微笑混じりに振り返つた彼は、ペタンと座り込んでいる初春の頭に優しくポンと手を置くと、『もう大丈夫だ。よく頑張つた、こつから先は労働担当の俺に任せとけ』

『いやだからおうつて——ちよ、おい！何故にこのタイミングで胸ポカポカ始めちゃうの初春さん！あと地味に同じトコやられすぎると流石の俺も痛いんですがねえつて痛つ！』

遅いんですよバーカ！！、と特に理由のない初春ボディーブローが少年のおなかに突貫する。

「神槍さん！」

『いやだからおうつて——ちよ、おい！何故にこのタイミングで胸ポカポカ始めちゃうの初春さん！あと地味に同じトコやられすぎると流石の俺も痛いんですがねえつて痛つ！』

遅いんですよバーカ！！、と特に理由のない初春ボディーブローが少年のおなかに突貫する。

学園都市第七学区。

中高生の教育機関が集合しているその地区を、出鱈目な組み合わせに思える赤髪とローブを尾に引きながら神槍トシキは駆け抜けていた。

たつた今すれ違つた十人ほどの学生グループからは思い切り不審な目を向けられたが、神槍はさらに足の回転を速める。夏休み効果

か、路上には大勢の学生がいたがその隙間を縫うようにして走り続ける。

雑兵を蹴散らす戦国武将つてこんな気分だつたのかなああはは、と思考をトリップさせようとしていた神槍の耳に、飴玉を転がしているような甘つたるい声が届く。

耳に取り付けている小型無線機を通しての少女の声だ。

「えつと……次の十字路を右、突き当たりの曲がり角は左へ。次も左……あ間違えました右です！」

『……ねえわざとやつてる？ やつてるよね初春サン？』

左へ踏み出そうとしていた足をズザザツ！ と急ブレーキをかけた神槍は、弾丸のような速度のまま右に方向転換しつつ、

『で？ そのセブンスミストの防犯カメラに映つてた不審なメガネボーイってのはどんな奴なんだ？』

通話の向こうからキーボードを叩くようなカチカチという音のあと、

「ま、待つてくださいよ。こっちだつてやつと今警備員が到着して二次災害の危険性がないかチェックしてる最中で、しかも御坂さんと佐天さんに気づかれないようにこつそり書庫アクセスしてるんですから——あ、検索結果でました！ 名前は介旅初矢^{かいたびはつや}、高校一年で前科はないし。それで能力は……やつぱり。量子变速です！」

『おおつ、じゃあそいつが犯人つて事でいいのか？』

「はい。断言まではできませんけど……levelも二ですし、ガツチリ犯人像にハマる訳じやありません。でもカメラに映つてている限りでは、爆発直後に近くにいた量子变速者はこの人だけなんです。他の量子变速者にカメラの死角を渡り歩く趣味の人のがいなければですけど——あ、そこは右です

『了解。つて、初春？』ここまで来て言うのもなんだが、彼はずつと疑問に思つていた事を尋ねてみる。

『なんかノリでの店から突つ走つて衛星映像から犯人追跡しちゃつてるけどさ、警備員とか個法先輩に連絡しなくても良かつたのか？ あとで始末書パラダイスに放り込まれたりしない？』

「…………」

『黙つた!?』

「だ、だだ大丈夫ですよ、平気へいき。今になつて衛星映像つて使うのに特殊な手続きが必要だつたかなあなんて思いだしてませんからふふ。ぜ、全然兵器ですよウン」

『なんか字が違う!?あと声が震えてませんことアナタ!えつ、これつて俺も共犯つて事になるの!?』

『それこそ大丈夫ですつてば神槍さん!一人でやれば始末書なんかすぐに乗り切れます!!』

うわーん嵌められた!!と少量の汗と涙（努力の末とかそつちのじやない）を振りまきながらも、神槍は風力発電のための笑い声みたいにカタカタと音を鳴らすプロペラの間を駆け抜けていく。

と、ありふれた曲がり角を曲がつた所で、その視界に男子学生の背中が出現した。白と黒の制服に肩にかけられたヘッドホン、爆弾魔らしき少年の特徴と合致する人物が。

神槍は歩を遅め、さりげなく距離を詰めながら小声で無線機に呼びかける。

『（……おい初春? 目の前にそれっぽい奴がいるんだけど、そつちで確認できるか? 俺の直線状、十メートルくらい前を歩いている制服着た男子だ）』

『やつてみます。衛星映像から位置を補足して、最寄りのカメラで顔写真データ作成……これを書庫で検索にかければ…』

初春の声からしてもう少し時間がかかるらしい。その間も引き離されないように尾行を続けようとする神槍だが、無線機から聞こえてきた予想外の声にあやうくズツこける所だつた。

『あーいたいた、やつと見つけたわよ初春さん。さつきから警備員の人が話を聞きたいって呼んでるのに、こんな隅っこで何してんのよ?』

『（このタイミングで御坂嬢キターつ!?）』

『み、御坂さん!? べ、別に何もしてませんよー。私もすぐ行きますから先に行つて待つてください!』

〈端末抱えて無線マイク片手に何もしてない事はないでしようが。なんか怪しいわねえ……ん？ そういうやあのバカはどこ行つたのよ？〉

〈ギクッ！し、神槍さんはと、トイレに……？〉

〈トイレだとしても長すぎない？ もう最後見た時から十五分は立つてるわよ〉

〈きつ、きつと大きい方してるんですよ！ 金魚よりキレが悪くて苦戦してるんです！〉

〈そつか、それなら仕方ないわね。納得だわ〉

『いやそんな理由で納得すんなよ！お前ら普段俺のことどんな目で見てるんだ!?』

思わず全力でそう叫んでしまう神槍。おそらく通話の向こうでは突然聞こえた彼の声に美琴がギョつとした顔を浮かべている事だろう。

しかしそんな事は大した問題ではない。

真に問題なのは、今の叫び声で前方を歩いていた少年がこちらに気づいてしまった事だ。

神槍の不味つたという視線と、振り返つてギョツとしている容疑者の少年の視線が交差する。だが今ならただの変な人で済むかもしれない。いやそれはそれでダメージデカいけど。

そう考えた神槍だったが、視界の端にチラついた己の肩にある緑色の布に、自分で自分を殴りたくなつた。緑色を基調とした生地に盾のマークが刻まれた風紀委員の腕章だ、これでは私は風紀委員です、と言外に言つて いるようなモノである。それも、何を仕出かすか分からぬ犯人の前で。

（やつ——ベ……バカか俺は！ 何で付けっぱなしにしてんだ！）

「！……風紀委員か！」

相手の少年もその事に感づいたのか、メガネ越しに神槍の顔とその肩にある腕章を何度も見比べたかと思うと、踵を返して。つまり神槍に背を向けると全速力で走り出した。慌てて神槍もその後を追う。

前方で腕を振り乱しながら走る少年の背中からは決して目を離さず、自分も人だかりの間を駆け抜けている神槍は苦汁を舐めさせら

れる気分で無線機へ告白する。

『悪い初春つ、気づかれちまつた!!俺も追つてるので、そつちからも衛星で追尾しといてくれ!』

＼…………＼

『…………?初春?』

しかしいつまで経つても返事は返つてこない。

不審に思い無線機を耳から外して見てみると、小指の先ほどのサイズの液晶画面には通話が切られている事を表す文字が表示された。もしかすると、さつき美琴が言っていた警備員への事情説明に連れていかれたのかもしれない。

原因など分からぬ。とにかく今重要なのは、もう端末や機械の目を使つたサポートが受けられないという点だ。

『くっそ!』度重なるイレギュラーに苛立ちを隠せない神槍は、役に立たなくなつた無線機をローブの中にねじ込みつつ、

(こうなつたら雷の矢一本ぶち込んで氣絶させるしか……奴が苦し紛れに変な事をしない内に!)

前方を走り抜けている少年の背中に狙いを定め、無詠唱で発動した雷の矢を掌を媒体に発射しようとする神槍だが、

その手は、止まる。

気づいたからだ。今まで全力疾走のために振られていた筈の少年の右手が、真横に伸ばされている事に。まるで路上にある何かに掌を向けるような恰好。

『何、だ?』

ギチギチ、と。神槍は何か、嫌な予感がするのを振り払つて少年が手を向けるそこへ目をやると、そこには何の変哲もない自販機があつた。

しかしその長方形のボディを見た瞬間、確実に神槍の喉は干上がりその両眼は大きく見開かれる。

何故だろうか。

自販機の中には、何の害もないアルミ製の缶ジュースが山ほど入つてゐるだけなのに。

『……っ！』

「これでも喰らえ！腐れ風紀委員がツ!!」

少年が——爆弾魔・介旅初矢が、吠えた。

爆発のタイムラグなど、微塵も感じられなかつた。

ゴン!!、という爆発音。

黙々と鎮座していた自販機の背面から、勢いよく火が噴いた。

一秒遅れて四角い金属質の本体がさらに爆発し、自販機全体が前に傾いた。路上に対して完全に横転した自販機は、勢いを衰えさせる事なく空中にその身を躍らせる。火ダルマとなつた金属の塊が超低空を滑空するように直進し、その先には標的である神槍が立つてゐる。（あの野郎つ……ただ爆発させるだけじゃなく、爆風の方向を調整して吹き飛ばしやがつたのか!!）

炎を纏いこちらに猛然と突き進んでくる金属の塊は、もはや口ケツト弾頭さえも連想させた。咄嗟に避けようとする神槍だが、後方に呆然と突つ立つてゐる数人の小学生ほどの子供の存在に気づき、ギリギリのタイミングで動作を変更する。

『ツ、^{フランス}風花・^{アエリアーリス}風障壁!!』

魔力で意図的に操作された風が神槍の体を包み込んだその瞬間、砲弾と化した自販機が風の膜に突貫する。ガギンツ!!という壮絶な激突音。

ボーリングのピンのように空へ跳ね上げられたのが、火ダルマ状態の自販機の方だと野次馬が気づくのに数秒を要した。

『……』

ヒュンヒュン、と空気を切り裂きながら空中で回転する自販機が日光を遮る壁となり、真下にいる神槍は昼間にも関わらず影に包まれる。スポットライトの逆の状態のようになつた神槍の表情は、垂れ下がつた赤い前髪に隠れて確認できない。

彼は、ただ、小さく口を動かし、片手を天高く上げる。

その華奢な手に、轟々と燃え盛る炎を纏いながら落下してきた大質

量の自販機が触れた瞬間、
『断罪の剣……』
インペルフェク・エンシス

ザクツ、と。彼の手から伸びるように生えた光刃が金属の塊をあつさり貫いた。中心を串のように貫通された結果なのか、落下していた筈の自販機の動きがピタリと停止する。

『……けるな』

燃ゆる自販機を串刺しにしているその手を、彼は無造作に振る。あらゆる個体を原子レベルで気体に変える光剣を一度と言わず、二度三度と振り乱す。常人では残像すら見えない速度で、四度五度六度七度八度——胸の奥から湧き上がつてくる怒りをぶつけるように、斬り続ける。

やがて、その剣が完全に降ろされた頃には、自販機など欠片も塵も残さず消失していた。厳密に言えば自販機に含まれていた物質を全て蒸発させたのだが、そんな事はどうでもいい。

右手に罪人を斬る意を持つ光刃を生やした少年は、告げる。

『ふざけるなよ、介旅初矢。俺の同僚を殺しかけた次は自分が逃げ切るために子供を利用する?——ふざけるな』

ギラリと、剣呑な光を秘める両眼を動かすと、狭い路地に転がるようにはげ込む介旅の姿が映り込んだ。

彼が逃げ込んだ路地をその視線だけで爆破する勢いで睨み付けながら、神槍は誰にも聞き取れないほど小さく何かを呟く。

『…………』

途端、魔法使いの少年が発した声の振動に呼応するように大気が揺らいだ。

と、

ゴガツ!!という衝撃波じみた爆碎音。

それが大地を踏みしめた足音だと野次馬が気づいた時には、彼の姿は忽然と消えていた。

とある廃墟の軽銀爆物（アルミボマード）

第七学区の片隅に、利便性がなきすぎてもはや不良でさえ寄り付かない廃墟がある。

十階建ての見るからに脆い印象を受ける廃ビルだ。窓には亀裂が入つており、所々では完全に壊されていて大穴が開いていた。また、斬新かつ過激なスプレーアートが施されているアスファルトの外壁の傍には小さな看板があり、工事会社のロゴの下に『近づかないでっ！』的な注意書きが鎮座している。

外見もさる事ながら、中を覗けばまだ昼間だと言うのに薄暗い床。そこに散乱しているガラスの破片や埃、材料費と運搬費を天秤にかけられ結果そのまま残されている鉄パイプがそこかしこに転がっているような薄汚い建造物。

そこへ半ば転げ込むように逃げ込んだ介旅初矢の口から、意図せずして悪態が漏れた。

「くそっ！くそっ！何なんだよ……アイツは一体何なんだ！」

もつれそうになる足を必死に動かし、彼は上へ上へとカラソカラソと甲高い音をかき鳴らしながら頼りない鉄階段を昇つて行く。酷く耳につく自分の足音にさえ怯えるように、介旅は髪を振り乱して廃墟の中を駆け昇つていく。

その間も脳裏にこびりついて離れないのは、今まで散々痛めつけてきた筈の風紀委員ジャッジメントである一人の少年の顔だった。どういう経路でどういう方法を使つて自分を突き止めたのか、あの少年は完全に介旅を犯人だと認識して追い駆けてきた。

それを認めた介旅は咄嗟に、罪悪感などの邪魔な感情が湧いてくる前に振り切ろうとした。その場で最も効率的に、確実に相手を潰せる手段を用いて。小さな子供まで計算の範疇に入れて。

だが、少年は倒れなかつた。

何らかの能力なのだろうが、アレは柘が違うと肌で感じ取つた介旅は逃げるしかなかつた。無様だろうが醜かろうが、あの時の介旅の頭には逃亡という選択肢しか浮かばなかつたのだ。

能力の格差を見せつけられたからだ。チカラの差を自覚させられたからだ。

だから、決して。

路地裏に逃げ込む直前にチラリと見えた、少年の真っ直ぐ過ぎる眼差しから逃げたかった訳じやない。

「はつ…はつ…くそつ！」

もう一度吐き捨てて、介旅の足はようやく止まる。

慌てて見渡せばいつの間にか五階まで来てしまったらしい。誰一人としていない事を確認してから、介旅は膝から崩れ落ちるように座り込んだ。ゴミやホコリがブワッと舞うが、彼はそんな事にも気づけない。ただ乱れた息を一心不乱に整えながら、思考を張り巡らせる。（どうすれば……僕は次にどうすればいい!?）

当然ながら廃墟に冷房設備などある訳もなく、もう夕方だと言うのに廃ビル内の気温は軽く三五度は超えている。事実、介旅の全身からは汗が吹き出し、制服が肌に張り付く不快感を味わっているだろう。しかし彼は構わず考え続ける。今の彼の立場を冷静に考えれば、暑さなどに構っている暇はない。

風紀委員にバレたとなれば、同じ治安組織である警備員アンチスキルにも伝わっていると判断するのが自然だ。もうノウノウと機会を狙つて犯行を行なう、なんていう余裕は許されない。学園都市そのものが鬼の役の鬼ごっこ、タイムリミットは己が捕まるまで……何もかもが介旅という個人で相手できる範疇を超えてしまっている。

（ちくしょう！僕はまだつ、捕まる訳にはいかないのに！）

床には鋭利なガラスの破片が散乱しているのにも構わず、介旅は拳を思い切り叩きつけた。冷たい汗が顎を伝つて金属質の床にシミを作り出す。

介旅初矢には、どうしても捕まる訳にはいかない事情がある。

何よりもまだ、彼が犯罪にまで手を出してまで叶えたい『目的』が達せられていない。風紀委員への襲撃など介旅にとつては過程でしかない。

『復讐』を果たすためには、まだ――足りない。

「……そうだ、とりあえずはさつきの風紀委員を始末して……は、はは。そうさ、僕はこんな所で止まる訳にはいかないんだ……！」

うわ言のように呟く介旅の瞳に嫌な光が灯る。手足に力が、戻る。ゆらゆらと、ゆっくりおぼつかない拳動で立ち上がる。その目を走らせ、改めて、何故わざわざ手頃な死角ではなく、こんな学区の隅にある廃ビルに逃げ込んだかを思い出す。

実のところ、彼はこの廃ビルに何度も足を運んでいた。だからあんなに闇雲に走つても上へと昇る事ができた。構造を完璧に覚えてしまうぐらい、介旅初矢はこのビルを自分好みに改造していた。

己の能力を一〇〇パーセント……いや、それ以上に引き出せるフィールドへと。

無能な風紀委員たちを存分に痛めつけられる処刑場へと。

「くつく……」

その様を想像して口角を釣り上げる介旅。ふと、その脳裏にチラツと『アイツ』の顔が横切る。

それは、彼が一番この場では思い返したくない顔だった。

それは、彼が最も敏感に反応してしまう人の泣き顔だった。

——ごめん、ね……。全部、私のせい……だよね……。そう思わないや、やつてらんないよね……。ね？アナタもそう思うでしょ？そう思うつて、言つてよ……っ！

「!!」

しかし介旅はすぐにその光景を頭を振り乱す事によつて搔き消す。搔き消せた事にしておく。彼をここまで駆り立てさせる『何か』、それを思い出すのは全てが終わつてからでいい。

介旅は身を翻し、その場から移動しようとする。そんな彼の耳に、ガツシヤアア!!という窓を突き破ったようなガラスの悲鳴が響いた。

「なつ……!?」

慌てて部屋の格子を開け放ち、窓から首を出して音の発生源と思われる下を見ると、二階の窓ガラスが粉々に割られていた。しかし破片は外の道路には一つも落ちていない、全て中側にまき散らされたと考え

えるべきだ。それに加えて、窓にぽつかりと空いた大穴。そのサイズが一人の人間がちょうど通れるモノに見えるのは、介旅の幻覚だろうか？

そして。

極め付けに、窓から身を乗り出した直後にチラリと見えた気がする、赤い髪。

（まさか…来たっていうのか？——くそつ、こつちはまだ準備中だつていうのに!!）

介旅は何かに突き動かされるみたいに、窓から弾丸のように離れ行動を開始する。が、その足取りは重かつた。疲労・罪悪感・罪への重圧・人としての理性——全てが彼の敵だつた。

けれど、彼は動く事を止めない。止める訳には、いかない。

介旅初矢の真の復讐劇は、まだ始まつてもいいのだから。

相手の陣地で動き回る時に一番の障害となるのが、侵入者が必ず通る事になるであろう入り口のトラップである。

奇しくも、その作戦の組み立て方は戦国時代から何一つ変わつてはない。堅牢な壁を築いて敵を寄せ付けないのも良し、わざと侵入させて物陰から狙撃するのも良し。玄関というものは宿主に都合が良い様に出来ているモノなのだ。逆に、これからその陣地に飛び込む人間にとつては最もネックな障害と言える。

だから、外から廃ビルを見上げる神槍トシキにはそもそも玄関から攻略するつもりなどサラサラない。ここは現実であつて、ルールとプログラムに縛られたRPGの世界ではないのだから。裏ワザもショートカットも思いのままだ。

トン、というあまりに軽い跳躍音。

神槍は大地を踏みしめちようど二階の窓の高さまで飛び上ると、ロープで体を包み込むような恰好のまま薄い透明な窓に体当たりを繰り出した。耳元での甲高い破碎音を聞き流しつつ、スタッフと二階の床に着地する。一度ロープをはためかせると、無数のキラキラとしたガラスの破片が床に転がった。

それらを神槍は気にも留めていない。

ただ、彼の意識は天井……さらに上層のフロアに向けられている。

(上だな……)

英国人にしては珍しい、真っ黒な瞳の眼光がより一層鋭さを増す。当たり前のように血と涙が蹂躪する世界にドツブリ浸かつた人間にしか分からぬ、人が狼狽えた時に発する特有の『ニオイ』。それを感じ取つた神槍はすぐさま辺りを見渡し、上の階へのルートを模索する。決して大きいとは言えない広さの部屋の片隅に、申し訳程度に鉄板とパイプで作られた今にも崩れそうな階段があつた。迷わず神槍はそこへ足を踏み出す。

カラーンカラーンカラーン!!という鉄板を踏みつける甲高い音が連續した。そうしながら、何段かすつ飛ばして駆け上がつていると——突然に彼の表情が一変する。

三階へ続いている筈の踊り場。

上下の関係で見えなかつたその上から、まるで雪崩のように転げ落ちてくるアルミ缶に気づいたからだ。

それも一つや二つの話ではない。

咄嗟に神槍は数を確認しようと目で追つたが、彼の動体視力を持つてしても三〇までが限界だつた。——まさに無数。階段の足場となつてゐる鉄板を覆い隠さんとするほどのアルミ缶が、神槍目掛けて降りそそぐ。

『ツ!!』

中途半端な位置まで階段を昇つてしまつた彼の左右には冷たいアスファルトの壁があり、とてもではないが回避できそうなスペースはない。自ら後ろへ身を投げて二階に転げ落ちたとしても、それは单なる時間稼ぎにしかならない。かと言つてこのまま立ち往生していっては、上方から襲い掛かつてくる無数のアルミ缶をモロに浴びる破滅が待つてゐる。

不可避な数の暴力の前に、確かに彼の表情は一変した。

……ただし。

表情が変わつたからと言つて、

それが驚愕や恐怖を表しているとは限らない。

むしろ逆

彼の心情を表すかのように奥歯には噛み碎く勢いで力が込められており、全身からは見えざる敵意が漏れ出ている。その口元が、僅かに蠢く。

(ナメンジヤねえ……)

上から降つてくるのは缶の見た目を借りた凶悪にして最悪なる凶器。右も左も、後方にも回避は不可能。八方塞がりと言つても間違いない状況を前に、しかし、神槍は足を止めなかつた。

回過
防衛

そんな甘い事ばかり言っていたから、初春飾利は死にかけたんだ。自販機の時だつて、あと一瞬でもタイミングが遅れていたら、凹に使われたあの子供たちは灼熱の金属に跳ね飛ばされていた。そして、結局、あの子たちは不穏な空気を感じ取つて泣き出してしまつた。

ギリツ、と。力を込め過ぎたのか握った拳の中で嫌な音がした。（もう甘つたるい事を言つていられる段階は過ぎてんだ。あの子たちは何の関係もなかつたつてのに……ツ！こんな事でいちいち立ち止まつていられるか!!）

甫✓

神槍トシキは臆することなく、無数のアルミ缶の濁流へその身を突撃させる。

「ア……おお刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀刀!!」

当然、爆発の予兆があつた。

ブン、という羽虫が耳のすぐ傍を横切つたような不快な音がそこから耳を撫で、直後にはメキゴキッ！という重力子が収束する影響でアルミが湾曲する音が連続した。ただのアルミ缶としても、神槍の視界は無数のカラフルなラベルで防がれ、床に転がつたアルミ缶に足をすくわれそうになる。

だけど、神槍は前へ進む事をやめなかつた。階段を駆け上がる事を放棄しなかつた。

あの時、爆弾が詰め込まれているぬいぐるみを前にしたあの瞬間。初春飾利が味わつた恐怖はこんなモノじやなかつただろう。

あの時、犯人に囮にされ、自分に迫る火ダルマのような自販機を見たあの瞬間。子供たちが感じ取つた危機感はこんなモノじやなかつただろう。

『魔法の射手・連弾・光の199矢!!』

咆哮に紛れるように魔法使いの口から彼の武器とも呼べる単語が飛び出した。

刹那、彼を発射点にして全方位に魔矢が発射される。光の帯を引く大量の魔矢が、その一つ一つが軌跡を描きながら爆発まじかだつた無数のアルミ缶を射抜く。

ズパーン!!という落雷のような轟音が炸裂する。

もう、爆風だの爆炎だのを防ぐ事は考へない。もつと根本的に、攻撃的に、爆発そのものを防ぐやり方でなければ元凶にはたどり着けない。そう判断した神槍が取つた行動は至つてシンプルだつた。

爆発などする前に、基点であるアルミ缶を叩き潰す。

初春によると、犯人である介旅初矢の能力は『アルミを爆弾に変える』モノであつて、『アルミを爆発させる』モノではない。要は、爆発一コンマ前の爆弾を作る事によつて即座に爆発させているだけなのだ。

そこには必ずタイムラグが発生する。
そして、その隙をみすみす見逃してやるほど神槍トシキは優しくない。

光の魔矢は次々とミシミシツ!という爆発まじかである事を知らせる音を鳴らすアルミ缶を貫き、沈黙させていつた。その様は圧巻の一言に尽き、神槍は一つ一つ丁寧に有り得ないほどの命中率でアルミ缶を撃ち落していく。

それでも、やはり撃ち漏らしは出てくるものだ。
ドツ!と小規模だが完全なる爆発が巻き起こる。

爆炎の熱が神槍の頬を撫で、爆風が体勢を崩そうと彼の背中を押した。撒き散らされたアルミ缶の破片が階段の鉄板そのものに突き刺さり、彼の足場を激しく揺らした。

けれど、

『ぐつ——魔法の射手・光の99矢!!』
サギタ・マギカ ルー キス

俯きかけた顔を、上げる。前を見る。

彼は進むことをやめない。後退など微塵も欠片も考えない。そんな暇があるなら一本でも多くの魔矢を操り、少しでも爆発を防ごうと指示を飛ばす。ズパーン!!という炸裂音と轟ッ!!という空気を喰らう音が絶え間なく彼の鼓膜を揺らし続けた。

光と爆発のせめぎ合い。

神槍を中心として展開される攻防戦。小規模な爆発が何度も彼を襲い、何条もの閃光がアルミ缶を食い潰す。そんな危険極まりない空間を、しかし彼は突き進む。犬歯をむき出しにしてロープを焼かれながらも、進み続ける。

前へ。

ひたすら——前へ！

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオ!!』

そして、ついに。

突如、彼の足場が一気に広がった。階段を踏破したそのつま先が、フロアの床に触れる。半ば転げ込むようにフロアにその身を躍らせた神槍の背後では、ちょうど階段が爆発の衝撃に耐えきれず倒壊した所だった。

(一段階目はクリア、つて所か)

すぐ後ろに広がっている変わり果てた階段の光景に、神槍の背筋にヒヤリとした寒気が駆け巡った。未だに爆発の影響で揺れる床に片膝立ちの恰好で身体を休ませていた彼だが、一瞬天井に目を向けてと思うと、膝に手をつきながらも立ち上がる。壁の隙間から僅かに入つてくる日光が彼の白い肌を照らし出した。

安堵感に浸るのもそこそこに、神槍は速くも次のフロアへと上がる

階段へその足をかけた。

薄暗い暗闇に包まれる、冷たいアスファルトと金属しかない通路。一度やり過ごせたからと言つて、次のトラップも突破できるという保証はどこにもない。

いちおう防御の意味が何重にも込められた魔法障壁を身に纏つて
いるが、それにしたつて絶対ではない。許容量を超えるダメージを喰
らえば、直に彼の華奢な身体に炎が降りそそぐ事になる。魔法の元と
なつている魔力にだつて限界はある。

魔法という薄っぺらい皮が剥がれてしまつたら
神槍トシキはただの人間でしかない。

銃弾で心臓を貫かれれば死に、ともすれば風邪をこじらせて寝込むことだつてある——彼の実態はそんな貧弱な生き物だ。

けれど、魔法使いの少年は迷わず駆け出す。

暗闇に包まれた不気味な空間へ進んでいく先住の口元は、不審に至

て
る。
ハ
チ
シ
カ
ク
ハ
シ

この程度の困難で物怖じしていたら、不可能まほを可能うがにする者なんて名乗つちやいない。

數分後。

あぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶぶーっ！という人として大事な何かを捨てさせる声を上げながら、薄汚い地面をダイナミックに転がる魔法使い（自称）の少年の姿が七階のフロアにあつた。

いるらしい。

彼が飛び出してきた階段の出入り口からドドドッ!!という爆発音が聞こえる事から推測するに、どうやらギリギリ潜り抜けれたもののトラップの爆風で煽られ、予想以上のスライディング着地になつてしまつたらしかつた。

ゆらゆらと、神槍は疲れ切つた老人のように立ち上がりちよつぴり浮かんでくる涙を指ゴシゴシ拭つているが、目立つた外傷はないようだ。むしろ心中では、トラップより転んだ時の方がダメージ甚大つてどうなつてんだハンニンツ!!と八つ当たり的思考が渦巻いていた。

『くそ。ああ、インデックスが恋しい……（癒し成分的な意味で）』サラリと純真少年的欲望を呟いた神槍は、げんなりとした表情で天井を見上げる。

犯人が身を潜めていないかという確認の意味もあつて律儀に一階ずつ攻略して昇つてきた彼だが、いい加減数えきれないほどのトラップの応酬にウンザリしてきた所だ。

単純にアルミ缶が天井から降つてきたり、床に捨て置かれたみついに偽造されたアルミ製のスプーンが突然爆発したり。果てはアルミホイルが壁一面に貼つてあつて一斉に起爆した罠などもあつた。どちらもがよく考えられ、人間としての死角を突いたえげつない内容で、犯人のある種の覚悟が感じられるモノばかりだつた。

（けどまあ、こんなボロボロ廃墟に隠れたのは失策だつたよな。建物の倒壊を気にしてテメエでテメエの能力を抑えなきやなんねえんだから）

こちら辺が玄人と素人の境目つて言つた所かな、と神槍はどうでもよさげに思つた。

犯人の失策のことではなく、

平氣で人を殺せる罠を扱うような人間が、素人に見えてしまう自分は一体全体『何』なのかという事を。

『さて……次だな』

幸い七階のフロアには何のトラップもないらしい。床には、どこぞの不良が落としていつたらしき小銭の一円玉と廃れた鉄パイプぐら

いしかない。罠があるとしたら、八階に続く階段にたっぷり、という事だろう。

だー。また地獄の爆弾処理事務の始まりですかそうですか、と文句をタラタラ零しつつ神槍は部屋の隅にある階段に目をやつた。

何度見てもパツとしないその外見にさらに神槍の表情がげんなりとしたモノに変わる。鎧びついた鉄板にホコリを被つている手すり。そこに置かれた肌色の五本の指——

『?』

神槍が何か思う前に、肌色の手は手すりを下に向かつて滑つて腕、肩、体と持ち主まで完全に見えるようになる。ヒヨロイ印象を与えてくる体を制服で身を包み、首には持ち運びに適なさそうな大きめなヘッドホン。黒髪に紛れるように黒縁メガネをかけたその少年は、無感動な視線をこちらに送ってきた。

『よお、昼間ぶりだな』

オレンジ色の日光を背に浴びながら、あえて会話から入る事にした神槍は、

『介旅初矢、だな？公務執行妨害殺人未遂器物破損その他モロモロかつ個人的にムカツクから拘束する。抵抗するな、とは言わねえよ。その時は実力行使に移るだけだ』

「……………」

対して、しばらくの間沈黙を貫いていた介旅の口から、耐えきれないみたいな様子で言葉が漏れる。

「……お前らはいつもそうだ。いつでも自分たちが正しいと信じ切つてる顔を向けてくる。そんな事は全然ないって言うのに」

介旅の声は低く、ただ低くその場に響いた。まるでそうしなければ感情が爆発してしまうみたいな、不気味なトーンの声だつた。

階段の中腹で止まっている介旅は、見下すように光が灯つていない目で風紀委員の腕章をつけている神槍を眺めながら、

「たかが校内の揉め事にしか手をつけられないくせに、権力者面するな。いざとなつたらお前らは弱者を見捨てるだろうが……！」

ふつふつと、介旅は続ける。

「お前らは『アイツ』を見捨てた。助けるどころか、お前らは——ツ!!」

『？ 何言つて——』

神槍の言葉を遮るように、介旅は言つた。のつぱりとした、ゾツとするぐらい冷たい声で。

「要約すると、死ねつて事だよ。腐れ風紀委員が」

(……ツ!?)

言葉と共に、介旅は何かを神槍へ向けて軽く投げつける。

アルミの何かかと身構える神槍だが、それがはつきりと何なのか確認した途端、一気に毒氣を抜かれたように肩の力を抜いてしまう。その間に介旅は階段を駆け上がり上の階へ消えた。

一円玉。

介旅を追いかけなければと頭では分かつているのだが、何故か神槍は足元にチリンと音を鳴らして落ちたその丸いフォルムに見入ってしまっている。アルミ缶でも、スプーンでもなく、正真正銘ただの一円玉だ。そう、気持ち悪いほど軽くて小さい銀色のアレである。

もし介旅が言つた事が嘘でないとして、己の能力を武器に実行する気ならアルミがなければ話にならない。なのに、何で一円玉?と首を傾げながら、思わず屈みこんで神槍はそれを拾い上げる。

『……ツ!?

そこまでして、やつと彼は氣づいた。咄嗟に手に持つた一円玉を投げ捨て、後ろに飛び下がる。そうだ、一円玉の約九〇パーセントはアルミニウムが占めているのだつた。

何故今まで忘れていたんだと自分を叱咤すると同時に、神槍は感心に舌を卷いた。今まで散々仕掛けられていたアルミ缶とスプーンを使つた罠の数々は、全てこの為のブラフ。アルミが含まれているモノなんて世の中には星の数ほどあるのに、知らず知らずの内にアルミ缶とスプーンだけが相手の武器というイメージを植え付けられてしまつたのだ。

悔やんでも悔やみきれない失態。目の前で早くもメキゴキツ!!と爆発の予兆を見せる一円玉を前に、神槍は舌を噛む勢いで防御のための詠唱を開始する。

(チイツ！間に合うかッ！?)

『エレメンタ・ウェンティア・アーリア・スピ
大気の精よ息づくか——え？』

だけど、

なのに、

神槍の生命線である筈の詠唱が中断される。驚愕のまま凍つてい
る彼の視線は、己の足元に向けられている。それほど、コンクリの薄
汚い床に広がっている光景は衝撃的だった。

そこに、

びつしりと、床を埋め尽くすほどの数の一円玉が転がっていた。
神槍が身じろぐように少し足を動かすだけで、複数の一円玉にぶつ
かりチリンチリンと小気味いい音を鳴らした。

(……嘘、だろ。何で今まで気づけなかつたんだ!?)

両眼を見開く神槍を尻目に部屋に君臨する一円玉らは一斉に震え
出し、爆発のカウントダウンが否応なく始まる。まるで大気全体が搖
れているみたいな振動が、靴底から伝わってきた。

神槍は知らない。

大量の一円玉がただ床に転がっているだけと見せかけるために、介
旅があらかじめ心理学の観点からランダムに配置していた事を。
魔法使いは知らない。

床や壁の接合部を先に爆破する事で、介旅は倒壊のリスクを考えず
にフルパワーのグラビトンをまき散らせる事を。

(しまつ…!?)

防御など、考える暇もない。

直後、あらゆる音が吹き飛ばされた。

予定通り、まずは壁付近が爆破され床そのものが浮いた状態になつ
た。数瞬後には床全体が絨毯爆撃のように炎と風で破滅の限りを尽
くされ、七階の窓からは黒い煙に紛れて紅蓮の炎が噴き出した。六階
から下のフロアには大小様々なコンクリの破片が降りそそぎ、すべて
を巻き込みながら凄まじい速度で落下していく。

破壊の二文字が君臨する世界に一人の人間が生きられるだけの余
裕はなく——

「…………はつ」

かろうじて落下せずに残つて いる階段の手すりにもたれかかる、介
旅初矢の吊り上がつた口元が全てを物語つて いるようだつた。